
仮面ライダープロト～闇を使う守護者～

天の道を行く妄想者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダープロト〜闇を使う守護者〜

【Nコード】

N0900R

【作者名】

天の道を行く妄想者

【あらすじ】

世界の守護者……プロトその手には一体何を得るのか。

一つ世界を救った貴大に上司（神）が一言「カード落としちゃったテヘ♪」と衝撃の一言、更に「ああ……後ばら撒いた世界は何かしら問題抱えてるから頑張つてね♪」と更に追い討ち……殴りたくなる衝動を抑えつつ貴大は旅に出る。

合言葉は……「カードを集めて世界を救え！」

決め台詞&ステータスを変更しました。

はじめに

この物語はオリ主である小日向貴大がアニメやゲームや仮面ライダーの世界を旅をしてプロトカードと呼ばれるカードを集めながらついでに世界を救うと言う物語です。

更に主人公はオリジナルライダーにだけではなく全平成ライダー（ダークライダーも含む）や様々なキャラクターに変身できると言うチート性能を持っています。

なおこの作品は作者の完全な思いつきのため最後まで行くかは保障しかねますが出来るだけ続けるつもりではあります。

設定

主人公 小日向貴大

ものがたり 世界を守る守護者。しかし守護者の中では異端者であり他の守護者（上司以外）から嫌われている。

ものがたり それぞれの世界に存在する小日向貴大の原型。面倒な事を嫌うが困った人を放っておけない矛盾した性格。家事はやれば出来るが基本はしない。普段は世界に悪影響を与えるため百分の一の力で行動しているが本気になったらドラゴンボールのセルを3秒で倒せるレベル。

レアスキル『守護者』……守護者に与えられるスキルで全ての条件（仮面ライダーの変身適正やリリカルなのはでの魔法の使用の条件であるリンカーコアの有無、灼眼のシャナの封絶で動くためのフレィムヘイズや徒、ミスセスと言った条件など）を無視できる

仮面ライダープロト

小日向貴大が変身する仮面ライダーで全ての仮面ライダーの起源であり頂点に立つライダー。

両手をベルトにスライドさせる事によって変身する。必殺技の発動は腰の左にあるケースに入っているSDカード型のチップ「ブレイカード」をベルトのスロットに発動する。

ワームに対抗するためにクロックアップも可能。

プロトフォーム

「プロトドライバー」のみで変身する基本フォーム。変身時には『mode proto』の電子音が鳴る。主に格闘を主体にして戦う。

イメージはは頭部が角の無い仮面ライダージョーカーに仮面ライダー

ゾルダのマスク、胴体と肩のアーマーはファイズで腕は龍騎、ベルトから下がカブト。

必殺技は『Proto Breaker』の電子音で様々なエネルギー（フォトンブラッドやフリーエネルギー、タキオン粒子や魔皇力など）を右手に乗せて殴る「プロトナックル」。

パワー・100

ガード・100

スピード・100

フェニックスフォーム

プロトフォームの背中にプロトフェニックスを装着し変身するフォーム。

変身時には『mode Phoenix』の電子音が鳴り両肩と胴体に鳥の翼のような装甲に包まれ更にプロトフェニックスからキバエンペラーフォームのようなマントが現れる。

プロト同様に格闘を主体にして戦い能力も平均的に上がる。必殺技は『Phoenix Breaker』の電子音で様々なエネルギーを右足に乗せ飛び蹴りを放つ「フェニックスキック」

因みにプロトフェニックスの羽を展開し飛ぶ事も可能。

パワー・150

ガード・150

スピード・150

トータスフォーム

プロトフォームの左腕にプロトトータスを装着し変身するフォーム変身時には『mode Tortoise』の電子音が鳴り両肩と胴体に甲羅のような装甲に包まれ更にプロトトータスは盾になりトータスハルバードが出現する。

トータスハルバードを使った戦闘を主体とし能力はパワーとガードが跳ね上がる。必殺技は『Tortoise Breaker』の

電子音で様々なエネルギーをトータスハルバートにませて回転切りを放つ「トータスハリケーン」、様々なエネルギーをトータスハルバートにませブーメランのように投げる「トータスブーメラン」

パワー・150

ガード・200

スピード・100

バットフォーム

プロトフォームの右腕にプロトバットを装着し変身するフォーム。変身時には『mode Bat』の電子音が鳴り両肩と胴体に蝙蝠の翼のような装甲に包まれ更にプロトバットがエネルギー弾を撃つボウガンになるになる。

プロトバットのボウガンを主体に戦い能力はパワーとスピードが跳ね上がる。必殺技は『Bat Breaker』の電子音でプロトバットに様々なエネルギーを弾にして連続で放つ「バットマシンガン」

パワー・150

ガード・100

スピード・200

アイテム

『プロトドライバー』

小日向貴大が所有するドライバー。

仮面ライダープロトに変身するドライバーモードと他の仮面ライダーやキャラクターに変身または召喚するライダーモードの二つがある。

イメージは中央だけのデイクイドライダー。

ドライバーモードの腰につけている状態の上部に「ブレイカーカード」を挿入する場所と。カメンライドやフュージョンライドとサモンライド、アビリティライドの三種類を変更するスイッチがある。

『プロトカード』

小日向貴大がプロトドライバーで使用するカード。ライダー系カード、キャラクターカード、ウェポンカードの三種類がある。ライダー系カードの場合は変身して戦うことに強くなり新たなフォームが使用可能になったり他のライダー系カードが増えたりする。

カメンライド

全平成ライダー（メインライダー（クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、W、OOO）とサブライダー（前記以外の平成ライダー、ダークライダーも含む））に変身するモード。

サモンライド

仮面ライダーや各世界のキャラクター（なのはやネギ、シャナなど）を召喚するモード。

アビリティライド

各世界のキャラクターの能力を使えるモード

フュージョンライド

各世界のキャラクターになるためのモード、普段は使わない。

ウェポンライド

仮面ライダーやキャラクターの特殊装備を召喚するモード。

プロトモンスター

『プロトフェニックス』

小日向貴大が使役している不死鳥型のモンスター。

『プロトトース』

小日向貴大が使役している亀型のモンスター。

『プロトバット』

小日向貴大が使役している蝙蝠型のモンスター。

『プロトソード』

小日向貴大が使役している剣型のモンスター。イメージはキバのザンバットソード（ザンバットバットなし）

通常武器と特殊武器の違い

通常武器は仮面ライダーやキャラクター達が戦闘時に常時装備しているもの。通常武器はカメンライドやフュージョンライドを使用したときに付いている。例、電王系のガッシャー、ファイズ系のポインターなど一式、なのは系のデバイス。

特殊武器は強化アイテムや普通時は持っていないもの。例、アクセルのエンジンブレード、ドラゴンボールの仙豆、ファイズのファイズアクセルやオードバジン、電王のケータロスなど。

ブローグ

????..

二つの影が交差する。

「がっ……まさか……」

一つの影……滅びの根源（ゲームで言うラスボス）がうめき声を上げる。

「はっ……この程度かよ……」

もう一つの影……白銀の装甲を纏った戦士……仮面ライダープロトプロトフォーム が呟く。

「き、貴様、何者だ！」

「俺か？俺はそうだな……」

プロトは腕を組み少し考え。

「最古にして最強の仮面ライダー……とても名乗っておくさ」

プロトはそう言いながらSDカード型の『ブレイカーカード』を『プロトドライバー』に挿すと。

『Proto Breaker』

電子音が鳴り右手に様々なエネルギーが集まっていき……。

「はあ！」

プロトはそのままラスボスに右ストレート…… プロトナックルを叩き込む。

「ぐっ……があああああ！」

ラスボスは叫びながら爆散した。

「……こんなもんか」

そう言っただけでプロトは突然現れた銀色のオーロラの向こうへと消えていった。

貴大Side・・・/天界・・・

「帰ったぜ」

俺は帰ってきてまず上司に報告する

「ご苦労様」

そう言ったのは腰までぐらいいまで伸ばした黒髪の（自称）美女である上司（名前？忘れた）だった。

「あ！貴大君私の名前忘れたでしょ！」

「そんな分けないだろ」

「それじゃあ名前言ってみてよ！」

「カミコ」

「ちーがーいーまーすー！って言うか今絶対適当だったでしょう！」

「当然！」

「上司の名前を忘れちゃうなんて酷いよ！」

「忘れたんじゃない覚える気が無かったんだ」

「それもつと酷いからね……」

「そんな事はどうでもいい」

「更に追い討ち！」

「ほらプロトカード返せ」

と俺は手を差し出すが……。

「あー、あれね……」

沈黙して3秒上司が衝撃の発言をする。

「ごめんねー、あれ落としちゃった………テヘ」

「はあ？」

今何言いやがったこのアマ……。

「でも大丈夫！これだけは確保できたから！」

そう言つて渡してきたカードはライダー系カードの ガタツク
ゼロノス アクセル、キャラ系カードの デネブ 最後にウエ
ポンカードの エンジンブレード 仙豆 だった……なんだこの
悪意のある組み合わせは。

「てめえ……わざとだな？」

「あはは……そんな事無いよ……」

「わざとだな？」

「ソナナコトナイヨ……」

「わざとだな？」

「そんな……」

「わざとだろ」

「……ごめんなさい」

「お前は今日からカミコだ！」

「そ、それだけのご勘弁を！」

「い・や・だ！」

「そ、そんな」

「……そんな事より何処にばら撒いた？」

「え〜っと……いろんな世界？」

「ほう……」

俺はドライバーを出現させ……。

『SUMMON RIDE』

「ごめんなさい！だからライダーを出さないで」

「ちっ……」

俺はドライバーを消し。

「……道案内はしてくれんだろ？」

「……行ってくれるの？」

「しゃーないだろどのみち回収には行かなきゃいけねーんだしよ」

「ありがとう！それじゃあ早速道を開くね！」

カミコがそういつと銀色のオーロラが出現する。

「はあ、んじゃ行くか……」

「ああ、言い忘れてたけどばら撒いた世界には色々問題を抱えてるから頑張つてね」

「へいへい……次の駅は過去か未来か……ってこれは電王か」

そう言いながら俺はオーロラをくぐった。

カミコSide・・・

「ああ、言い忘れてたけどばら撒いた世界には色々問題を抱えてるから頑張つてね」

「へいへい……次の駅は過去か未来か……ってこれは電王か」

そう言いながら貴大君はオーロラをくぐった。

「貴大君は運命を乗り越えられるかな？」

そう言って私は考えたけど答えはすぐに出た。

「うん、大丈夫だよ！だって貴大君だもん！」

だって彼は強くて優しい私の自慢の部下なのだから。

プロローグ（後書き）

どーも作者の天です！

他にも2つも小説あるのに作者は何を考えているのか……。

答えは何も考えていません！（オイ！）

まあこんな馬鹿な作者ですが見放さず読んでいただけたら幸いです。
それでは

第1話 『大体初日は厄日なんです』（前書き）

戦闘のBGMは「Leave all Behind」でいい
ただければ幸いです。

現在、貴大の持っているカードは6枚。

第1話 『大体初日は厄日なんです』

俺は銀色のオーロラで最初の世界に着いたのだが……。

「……落ちたりすんのはたまにあるから慣れてるが……流石に逆さづりは初めてだな……」

俺は大きな樹の枝に逆さまに引っ掛かっていた。

「さて……これからどうするか……ってうわっ！」

枝が折れて樹から落ちた。

「ゴブッ！」

頭から……。その後数分間悶え、ようやく復活した。

「さてこれからどうするか……」

（やらなければならない事は3つ、まず1つはこの世界の役割……服装を見たところどこかの学校の制服の用だがまあこれは別に後で調べればいい。次に2つ目は寢床、まあこれはカミコが用意しているから後で探せばいいとして最後は大きな悪の存在があるかどうかまたそれに対抗する存在があるかだ、これが一番重要で在る世界と無い世界では対応が全く違う。と言ってもまずは役割の確認と寢床の搜索だな）

なんて思いながら道に出ると突然何かが高速で駆け抜けて行った。

「なんだあれ？」

そう言いながら考えていると後ろから

「ちょっとどいてどいてどいて！」

と声が聞こえてきたので振り返ると少女が目の前に居て衝突し後ろに倒れる。

「いてて……」

左手に妙な違和感が……まず状況を確認しよう俺は尻餅ついてる、少女は俺の上、右手地面について体を支えている、そして左手……少女の胸を掴んでいる……胸？

「……」

少女は顔を真っ赤にさせて口をパクパクさせている。あれ？本能が警告を発してるぜ！ハッハッハッ！

あまりの事態に壊れています。

「何処触ってんのよこの変態——————！！」

「ふべらっ！」

ホールド（上に乗られた）されたまま思いつきり引っ叩かれました……。

「てめえ！そつちがぶつかってきたんだろっが！」

「うつさい！乙女のジュンジョー返しなさいよ！」

ここでまさかのハイキック！

「がばっ！」

顎に直撃し俺は崩れ落ちる。

「あーも・サイテー」

そう言いながら少女は立ち去った。暫くして回復し立ち上がる。

「ったく……それはこっちの台詞だっつーの！」

と愚痴をこぼす。

「おい」

と今度は別の少女の声が聞え振り返ってみるとそこには拳銃の銃口ををこっちに向ける少女が居た。

「……お前銃刀法違反つてのを知ってるか？」

「そんなもの私には関係ない、そんな事より貴様、まさか学園の校則第一条を知らぬわけでもあるまい？」

「……人に銃を向けては……あひゃい！」

銃で撃たれました。つーか今直撃コースだったぞ！

「あぶねーじゃねーか！」

「あれを避けるとは……貴様何者だ？」

「通りすがりのか……おふっ！」

2 発目いただきました。つか俺は特に嘘は言っていないよ？

「ふざけているのか？」

「マジだ」

「……まあいい、貴様名前は？」

「……小日向貴大」

「聞き覚えが無いな」

「……だろうな」

「何年生だ？」

「……ちよつと待つてろ」

そついい俺は手当たり次第ポケットを探すと生徒手帳があった。

「えーっと1年3組って書いてあるな」

「何？」

少女が睨んでくるが……。

「ウガアアアア!!」

森の中からの奇声がそれを中断させた。

「ウガアアアア!!」

そしてそこに現れたのは狼のようなヤミー…… オオカミヤミー
だった。

「オーファンか!!」

「違うあれはヤミーだ」

「ヤミー?なんだそれは」

「……後で話してやる」

そう言いながら俺はプロトドライバーを左腕に出現させ仮面ライダーアクセルとエンジンブレードのカードを取り出す。

「行くぜ……変身!」

俺はアクセルとエンジンブレードのカードをドライバーに挿入する。

『KAMEN RIDE ACCEL』

『WEAPON RIDE ENGINEBLADE』

俺の腰に仮面ライダーアクセルのベルトと俺の横にエンジンブレードが出現しエンジンブレードは地面に突き刺さる。

『Acceler』

ガイアウィスパーが鳴り俺は仮面ライダーアクセルへと変身した。

「さあ、振り切るぜ！……てか」

俺は突き刺さっていたエンジンブレードを抜きオオカミヤミを斬る。

「グウウウウウ……オ、オンナアアア……」

「なんつーベタな欲望だ……」

そう言いながら俺は連続でオオカミヤミを斬り裂き最後に距離を開けるために蹴り飛ばす。

「これでも使うか……」

俺はエンジンメモリを取りだしエンジンブレードに挿しグリップのトリガーを引く。

『Jet』

俺はエンジンブレードからエネルギー弾を撃ちオオカミヤミに当てる。

「グウウウウウ」

オオカミヤミーは攻撃してくるがそれをかわして斬る、かわして斬る、かわして斬るを繰り返す……そしてオオカミヤミーが弱つてきたので。

「これで終わりにするか」

俺はエンジンブレードを突き刺しベルトの左にあるクラッチレバーを引きそのまま右にあるパワーシフトを捻る。

『Accelerate Maximum Drive』

俺はオオカミヤミーに向って走りそのまま飛び上がり後ろ回し飛び蹴り……アクセルグランツァーを放つ。

「絶望がお前のゴールだ……てな」

「グアアアアアア……!!」

オオカミヤミーは絶叫しながら爆散セルメダルを残し消滅した。

「ふう……」

俺は今後役に立つかもしれないセルメダルを適当に回収していると。

「オイオイ……そいつは俺のセルメダルだ勝手に取るんじゃないよ
！」

と頭がオオカミ、胴体がコヨーテ、足がジャッカルを模した身体を

したグリードが攻撃してきた。

「ちっあぶねーな」

俺はグリードの攻撃をかわしながら。

「見たところグリードみたいだがお前は何モンだ？」

俺はそう問うと。

「俺か？俺はグリードでありウルトラショックの大幹部のクルア
ウ様だぜ」

……ウルトラショックか、また厄介な事になりそうだぜ。

第1話 『大体初日は厄日なんです』（後書き）

どーも作者の天です今回は仮面ライダーアクセルの説明を。

仮面ライダーアクセル……『仮面ライダーW』に登場する仮面ライダー、照井竜がアクセルメモリとアクセルドライバーを使用して変身する。オンロードバイクをモチーフにした赤いライダー。自身がバイクになるバイクフォームに変形可能。必殺技は単体で『アクセルグランツァー』、エンジンブレードを使う『ダイナミックエース』と『エースラッシャー』である。このほかにも貴大は現在では使用不可能だがトライアルメモリを使用して変身する形態『アクセルトライアル』もある。

ご意見や感想があれば言っていたただいたら幸いです。あと貴大に『こんな世界に行ってくれ』と言うのがあれば言っていただければ知っている世界（作者が）であれば行きます。それでは。

第2話 『厄日の続き〜グリードとオーファン〜』（前書き）

前回のあらすじ・・・最初の世界に來た貴大しかし逆さに吊るされ
ビンタ&ハイキックを受け銃で撃たれると言う災難に見舞われる。
しかしそれは壮絶なる戦いの序章でしかなかった、突如現れた才オ
カミヤミィと謎のグリードのクルアウ、更にウルトラシヨッカーと
いわれる組織の存在まで……。

世界の守護者……プロトその手には一体何を導くのか。

今回の戦闘BGMは「Action-ZERO」でお願いします。

第2話 『厄日の続き〜グリードとオーファン〜』

「ウルトラシヨッカーだど？」

「ああそうだ。現在アポロガイスト様も復活しつつある、しかし世界の破壊者デイクイドと世界の守護者プロト……貴様等は我々の障害となるのは間違いない……見たところ貴様は力を相当失っているようだから今のうちに倒させてもらう！」

クルアウは素早い動きで攻撃し俺はそばにあったエンジンブレードを引き抜き防御するが相手の連続攻撃に防戦一方になる。

「そらそら！どうした！その程度か！」

「……ほざくのは勝つてからにしてみらおうか！」

俺はクルアウにエンジンブレードを投げつける。

「何を！」

クルアウを避けきれずに当たり隙が出来る、それを見逃さずに俺はプロトドライバーを左腕に出現させ仮面ライダーガタックのカードを取りだし。

「変身！」

俺はそのままガタックのカードをドライバーに挿入する。

『KAMEN RIDER GATACK』

アクセルのベルトがガタツクのベルトに変わり。

『Henshin』

電子音が鳴り俺は仮面ライダーガタツク マスクドフォーム に変身する。

「喰らえ！」

俺は両肩のガタツクバルカンをクルマウに向けて撃つ。

「そんなもの！」

クルマウはガタツクバルカンをかわしながら接近してくる。

「ならこれで……キャストオフ！」

俺がベルトのゼクターホーンを倒すと。

『Cast Off Change Stag Beetle』

マスクドフォームの装甲がパージされ俺は ライダーフォーム へと変身する。

「行くぜ！」

俺は両肩にあるガタツクダブルカリバーを手に取りクルマウに向かって行く。

「らっ！」

「はぁ！」

俺とクルマは一進一退の攻防を繰り返す。このままでは埒があかないので勝負に出る。

「これで！」

俺は少し距離をとりガタツクダブルカリバーをクルマに投げる。

「ぐぁ！」

クルマがひるんだ隙に俺はベルトのフルスロットルスイッチを3回押す。

『one two three』

俺はベルトのゼクターホーンを一旦戻し。

「ライダーキック！」

再び反対側に倒す。

『Rider Kick』

電子音が鳴りタキオン粒子を纏った右足で。

「はぁ！」

飛びまわし蹴り……ライダーキックを放つ。

「ぐあああああ……」

クルアウは後ろに吹っ飛び身体から無数のセルメダルと一枚のコアメダルが飛び出す。

「よつと！」

俺は飛んできたコアメダルをキャッチする、そしてコアメダルを見るとコヨーテが描かれたメダルだった。

「くそ……覚えている！俺のコアメダル……必ず取り返すからな！」

そう言いながらクルアウは去っていった。

「あゝだる……」

俺は愚痴をこぼしながら変身を解除すると。

「オイ貴様！さっきのはなんだ？」

「……それより俺はオーファンって奴の方が気になるんだが？」

「貴様には関係ない」

「なら俺もお前には関係ないから喋らん」

「なんだと！」

「この世の基本は等価交換……まあ簡単に言つとギブ&テイクだギブが無いのにテイクは出来ないさ、つと忘れてたがこれだけは教えてくれ」

「……なんだ？」

「あんたの名前は？」

「……玖我なつきだ」

「そうか……それじゃーな玖我」

と俺は手お挙げながら去つていった。

放課後……

俺はあのあと結局授業を受けず学校の裏山で寝ていた。

「貴大、流石に授業受けないとまずいんじゃないか？」

「デネブ残念だが時間切れだ、とつくに授業は終わっている」

俺はもしものためにデネブを監視にをさせていた主に先生とか教師とか先公とかが来ないように。

「貴大、それは意味が一緒だぞ」

「人の心を読むんじゃない」

「貴大、それより誰か来たぞ？」

そう言ったデネブの向いている方を見ると今朝の勘違い暴力女がいた。

「あいつか……見つかったら厄介だな……それじゃあ撤退するか」

俺達は退散しようとしたのだがいきなりデネブがこけてドミノ倒しのな感じで俺も巻き込まれた。

「あーーーーーアンタは！」

こけた拍子に茂みから出てしまい見つかった。

「妖怪暴力女と遭遇したどうする？」

- ・戦う
- ・特技
- ・アイテム
- ・逃げる

「誰が妖怪暴力女よ！」

見事な右ストレートをいただきました。

「何故俺の考えてることが分かった？」

「最初からアンタの思考がダダ漏れなのよ」

「なんだってー！」

そんな感じでふざけてたら暴力女が拳を振り上げてきた。

「キャーーーー打たないでーーーーー」

これと言った瞬間思いつきりぶん殴られました。

「アンタいい加減暴力女はやめなさいよ」

「だって名前知らないんだもん」

「えっ！そうだったっけ？」

「だってぶつかられて、押し倒されて、ビンタされて、蹴り上げられてだけだったぜ」

「そ、それはアンタが……」

「胸を触った事は謝る……ごめんなさい、だがお前は自分で招いたにも拘らず引つ叩いて蹴り上げたよな？」

「そ、それは……ごめんなさい」

「よしこれでチャラだ、俺は小日向貴大だよろしくな」

「私は鴉羽舞衣よ、よろしくね」

俺達は自己紹介をした瞬間辺りが暗くなり邪気に包まれる。

「急に曇った？」

「……マジかよ、鶺鴒……さつさと降りるぞ」

俺は早急に立ち去ろうとしたが、突然山が揺れた。

「きゃ、じ、地震!」

「地震で済めばいいけどな……」

俺はそんな事を呟きながら鶺鴒を支えるように立つ。そして……。

「オイオイ……」

「は、はい……!?!」

巨大な蛇みたいなのが現れた。

(なんだコイツは?)

と考えていると不意に玖我の一言が頭をよぎる。

「……オーファン」

「あ……ああ」

鶺鴒が呆然と言葉にならない声を上げる。そしてオーファンがジリジリとこちらに近づいて来る。そしてジャリツと鶺鴒があとずさる音が聞える。

「ちっ……」

俺は一步前が出る。

「ちょ……ちょっと!」

鴉羽は我に返ったようだ。

「カードも少ないのに一日二回は勘弁して欲しいぜ……」

そう言いつつ俺は左腕にプロトドライバーを出現させ仮面ライダーゼロノスのカードを取り出す。

「デネブ! 援護しろ!」

俺が叫ぶと。

「了解だ!」

と草むらからデネブが出てくる。

「行くぜ! 変身!」

俺はドライバーにゼロノスのカードを挿入する。

『K A M E N R I D E Z E R O N O S』

俺の腰にゼロノスのベルトが出現し。

『A l t a i r F o r m』

電子音が鳴り俺は仮面ライダーゼロノス アルタイルフォームに

変身する。

「最初に言っておく！俺はかーなり強い！……って化け物に言ってもしゃーないか」

「は、はい……！？」

鵜羽が驚いているが気にせず俺は腰のゼロガッシャーをボウガンモードにしオーファンを撃つ。

「グウウウウウウ……」

オーファンは俺の攻撃を受けて唸っている。

「流石に一日二戦はキツイな……デネブ来い！」

「分かった！」

そう言っでデネブは俺の後ろに立つそして俺はゼロノスカードを一旦抜き裏返して再び入れる。

『V e g a F o r m』

電子音が鳴りデネブが俺に憑依し俺達は ベガフォーム にフォームチェンジした。

「最初に言っておく！胸の顔は飾りだ！」

（化け物に言っでどうするんだよ！さっさとやれ！）

俺はデネブに突っ込みをいれ早く倒すように急かす。

「了解した！」

そう言つてデネブはゼロノスノヴァでオーファンを攻撃していく、
そしてオーファンが弱つてきたので。

（デネブ！決めるぞ！）

「分かった！」

そう言つてデネブはベルトのフルチャージスイッチを押す。

『Full Charge』

電子音が鳴りゼロノスはゼロガッシャーから光矢…… グランドス
トライク を放ち頭に命中させ頭が消滅する。

（これ終わったか？）

俺が少し気を抜いた瞬間いきなり顔の無い蛇の尻尾が鵜羽をなぎ払
おうとする。

（デネブ！）

「ダメだ間に合わない！」

ゼロガッシャーを向けるも既に鵜羽の眼前に尻尾が来ており間に合
わない。

「い、いやあああああ！」

鴉羽は咄嗟に手を出したのだろう……その手に一瞬火の輪が現れ才
ーファンを焼き尽くす。

「あれはなんだ？」

（俺が知るかよ）

これは戦いの序章にしか過ぎないと感じながら鴉羽を見ているのだ
った。

第2話 『厄日の続き〜グリードとオーファン〜』（後書き）

どーも作者の天です、今回は仮面ライダーガタツクとゼロノス、それからグリードのクルマウの説明を。

仮面ライダーガタツク……『仮面ライダーカブト』に登場する仮面ライダーで『戦いの神』とも呼ばれている、人類が地球外生命体『ワーム』に対抗するために作られたマスクドライダーシステム、加賀美新がガタツクゼクターをライダーベルトを使用して変身するクワガタをモチーフにした青いライダー。必殺技は『ライダーキック』とガタツクダブルカリバーを使用した『ライダーカッティング』である。

なおフォームはマスクドフォームとライダーフォーム、そしてハイパーバトルDVDとPS2限定のハイパーフォームも存在する。

仮面ライダーゼロノス……『仮面ライダー電王』に登場する時の運行を守るライダー。桜井侑斗がゼロノスベルトとゼロノスカードを使用して変身する電車と牛をモチーフにした緑のライダー。必殺技はゼロガッシャーのボーガンモードで放つ『グランドストライク』サーベルモードで放つ『スプレンドッドエンド』である。

なおフォームは『アルティルフォーム』と『ベガフォーム』現在貴大は使用不可能であるが『ゼロフォーム』存在する。

クルマウ……ウルトラシヨッカーに所属するグリード、頭は狼、上半身はコヨーテ、下半身はジャッカルを模している犬系グリードである。能力は猫系グリードのカザリのスปีードと重量系グリードのガメルのパワーを併せ持つ厄介なグリードである。名前の由来は『

喰らう』からクルアウの名前を連続で早めに言っていけば喰らうになる……はず。

ご意見やご感想などがあれば言っていたけると幸いです。最後に一言。

オラに元氣かんそつを分けてくれ!!

第3話 『教師と正義の味方と新たなカード』（前書き）

現在貴大の持っているカードは6枚

戦闘BGMですが皆さんの合うつと思った曲を任意で流してください。

第3話 『教師と正義の味方と新たなカード』

あのあと玖我がやってきて俺たちに『もう関わるな』と言ってくる。納得できない俺と鴛羽だったがこのままでは埒があかないので渋々了承し数日がたって現在7月9日。しかし鴛羽の手に現れた火の輪はなんだったのか今となっては知るよしもなく一日中裏山にいた。

「貴大、ちゃんと授業受けなきゃダメだぞ」

デネブの言葉に俺は

「そんな気分じゃない」

そう返すと

「そんな事言ったって一回も授業受けてないじゃないか」

「俺には必要ない」

「そんな事言ってないで受け無きゃ友達だって出来ないぞ」

「いずれはこの世界を去るんだ友達なんて後々引きずるだけだ」

「そうだけどさあ……」

「バカの事言っでないでプロトカードを探せ」

「はーい……でも本当にここにあるのかな？」

「プロトドライバーが反応してるんだ絶対あるはずだ」

そうプロトドライバーとプロトカードはお互い惹かれあう。だからそれを利用すれば見つかるってわけだ。

「でもいろんな世界にばら撒いたって言うけど、この世界だけでもかなり広いのに探せるのか？」

デネブの疑問に俺は。

「そこら辺は問題ないプロトカードはその世界の中心まあ……この世界ではこの学園だな……に集まる習性があるからな」

「でもなんでこの学園がこの世界の中心だって分かるんだ？」

「そりゃ俺が転送されるのが世界の中心だからに決まってるだろ」

「そうだったのか！……ん？あれは！」

どうやらデネブが何かを見つけたようだ。

「貴大ー、あつたぞー！」

そう言っでデネブが持ってきたのはウェポンの『メダジャリバー』のカードを持ってきた。

「メダジャリバーか……オーズが無いとあまり意味無いな……」

俺が愚痴ると

「う、ごめん」

申し訳なさそうに謝って来るデネブ。

「気にすんな一枚見つけただけでも進歩だよ」

俺とデネブが会話していると突然。

「ねえ君、こんな所で何してるの？」

と声がしたので振り向くと赤い髪の女性が立っていた。

「……探し物だが？」

「こんな所で探し物なんて大変だね、ところで君は小日向貴大君だよな？」

「ああそうだが？」

「ちゃんと授業に出ないとダメじゃない」

「……アンタは何者だ？」

「アタシは杉浦碧！碧ちゃんって呼んでねー、それとあたしは一応この教師だからよろしくねー」

「うげっ」

「ちょっと！あからさまに嫌な顔しないでよ」

「だってなあ……」

「それに恭司君も困ってたよー、転入生がなかなか来てくれないってさ」

恭司君？……ああ確か担任の高村恭司か……。

「気が向いたら出てやるよ」

そう言いながら立ち去ろうとしたが空気が変わりあたりに邪気で包まれる。

「！」

碧ちゃんはこの事態を把握してるかのように顔が真剣になる。

「……」

俺は神経を研ぎ澄ます、すると。

「GUUUUUUU……」

二つ足で立ち、大きな顎と長い尻尾を持ったおそろくオーファンと思われる生物が現れた。

「アンタ逃げた方が……っていねえ！」

いつの間にか碧ちゃんは居なくなっていた。

「逃げ足が早すぎるだろ……」

俺はため息をつきながらドライバーを出現させアクセルのカードを出そうとするが。

「やらせはせん！」

と後ろから何者かが襲い掛かってくる。

「おっと！」

俺は素早く振り返りバク宙をしながら襲撃者の腹に蹴りを入れる。

「GUUUUUUUUU……」

そしてオーファンが攻撃をしてきたので転がりながら避ける。

「ったく……あぶねーな！」

そう言って構えたその時。

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ」

聞き覚えのある声の持ち主がふざけた台詞と共に現れる。

「化け物倒せと、あたしを呼ぶ！」

但しウェイトレス姿にハルバートと言う格好で。

「やあ、遅れてすまないね、大丈夫かい？」

その質問に。

「碧ちゃん……アンタ、何やってんだ？」

と返すと。

「はははは、違うぞ、君。アタシは『正義の味方』！ならば君を正義と見込んで手を貸そう！」

なんて意味不明なことを言ってきたが身のこなしから少しは経験がありそうなので。

「よしそれじゃあ、あの二体をひきつけといてくれ」

「えっ、2体？つてホントだ増えてる！……まあいい任せたまえ！」

「よしデネブ『正義の味方』を援護しろ」

「分かった！」

そう言うやり取りをし俺はある木下に向かい全力で木を蹴る。すると上から一枚のカードが落ちてくる。

「やっぱりあつたか……」

そのカードをキャッチして『正義の味方』のところに戻る。

「待たせたな！」

俺がカードを構えると。

「そ、それは！」

さっきの襲撃者……ドーベルヤミーは驚く。それもそのはず俺が持つてるカードは奴の天敵である仮面ライダーオーズのカードなのだから。

「やらせるか！」

ドーベルヤミーが襲い掛かってくるが俺はそれを回転しながら回避しそのまま回し蹴りを喰らしメダジャリバーのカードを取り出す。

「さて、行くぜ！変身！」

俺はドライバーにオーズとメダジャリバーのカードを挿入する。

『KAMEN RIDE OOO』

『WEAPON RIDE MEDAZYARIBAR』

俺の腰にオーズのベルトが出現し。

『タカ・トラ・バツタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

歌が鳴り俺は仮面ライダーオーズ タトバコンボへと変身した。

「何その変な歌？」

「歌は気にするな……ってな、それよりそっちは頼んだぜ」

「任せたまえ！」

『正義の味方』はハルバートをクルクルと頭上で回し。

「出ませい！鋼の牙、愕・天・王！」

そう言いながらそれを真正面へと振り下ろした、すると犀を模した（とは言ってもほとんど原形をとどめていないが）オーファンが出現した。

「空前絶後の力を備えた、才色兼備の美少女の、縦横無尽獅子奮迅のチャイルドが、オーファンドモを死山血河の地獄へ落とす！」

もはや意味が分からない。

「やってきたわね、愕天王頼りになるニクイやつ」

後ろ足をさすりながらの彼女の言葉に、『愕天王』と呼ばれたオーファン……いやチャイルドが咆哮をあげた。どうやら敵ではないらしいそう確信した俺はドーベルヤミーと対峙する。

「クルアウさまのコアメダル、返してもらっぞ！」

「やれるもんならやってみな！」

俺とドーベルヤミは交戦を開始する。

「はあ！」

俺はドーベルヤミーをメダジャリバーで連続で斬る。そしてドーベルヤミーがよろけたところで俺はメダジャリバーを上に取り投げ

「そらっそらっそらっそらっ！」

トラクローをセットして連続で攻撃する。

「ぐあ！」

ドーベルヤミーにある程度ダメージを与えた所で蹴りをいれて後退させバツタレッグの力を使って高く飛びメダジャリバーを掴んで電王の『ダイナミックチョップ』の要領で斬り裂く。

「ぐおおおお……」

的が吹っ飛んだ隙に。

「さて……他のメダルも試すか」

そう言いながら俺はトラとバツタのメダルをカマキリとチーターに換えてオースキャナーでスキャンする。

『タカ・カマキリ・チーター』

音声が鳴り俺は亜種形態である タカキリーター に変わる。

「さあ、行くぜ！」

俺はチーターレッグの力で加速し一気に吹っ飛んだドーベルヤミーに追いつきカマキリソードをセットしてで斬り裂く。

「グガッ」

そして更に吹っ飛んだドーベルヤミーの背後に回りドーベルヤミーを受け止め、肩を掴んで連続蹴り……リボルスピンキックを喰らわす。

「ガツギッ！」

ドーベルヤミーは逆方向に吹っ飛ぶそしてその隙に。

「これを試してみるか」

俺はコヨーテのメダルを取り出しカマキリのメダルと交換しスキヤンする。

『タカ・コヨーテ・チーター』

音声が鳴り俺は頭がタカヘッド、身体は灰色で両腕に牙のような突起を2つつけた盾……『コヨーテファング』の付いた『コヨーテアイム』、足はチーターレッグのタカコヨーターに変わる。

「じゃあ！行くぜ！」

「き、貴様！クルアウ様のコアメダルだ！」

驚くドーベルヤミーにチーターレッグで一気に接近しコヨーテファングを獣が噛み付くのように使い何度も攻撃していく。

「ガッ……グア！」

ドーベルヤミーがよろめく。

「そろそろ決めるか」

俺はコヨーテとチーターのメダルをトラとバツタに入れ替えてスキヤンさせる。

『タカ・トラ・バツタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

俺は タトバコンボ に戻しバツタレッグの力を使いドロップキックでオーファンの方向に蹴り飛ばすそして。

「全員下がれ！」

俺がそう叫ぶと『正義の味方』は愕天王を戻しデネブと共に下がってくるそして俺は二人より前に出てメダジャリバーにセルメダル3枚を入れてスキヤンさせ。

『トリプル・スキヤニングチャージ』

「せいやつー！」

俺はメダジャリバーで空間ごと敵を斬り裂く……『オーズバッシュ』を放つ。

「ぎやあああああああ！」

G
A
A
A
A
A
A
A
A
A
A
!!

そして一度切り裂かれた空間は元に戻りドーベルヤミーはセルメダルを残し爆散、オーファンは粒子となり消滅した。

「ふう」
……
「」

俺はため息をつきながら変身を解除する。

（オーファンとヤミーが一緒に出てきた……正直この後の展開は読めないが厄介なことになる事だけは確実だ）

と思いつつ、オーファンの事について聞くために戦闘後に突然居なくなった碧ちゃんを探すのだった。

第3話 『教師と正義の味方と新たなカード』（後書き）

どーも作者の天です。今回は仮面ライダーオーズの説明です。

仮面ライダーオーズ……『仮面ライダー○○○』のメインライダー、オーメダルとオーズドライバーとオーズキャナーを使い変身する。形態は頭、身体、足の3カ所を各5種類のメダル（これから増える可能性大）によってコンボと亜種をあわせ全125種類と言う途方も無い。オリジナルメダルも存在しこの作品では3カ所最低でも6種類の合計216種類の形態を持つ。

突然ですが、プロトカード英文表記でここが間違っているやこつちの方がいいんじゃない？って言うのがあれば言ってください。

他にもご意見やご感想があれば言っただければ幸いです。それでは

第4話 『鴉羽と買い物と林間学校』（前書き）

今回は長かったため次回と分割します。

貴大の持っているカードは8枚。

第4話 『鴉羽と買物と林間学校』

7月10日・・・

昨日碧ちゃんから月曜から授業に出る事を条件にオーファンやチャイルドそれとHiMEと呼ばれる存在の事など色々教えてもらいここが『舞・HiMEの世界』だと言う事が分かった。そして衝撃の事実が……、何と月曜日から林間学校なんだそうだ、そんなイベントから行くのもどうかと思うのだがそれでも碧ちゃんが月曜から来いと言うので仕方なく俺は今林間学校の準備をするため隣町に来ているのだが……。

「……何を買えばいいのか分からん」

そもそも林間学校なんて行った事ないし……。途方にくれていると……。

「こんな所で何やってるのよ？」

鴉羽が俺に話しかけてきた。

「林間学校の荷物を揃える為に来たんだがまず何を買えばいいのか分からない」

「普段学校に来ないくせにそういうのは行くのね」

「しゃーないだろ俺だってどうかと思うが碧ちゃんが月曜から必ず来いって言うんだから」

「へえ、そういうの無視するのかと思ってた」

「約束しちまったからな」

「小日向君って意外に律儀なのね」

「ああ自分でも意外に思う」

「自分で言っちゃうんだ……」

「ああ……、それより鴉羽は何でここに？」

「私も一緒、林間学校の準備よ」

「そうか……なら手伝ってくれないか？」

「別にいいけど」

「あ、ありがとうございます鴉羽様！！」

俺は拝むような仕草をすると。

「はいはい……それじゃあ時間も無いんだし行きましょ！」

「おう！」

その後俺と鴉羽は林間学校の買い物を済ませ鴉羽はバイトだと言うので別れた。

7月11日……

俺が集合場所に行くと碧ちゃんが『良く来たねえ』と言いうちの担任である高村は来ないと思っていたのだろう、慌ててクラスの面子に紹介してくれた。そしてバスに乗り揺られて美袋と言う中等部の生徒（どっかで見たことがあるような……）が忍び込んでいた以外は何の問題も無く目的地に着いた。そして昼に弁当を食べていたら美袋の分が無いと言うことで何品が強奪……ゲフンゲフン譲ったとなつかれた。そして今……。

「コラ、固形燃料を入れようとするんじゃない！」

「うるさい！分かって……」

「無いから入れようとしてるんじゃないか！」

玖我に料理の指導を行っている最中です。事の発端は半分飛び入り参加のためやる事が無く探していたのだが玖我が飯盒炊爨の火に更に固形燃料を入れようとしているところだった。

「待て待て待て待て！」

俺は慌てて玖我を止める。

「キャンプファイヤーでもする気がバカ野郎！」

「しかし！」

「しかしもカカシもない！どうせ火力が強ければ早く炊き上がる
とも思っただろうが！」

「うっ、それは……」

「まあね……そう言うそつちもでしょ？」

「まあな」

二人で他愛の無い話をしていると突然空気が淀み邪気に包まれ何者にもいいよりの無いオーファンが現れた。

「ちっ！」

「は、はい――――！！！」

オーファンが腕を振り上げる。

「くそ！」

俺はオーファンが腕を振り下ろす前に鵝羽を抱え後方に飛ぶ、するとさっきまで俺たちが居た所にはクレーターが出来ていた。

「オイオイ……」

俺がプロトドライバーを出現させようとすると。

「えやああああ！！！」

デカイ刀を持った美袋現れてがオーファンに切りかかりダメージを与え俺たちとオーファンの間に着地した。

「舞衣、貴大！」

「み、ミコトお」

「デュラン、チャージクロームマテリアッ！」

今度は玖我がデュランと呼ばれたおそらくチャイルドであろう犬もどきを連れていた。

「つてえ！」

すると犬もどきに付いていた砲身からの砲撃がオーファンに直撃する。

「……玖我まで来たか」

「嫌な予感は的中したか……それにしてもお前は疫病神か何かなのか？」

「ひ、ひでえ……まあそうかもしれないがな」

そう言いながら俺はプロトドライバーを出現させる。

「さて……自分の不幸は自分で打ち破るとしますか」

そう言っただけでオーズのカードを取り出そうとすると。

「残念だけど君に戦ってもらったら困るんだよね」

その声の主は中等部の制服を着た少年だった。

「お前何者だ？」

「僕は炎風^{ほむなざき}。よろしく」

「困るってのはどういう意味だ？」

「そのままの意味だよ、君に段取りを崩されては困るからね、だから彼等の相手をしておいてよ」

そう言っただけは銀色のオーロラでオーファンを含めた全員をとある場所に送る。

「オイオイ……ここは」

「そう……ここはライダー大戦があつた場所だよ」

「何故お前が知っている？」

「それはこういうことさ」

再び銀色のオーロラが現れそこからイマジンやオルフェノク、ドーパントやワームなどが合計80体ほど現れた。

「多すぎるだろ……」

「そりゃそうさ、だってここに居る戦力はウルトラショッカーのほぼ全部の戦力だからね」

「ならこいつ等を全部潰せばウルトラショッカーに大ダメージを与えられるって訳だ」

「出来るの？」

「出来るかじゃない……やるだけだ！変身！」

俺は7枚のカードを取りだしドライバーに挿入する。

『SUMMON RIDE ACCEL GATACK ZERO
NOS DENEBU』

『KAMEN RIDE OOO』

『WEAPON RIDE MEDAZYARIBAR ENGI
NEBLADE』

電子音が鳴り三つの光とデネブが出現しその光が人の形を形成、その腰にそれぞれアクセル、ガタック、ゼロノスのベルトが出現し俺の腰にもオーズのベルトが出現した。

『Accel』

『Henshin Cast Off Change Stag
Beetle』

『Altair Form』

『タカ・トラ・バッタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

俺はオーズ タトバコンボ に変身しアクセル、ガタック ライダーフォーム、ゼロノス アルタイルフォーム、デネブを召喚し

エンジンブレードとメダジャリバーを出現させた。

「すぐに終わらせてお前等を手伝ってやるからな！」

俺がそういつと。

「うん……気をつけてね」

「ふん、まあ期待しないでおくな」

「おー！貴大も頑張つてな！」

三者三様の言葉が返ってきた。

「さて……それじゃあ行くぜ！」

こうして仮面ライダー4（オマケ+1）対怪人80とH i M E対オ
ーファンの戦いが幕を開けた。

第4話 『鴉羽と買物と林間学校』（後書き）

ども天です。今回は特に説明は無いです。

ご意見や感想があればいただければ幸いです。それでは

第5話 『連続コンボと鴉羽の覚醒』（前書き）

前回のあらすじ・・・杉浦碧によってこの世界の情報を手に入れた貴大、しかしその条件として授業を受けることを承諾する。そしてその初日は何と林間学校だったそしてその夜オーファンとウルトラシヨツカーの怪人たちの大群が現れる、貴大は召喚したライダーと4人（オマケ＋1）で迎え撃ち。今、激闘が幕を開ける。

貴大の持っているカードは8枚

第5話 『連続コンボと鴉羽の覚醒』

「おら！」

俺は対象を変えながら次々と怪人達を斬り裂く。

「これで！」

俺はメダジャリバーにメダルを1枚入れオーズスキャナーでスキャンする。

『シングル・スキャニングチャージ』

「せいやっ！」

怪人2体をメダジャリバーで斬り裂き倒す。

「流石に多すぎだろ……」

そう愚痴りながら再びメダジャリバーにメダルを2枚入れスキャンする。

『ダブル・スキャニングチャージ』

「はっ！」

俺は衝撃波を飛ばし更に3体倒す。するとアクセルとガタック、ベガフォームになったゼロノスが転がってきて消滅する。彼等は5体ずつ倒したようだそれでもまだ多い。

「ええい！一気に決める！」

俺はメダジャリバーにメダルを3枚入れスキャンする。

『トリプル・スキヤニングチャージ』

「喰らえや！」

メダジャリバーを振りぬくと10体が空間ごと切り裂かれ爆散する。

「……そろそろか」

「一人で勝てると思ってるの？」

凧の問いに俺は。

「なあ、お前RPGって知ってるか？」

「携帯式対戦車擲弾発射機の事でしょ？」

「そつちじゃねーよ……」

「それじゃあロールプレイングゲームの事？でもそれがどうしたの？」

「プロトカードはなあれと同じなんだよ」

「どついう意味？」

「つまり戦えば戦うほどレベルが上がるって事だよ！」

俺がそういうと二つの光が出現しそれを掴むと光はクワガタとライオンのメダルに変わる。

「さあ……行くぜ！」

俺はクワガタ、カマキリ、バッタの順でベルトにセットしていく、そしてスキャンすると。

『クワガタ・カマキリ・バッタ』

『ガゝタガタガタキリバ・ガタキリバ』

歌が鳴り俺はクワガタの顔、カマキリの体、バッタの足の　ガタキリバコンボ　に変わる。

「姿が変わったからって……」

「うおー……！！！」

俺が風の声を遮り咆哮を上げると1体から2体、2体から4体に見える。

「わお……」

最終的にはには50体に増える。

「「「行くぜ！」」」

俺達は怪人と交戦を開始する。

「はあ！」

「せい！」

「やあ！」

ある物はカマキリソードでイメージンを切り裂きあるのはバツタレツグでオルフェノクを蹴り飛ばす。結果は圧倒的だった。それもそのはず怪人は何体かでやつとライダー1人分の劣化体なのだ、それが同数のライダー達と戦えば結果は見えていた。

「……これで！」

俺達はベルトをオースキャナーでスキャンする。

『『『スキャニングチャージ』』』

「……はあっ！……！」

音声が鳴り俺を含めた50体のオーズが一斉に必殺の飛び蹴り……ガタキリバキックを放ち怪人たちは次々と爆散していくそして分身たちは消え最後に残ったのは俺一人だった。

「行くぜ！」

俺はHiMEとオフアンの戦いに割ってはいるが分身して本領発揮するガタキリバではあまり役に立たない。

「だったらコイツだ！」

今度はライオン、トラ、チーターの順にベルトにセットしていきスキャンする。

『ライオン・トラ・チーター』

『ラッタラッタ〜・ラトラ〜タ』

俺はライオンを模した頭……ライオンヘッド、トラアーム、チーターレッグの猫系コンボラトラータに変化する。

「うおーーーーー!!」

俺が再び咆哮をあげるとライオンヘッドから高熱と共に光を放つライオディアスを発動する。

「GUUUUUUUUUUU……」

どうやらオーファンに効いているようだ。

「それじゃあ行く……」

「やらせはせん！」

そう言いかけたその時クルアウが乱入してくる。

「はあ！」

「せい！」

一進一退の攻防……俺が攻撃すればクルアウは防ぎクルアウが攻撃すれば俺が防ぐ。

「うおおおおおー!!」

「はあああああー!!」

一回、二回、三回……何十回にも及ぶ攻防。

「うおー!やべえ!!」

80体の怪人を相手にし、コンボを連続で使用し更に強敵であるクルアウと何十回にも及ぶ攻防……体力は限界で徐々に押され始める。

「クソ!!」

俺は後ろに飛びベルトをスオースキャナーでスキャンする。

『スキヤニングチャージ』

俺は前方に現れた3つのリングを潜りながらトラクローでXを描くようにクルアウを斬り裂く、クルアウもそれを見越してか爪でXを描くように斬り裂いてくる。

「……」

二つの影が交差して数秒……2人同時に膝をつき俺は変身解除しクルアウは脚がセルメンになった。

あまり大丈夫じゃなさそうな声が返ってきた。

あの場は解散することにした。そして翌日玖我がカレーの具を丸ごと入れかけるといふ暴挙以外は何も無く林間学校は終了した。

第5話 『連続コンボと鴉羽の覚醒』（後書き）

ども天です。今回はプロトカードについてちょっと詳しく。

プロトカードは貴大が所有するプロとドライバー専用のカードであり使えば使うほどレベルが上がり新たなカードや新たなフォームが使用可能になる。

ご意見や感想などがあればいただけると幸いです。それでは

第6話 『病院と弟と重量コンボ』（前書き）

現在貴大の持っているカードは8枚

第6話 『病院と弟と重量コンボ』

林間学校から帰ってきた俺は鴉羽に連れられて（つーか引きずられて）理事長とやりに会いに行った。そこで驚いたのは担任の高村がいたこと、そして理事長が11歳だと言う事あと十一歳とは思えない眼をしていた事が……。そして高村と鴉羽は理事長に鴉羽のチャイルドの竜（カグツチと言うらしい）のことやオーファンの事などを訊いていたが核心は話さず重要なことは誤魔化している様に見えた、そして俺がそれを追求すると理事長は動揺し全員追い出された。

それから数日たった7月18日俺は病院にいる。何故かって？それは鴉羽とその弟である巧海君に呼ばれたからだ。そもそも俺が何で巧海君と知り合いかと言うと林間学校が終わって数日後俺はのどに違和感を覚えそれをデネブに言ったら慌てて病院に連れて行かれその時に鴉羽と一緒にいた巧海君と出会ったのだ。そして何度かお見舞いに来ているうちに仲良くなったのだ。

「よう、待たせたか？」

「あ、貴大さん！」

「大丈夫よ、でも……ごめんね、こんなに暑いのに……」

「別に構わんさ」

それから俺達は外で昼食を食べることになり俺は巧海君を背負って食べる場所を探しながら移動していたのだが。

「ところで貴大さんとお姉ちゃんって付き合ってるの？」

「はあっ?」

「こ、こら巧海、変な事言わないのっ」

「だって2人ともお互いの話をしてると楽しそうだったから……」

「そうか?」

「そ、そんなわけないじゃない!!」

そんな風に見られてたのか……。

「それにね、お姉ちゃんの学校は恋愛禁止なんだよ?」

「え?どうして?」

「ど、どうしてって……そういう決まりなの」

「本当なの、貴大さん?」

「ああそうらしいな……まあ俺にはあまり関係ないが……」

「それって、どういうこと?」

巧海君の疑問に俺は。

「俺はやることがあるからこの学園にいるんだ、だからそのやるべきことが終わったらココを去ることになる」

「ちょっとどういう事よ?」

「言ってなかったか?」

「聞いてないわよ」

「……俺はこいつを集めるために来たんだよ」

そう言いながら俺は腰の右側につけたカードケースを指しながら言う。

「……何枚あるの?」

「さあ知らん」

「知らんって、どういうこと?」

「カードの有無はドライバーの反応次第だからな、一枚なのかそれとも10枚かはたまたそれ以上か……集めてみないと分からん」

「それじゃあ……」

「いつ出て行くか分からん、一日か一週間か一ヶ月か一年か……」

「そう……」

鴉羽は俺の言葉に俯いてしまった。すると。

「それなら、なおさらだよ、お姉ちゃん!」

「え、え？」

「ここで貴大さんとデートして！」

「は、はいー！、な……何言ってるのっ」

「俺は別にいいけどな」

「よ、余計な事言わないでよ」

$$\begin{matrix} \lceil & & \wedge & & \wedge & & \vdots & & \lceil \\ & \downarrow & & \downarrow & & & & & \\ & & & & & & & & \end{matrix}$$

俺がそう言ったその時。

「きやあああああ——！！」

「ば、化け物だ！」

悲鳴が聞こえ振り向くとそこには宝石を模したドーパント…… ジ
ユエルドーパント が現れた。

「はい——！！」

「お、お姉ちゃん……」

何時ものように叫ぶ鶉羽、戸惑う巧海君。

「……鴉羽、巧海君を連れて逃げろ」

「でも……」

「大丈夫だよ前も巧海君も俺が守ってやるから」

俺はプロトドライバーを出現させオーズのカードを取り出す。

「変身！」

ドライバーにオーズのカードを挿入するとオーズのベルトが出現し。

『タカ・トラ・バッタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

歌がなり俺は仮面ライダーオーズ タトバコンボ に変身しジューエルドールパントにトラクローで攻撃するが。

「効かん！」

トラクローの攻撃が全く聞かず反撃を受けて転がる。

「これならどうだ！」

俺はバッタレッグの力で跳躍、そのまま蹴りを入れるが。

「その程度なのか？」

と足を掴まれ振り回され投げられる。

「ガハッ……！」

「だ、大丈夫！」

鴉羽が駆け寄ってくる。

「大丈夫だ……俺は負けない……お前等を守るって決めたからな……絶対に負けない！」

そう言っただけで俺が立ち上がると三つの光が現れその光は3枚のメダルに変わる。

「行くぜ……鴉羽は下がってろ」

「う、うん……」

俺は鴉羽が下がるのを確認すると3枚のメダル……サイ・ゴリラ・ゾウのメダルをオースのベルトにセットするしオースキャナーでスキャンする。

『サイ・ゴリラ・ゾウ』

『サゴゾ・サゴゾ』

歌がなり俺はサイのを模した頭……サイヘッド、ゴリラを模した体……ゴリラアーム、ゾウを模した足……ゾウレッグのコンボ……サゴゾコンボに変化した。

「はあああああああー！」

俺がドラミングを行うとジュエルドーパントは中に浮き叩きつけられ宙に浮き叩きつけられを繰り返す。

「がっ……な、なんだこれは！」

今度はジュエルドーパントを引き寄せては殴り引き寄せては殴りを繰り返す。

「ガッ……ギッ……グッ……この俺が……」

「決めるぜ！」

俺はベルトをスキャンすると

『スキャニングチャージ』

俺はその場で跳躍し地面を踏みつけ、重力操作で敵を引きつけ頭突きとパンチを喰らわす……サゴーズインパクトを放つ。

「がああああああ！！！」

ジュエルドーパントは爆散し残ったのは粉々になったメモリとショットカー戦闘員だけだった。

「……またウルトラショットカーかよ」

そう言いながら近づくとショットカー戦闘員は粒子になって消え去った。大ダメージを与えたはずなのにな……と思いつつ俺は鴉羽の元に向かった。

第6話 『病院と弟と重量コンボ』（後書き）

消滅したショッカー戦闘員に黙祷……どーも天です。

オーズの成長ペースが速いかもしれませんが、あることがしたい為です。ご了承ください。

次回はついに主役ライダーのプロトが登場予定です。

ベルト様感想ありがとうございます。

ご意見や感想などがありましたらいただけると幸いです。それでは

第7話

『動きだす運命』その名はプロト』（前書き）

貴大の持っているカードは8枚。

なお今回の戦闘BGMは『Ride The Wind』を予定しております。

第7話 『動きだす運命』その名はプロト』

7月19日・・・

終業式が終わり夏休みに入ったのだが皮肉にもその日運命の歯車が動き出した。

夜、俺は嫌な予感がしたので裏山に走っていたら大きな揺れと獣の咆哮……そして戦闘音が聞こえたのでそこに向かっていたら鴉羽と出会い一緒に音の元へ向かった。そしてそこには死んだような（と言いか死んでる）クラスメイトの倉内、それに声をかける日暮、それを呆然と見つめる高村、天河、玖我、美袋あと結城だったかなと碧ちゃん、そして凧が居た。

「…………チャイルドでも倒されたか？」

「いくら守護者でもストレートに言いすぎじゃない？」

俺の疑問に肯定しながらも非難の眼で見る凧。

「どういうことよ？」

鴉羽の…………いや全員の疑問に凧は答えるように説明していく。

「ようするに、負けなきゃいいんでしょお？安心なさい、オーバーアンなんか私が全部やつつけてやるわ」

「そうよこれだけの数のHiMEが居るんだもん、何ならみんなで協力し合って…………」

碧ちゃんは自信満々に鴉羽はみんなに確認するよつに言う。だが…。

「残念だけど、そうもいかないんだよ」

「……なんせH i M Eの相手は他のH i M Eだからな」

「だから人の役目をとらないでよ……」

再び非難の眼で見てきたので。

「ならお前に役目を授けよう……行くぜ！タツちゃん！」 ↑杉田ボイス

「ビュンビュン！いきますよ！！テンションフルテッシモ！！」

「アンタって人は！！！」 ↑鈴村ボイス

「このバカヤロウ！！」

「よし次……あひゃう！」

「歌はいい……うわつと！！」

2人まとめて玖我に撃たれました。

「貴様等！この状況でよく漫才が出来るな！」

「玖我……銃弾と言う過激な突っ込みは……おふう！！」

玖我に撃たれ更に周りを見るとみんなに睨まれたぜ！

「うゝん僕もずっと漫才していたいけどご主人様はそうは思っていないみたいだからね、残念だけどここで消えてもらうよ守護者」

そう言った凧の後ろからソードドーパントとランスドーパントが現れる。

「やっぱりそうか……俺達いいコンビになると思ったんだけどな……」

そう言って俺はプロトドライバーを出現させカードを取り出そうとするがその前にエネルギー弾が飛んできてカードケースを吹き飛ばす。

「ちっ……もう一体居やがったか……」

更に2体のドーパントの後ろからガンドーパントが現れる。

「これで終わりかな？」

凧がそう言っが。

「さて……それはどうかな」

そう言って俺はプロトドライバーを腰に装着し左手をドライバーにスライドさせながら腰の右側辺りまで持っていき右手を左肩辺りまでもって行く。

「な、まさか！」

「そのまさかだ、変身！」

右手を斜めに下げつつドライバーにスライドさせ左手を腰の反対側に持っていく。

『mode Proto』

電子音が鳴り俺の前に銀のオーロラが現れそれをくぐると俺は白銀の装甲を纏った戦士……仮面ライダープロト プロトフォームに変身した。

「行くぜ！」

俺はガンドーパントに迷わず向かって行く。ガンドーパントはエネルギー弾を撃ってくるがそれを片手で弾きながらガンドーパントをぶん殴る。

「ぐおっ……」

ガンドーパントは仰け反りその隙に俺は殴る、殴る、殴るそして跳躍しながら蹴りを入れ俺は吹き飛ばされたカードケースの元に着地し回収する。

「さて、これで行くか」

俺はアクセルのカードを取り出しドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE ACCEL』

電子音が鳴り俺の左腰のブレイカーケースがずれて移動しそこに仮面ライダーダブルのマキシマムスロットが現れる。

「うおーーーーー！！！」

横からソードドーパントとランスドーパントが向かってくるがそれを軽くかわし両方に蹴りを入れた後マキシマムスロットにアクセルメモリを入れる。

『Accel Maximum Drive』

ガイアウエスパークが鳴り。

「はっ！」

俺はアクセルの必殺技……アクセルグランツアーをソードドーパントに向けて放つ。

「ぐおおおおおおおおお！！！」

ソードドーパントは叫びながら爆散、砕けたメモリとショッカー戦闘員だけ残りその後すぐに両方とも消滅した。

「ぬおおおおおおお！！！」

ランスドーパントは攻撃してくるがそれをかわしながら俺はガタツクのカードを取りだしドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE GATACK』

電子音が鳴り腰の左側にあったマキシマムスロットが消え仮面ライダーカブトのスラップスイッチが現れ手にはガタツクのがタツクダブルカリバーが出現する。

「はぁ！」

俺はランスドールパントの槍をマイナスカリバーで受け止めプラスカリバーで斬る。

ランスドールパントが仰け反った際にマイナスカリバーとプラスカリバーで交互に斬る、斬る、斬る、斬る。こちらの猛攻を受け仰け反ったランスドールパントの隙を見逃さず俺はマイナスカリバーとプラスカリバーを合体させ。

「ライダーカッティング！」

『R i d e r C u t t i n g』

電子音が鳴り。

「はぁ！」

俺はガタツクの必殺技……ライダーカッティングをランスドールパントに放つ。

「ぬあああああああああー！！！」

ランスドールパントも叫びながら爆散、ソードドールパントと同じくメモリと戦闘員だけ残りその後消滅した。

「後はお前だけだ！」

そう言いながら俺はガンドーパントに向かっていく。

「くるなあ……くるな!!」

怯えながらガンドーパントはエネルギー弾を撃ってくるがそれを手で弾きながらブレイカーケースの中にあるブレイカーカードを取りだしスロットに入れる。

『Proto Breaker』

電子音が鳴り俺は跳躍し。

「はあ！」

そのままプロトの必殺パンチ……プロトナックルを放つ。

「ぎゃあああああああ!!」

ガンドーパントも爆散……ほかの2体と同じ末路をたどった。

「ふう……」

俺は変身を解きながら文句を言ってやろうと振り向くと尻は既にいなかった。運命が終焉へ確実に回り始めた……そう感じた俺だった。

第7話

『動きだす運命』その名はプロト』（後書き）

どーも作者の天です、今回はプロト変身時のアビリティライドの各ライダーについて説明しようと思ったのですが予想より長くなったのでやめます。

ご意見や感想などあればいただけると幸いです。それでは

設定〱仮面ライダーのアビリティライド編〱

クウガの場合はマイティキックとドラゴンロッド、ペガサスボウガン、タイタンソードとそれに対応する必殺技が使用可能。

アギトの場合はライダーキックとストームハルバート、フレイムセイバーとそれに対応する必殺技が使用可能。

龍騎系の場合はそのライダーにあったアドベントカードが使用可能。またバイザーは出現せずプロトドライバーに挿入することによって効果を発揮する。

ブレイド系の場合はライダーにあったラウズカードが使用可能。龍騎系とは違いこちらはラウザーが出現しそれに通すことでカードの効果を使用できる。

響鬼系の場合は各ライダーにあった武器（音撃鼓や音撃棒など）が出現する。

カブト系の場合は腰にスラップスイッチと各ライダーの武器（カブトのカブトクナイガンやガタツクのカタツクダブルカリバー、サソードやドレイクの場合はゼクターごと）が出現し必殺技は必要な動作をしながら技名を言うパターンと（ライダースラッシュやライダーシューティングなど）技名を言うだけで発動する場合がある（ライダーキックやライダージャンプなど）

電王系の場合はガッシャー系とフルチャージカード（ブレイカーカードの一種）が出現する。必殺技はフルチャージカードを入れることによって必殺技を発動する。

デンガッシャーやゼロガッシャー

キバの場合はウェイクアップカードが出現し更にガルルセイバー、バッシュ・マグナム、ドッガハンマーを使用可能。必殺技はウェイクアップカードを挿入することによって発動する。

ディケイド系の場合はディケイドはライドブッカーが出現しその中のライダーカードをプロトドライバーに挿入することによって効果を発揮する。なおディエンドは検討中。

ダブル系の場合は腰の左側にマキシマムスロット（ダブルの場合はマキシマムスロットとメモリスロット）が出現し。ダブルはメモリスロットにメモリを挿入することによって出現させ、アクセルはプロトカードで出現させエターナルは最初から持っている。必殺技はマキシマムスロットに各メモリを挿入することによって発動する。

オーズの場合はメダルスロットと各コンボメダルとオースキャナーが出現しスロットにメダルを入れることで各コンボの特殊能力を発揮し更にオースキャナーを使用することによって必殺技を発動させる。なおメダジャリバーでの必殺技も可能。

設定〱仮面ライダーのアビリティライド編〱（後書き）

因みに作者は響鬼をみてませんのでほとんど出てこないかも……。
それでは〱

第8話 『海と強襲と降臨する奇跡の力』（前書き）

今回は戦闘から書いたのにおかしい部分があるかもしれません。

貴大の持っているカードは8枚。

第8話 『海と強襲と降臨する奇跡の力』

俺は碧ちゃんにてHiMEの親睦会で海に行くので行かないかとに誘われた。しかし部外者の俺が言ってもいいのかと聞くと。

『えっ？何今更部外者面してんの？』

と呆れられてしまいそのまま参加することが決定した。

7月21日・・・

俺達は海に到着した。因みにメンバーは俺、鴉羽、玖我、美袋、碧ちゃん、天河、高村、そして生徒会の藤乃静留に神崎黎人だ、そして水着に着替えたその後ハプニングもあったが（内容は想像に任せろぜ！）今は鴉羽と他愛の無い話をしながらゴムボートに乗っているのだが。

「……………ねえ」

「どうした？」

「……………その傷どうしたの？」

鴉羽の言う通り俺の身体には無数の傷がある。斬られた傷や抉られた後、火傷の後など大小様々な傷が俺の身体にはあった。

「それに風って奴が言ってた守護者って何？」

俺は鴉羽の質問に全て答えた。守護者とは何かとか、二千年もの間戦ってきたことや戦ってきたのが崩壊寸前の世界がほとんどだった

ことや自分が守護者になった経緯など何故答えたのかは自分でも分からないが全部答えた。

「……」

全部聞き終えた鴉羽は黙ってしまった。そしてそのまま時が過ぎ帰ろうとしたとき何者かが光線による攻撃を仕掛けてきた。俺が攻撃があつた方を向くとそこには初等科のアリッサ・シアーズ（だったか？）とクラスメイトの深優・グリーアだった。

「ごきげんよう、ワルキューレの皆さん」

「アリッサ・シアーズ」

「彼女達も……HiMEだつて言うの？」

アリッサ・シアーズの言葉に玖我が眩き鴉羽が驚く。

「いや、そんな情報は……」

「いち、にい、さん、しい……たくさんいるね。ちょーどいいや」

戸惑う玖我の言葉を遮るアリッサ・シアーズ。

「この好機を逃すわけにはまいりません。失敗は許されません」

「わ、わかつてるよ！」

「深優さん！あなた、HiMEだったの？」

しかしグリーアは鴉羽の質問に答えず事務的な口調で。

「現在19時18分、日没まで後5分……現時刻を以て、ラグナロック作戦を開始します」

と呟くと。

「死になさい！ワルキューレたち！」

とアリッサ・シアーズが再び光線を放ってくる。

「させるかよ！」

俺はプロトドライバーを出現させオーズのカードを取り出し。

「変身！」

そのまま挿入する。

『KAMEN RIDE OOO』

オーズのベルトが出現し。

『タカ・トラ・バッタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

歌が鳴り俺は仮面ライダーオーズへと変身する。

「はぁ！」

俺はトラクローで光線を弾き飛ばすが追いつかない。

「ならこれで！」

俺はトラのメダルをカマキリのメダルに交換しオースキャナーでスキャンする。

『タカ・カマキリ・バツタ』

俺は タカキリバ になり回転しながら光線を弾いていく。

「やはり仮面ライダーと言うのは厄介ですのでここで排除します」

グリーアが俺に向ってくる。

「上等だ！あのデカイのは任せたぞ玖我」

「ああ、分かった！」

その返事を聞き俺はグリーアと対峙すべく走り出す。

「はあ！」

俺のカマキリソードとグリーアの腕から伸びたブレードがぶつかり合う。

一回、二回、三回、何十回にも及ぶぶつかり合い、お互い引かず、お互い押さずの一進一退の攻防しかし玖我たちは押されている。俺はバツタレッグの力で跳躍ドライバーを出現させアクセルのカード

「GIIIIIIIIIIIIIIIIII!!」

メタトロンは更に岩陰に隠れていた鴉羽に雷撃を放つ。

「させるか!」

俺はカマキリとバッタのメダルをトラとチーターのメダルに換えスキャンする。

『タカ・トラ・チーター』

俺は即座に タカトラーター になって加速し鴉羽を助ける。

「大丈夫か?」

「あ、うん……」

「戦いたくないなら別に構わない、言ったら、お前は俺が守るってな!」

そう言つて俺は前の戦いの後に現れた二枚のメダル…… クジャクメダル と コンドルメダル を取り出す。

「これは切り札だが…… まあしゃーないか!」

俺はトラとチーターのメダルとクジャクとコンドルのメダルを交換しオースキャナーでスキャンする。

『タカ・クジャク・コンドル』

『タージャードルー』

身体が炎に包まれ俺はタカヘッドが強化された　タカヘッド・ブレイブ、クジャクを模した体　クジャクアーム、コンドルを模した足　コンドルレッグの　タジャドルコンボ　にコンボチェンジした。

「GIIIIIIIIIIII!!」

メタトロンが雷撃を放つが俺はそれを出現させたタジャスピナーで防ぐ。

「今度はこっちの番だ！はあっ!!」

俺は背部にクジャクの尾羽を模した羽が出現しそこから無数の羽手裏剣を展開し放ちメタトロンに直撃させる。

「まだまだ!!」

俺はクジャクウィングを展開し上空へ飛び立つ。

「GIIIIIIIIIIIIIIIIII!!」

メタトロンが再び雷撃を無数に放ってくるがそれを回避しながらタジャスピナーからメダル状の火炎弾を射出させ迎撃する、そして。

「これで決める!!」

俺はオーズのベルトをオースキャナーでスキャンさせる。

『スキヤニングチャージ』

俺はメタトロンの雷撃を掻い潜りながら突撃しコンドルレッグをクロー状に展開し炎を纏いながら急降下蹴りを叩き込む プロミネンスドロップ を放つとメタトロンの頭が粉碎するがまだうごめいてこちらを攻撃しようとしてくる。

「ならこれで！」

俺はタジャスピナーを開きその中のセルメダル三枚を取り出しベルトのタカ、クジャク、コンドルのメダルをセットしスキャンする。

『タカ・クジャク・コンドル・ギン・ギン・ギン』

『ギガスキャン』

「はあーーーーー！！せいやあ！！」

俺は不死鳥を模した炎を纏い突撃する マグナブレイズ を放と。

メタトロンの胴体に直撃し貫通しメタトロンは崩れるように消滅する。

俺は変身を解除しながらグリーアのほうへ向くと既に姿はなかった。何とも言えない戦いになってしまったと思いつながら鴉羽たちの元へ向かった。

第8話 『海と強襲と降臨する奇跡の力』（後書き）

どーも天です。

貴大についてですが長生きと言うより成長も衰退してないんですよ、まあ簡単に言うとか灼眼のシャナのフレームヘイズみたいなものってことです。そして貴大の過去ですがいずれ語るかもしれませんが新たに外伝と言う形で書くかもしれませんその辺はおいおい。

ベルト様感想ありがとうございます。

ご意見や感想などがあれば言っただければ幸いです。

舞・HiME（運命の系統樹）の世界も残り2話（場合によっては増えるかも）です。それでは

第9話 『失うものと芽生える思い』（前書き）

現在貴大の持っているカードは9枚。

第9話 『失うものと芽生える思い』

7月27日

唐突だが鴉羽の弟の巧海君が亡くなった死因は雨に打たれた事による肺炎だった。何故雨に打たれたのか……それは巧海君の誕生日、巧海君が鴉羽にプレゼントしようとした鴉羽の顔をモチーフにした紙粘土の人形を守るためだった。そして数日後の7月30日、俺達2人だけで葬式や火葬を行った。まあ、葬式は簡単なものしか出来なかったが……。そして更に日が変わり8月30日、俺はあることを伝えようと鴉羽を探し回ってようやく裏山に居る鴉羽を見つけた。

「ここに居たのか鴉羽……」

「え……、小日向君」

「身体は大丈夫か？」

「うん……」

「ここで何やってるんだ？」

「……お参り」

「お参り？」

鴉羽は真っ直ぐ神社のほうを向いて。

「巧海が、ちゃんと天国にいきますようにって」

「そうか……」

鴉羽は拝殿に向かって手を合わせた、俺もその後で手を合わせるが。

「……なに？」

「……え？」

地面が揺れ始め周りに邪気が漂いだす。

「オイオイ……」

「ああ……」

俺と鴉羽の前に5メートルほどの二つ足で立ち、大きな顎と長い尻尾を持ったオーファンが現れる。

「こんな時に面倒な！」

俺はプロトドライバーを出現させアクセルとエンジンブレードのカードを取り出し挿入する。

『KAMEN RIDE ACCEL』

『WEAPON RIDE ENGINEBLADE』

腰にアクセルのドライバーが現れ。

『Accel』

ガイアウイスパーが鳴り俺は仮面ライダーアクセルへ変身し横に出現したエンジンブレードを持ちオーファンに向かうが。

「させんよ！」

とクルアウが乱入してくる。

「次から次へと！」

俺はクルアウをバックステップで回避するがそこにオーファンが尻尾で攻撃してくる。

「ちいつ！」

俺は転がりながら回避しドライバーで助っ人を出そうとするがドライバーが光弾に弾かれる。

「今度はなんだ！」

光弾が放たれたほうを向くとそこには仮面ライダーカイザとそのすぐ後ろにはサイドバツシャーが居た。

「クソ！厄介すぎるだろ！」

俺は悪態をつきながらクルアウの攻撃をかわしながらエンジンブレードで切り裂きオーファンの攻撃を転がって避けカイザの光弾をエンジンブレードで弾きサイドバツシャーのミサイルを『Jet』を使い撃ち落していく。

「はぁ…はぁ…ならこれで！」

「……ここまでか」

そう言いながらクルマウは銀のオーロラを出し去っていった。

「……」

俺は無言で変身を解除しながら考える、何故触媒を失ったカグツチが出現したか……いや考えるまでもないな触媒が巧海君から俺に移っただけだろう。そう結論付け俺は考えることをやめ鴉羽に。

「大丈夫か？」

と声をかけると。

「あ、あたし……小日向君が戦ってるの見ててあの時死んじゃうんじゃないかって思うとすごく怖くなって……巧海が死んじゃったときには……あたしの大切な人は小日向君になってたんだね。……やつぱりカグツチは強いね。呼び出したあたしが怖くなるくらい」

「……鴉羽」

「でもあんなに強い力なのに、小日向君を助けられる力なのに……。巧海を救ってやる事が出来なかった……。巧海はきつと、あたしの事恨んでる。弟一人助けてあげられないあたしを恨んでる」

鴉羽の言葉に俺はふう……と一息つきながら。

「それを決めるのはこれを読んでからにしろよ」

そう言っただけ俺は懐からとある手紙を出した。

「……これは？」

「巧海君が俺に託した手紙だ」

俺は生前に巧海君から手紙を受け取っていた当時俺は縁起でもない
と思いながらも後で笑いの種にしてやろうと思って受け取ったのだ
がそれがこんな形で生かされるとは思わなかったが……。

「巧海……巧海！」

手紙を読み終えた鴉羽は巧海君の名前を呼びながら泣き出した。そ
れから暫くして……。

「落ち着いたか？」

「うん……ごめんね」

「別に構わん」

「それでね、後悔したくないから言うね……私小日向君のことが好
き」

「ああ……」

「小日向君は？」

「はい？」

「あの手紙に書いてあったこと、あれってホント？」

「あ、あれって？」

「もう、とぼけない！あたしの事まんざらでもないってこと」

「あーあれか……困ったな……俺は守護者だしな……それに……だー
ー……面倒だ！！」

「ああそうさ！俺も鴉羽が好きだよ」

「ホントに？」

「ここで嘘を言う理由が見当たらん、しかし良いのか？」

「えっ？」

「俺はいずれこの世界を離れる。世界にとっては俺は毒でしかない
からな、その時お前は……」

「それなら大丈夫！あたしついて行くから！！」

「……は、はい……！！！」

「ちょっと！真似しないでよね！」

「ついて行くってお前……」

「もう決めたから止めても無駄よ！」

「……はあわかったよ……これじゃあカミコに怒られるか？いや問

題ないなあいつの弱みはかなり握ってるしな」

と俺が呟くと。

「カミコって誰よ？」

「あ？」

「カミコって誰よこの浮気物！！」

「ふべら！」

綺麗な右ストレートを受け俺は吹っ飛ぶそして吹っ飛んだその横にはカイザのカードがありサイドバッシャーを倒した所に行くとサイドバッシャーのカードもあった。鴉羽にカミコのことを説明しながら俺はこの先かなり厄介なことになるなと考えるのであった。

第9話 『失うものと芽生える思い』（後書き）

どーも天です本当なら巧海君の手紙の内容も入れる予定でしたがあまりにも長いのでカットしましたあしからず。

そして浮気者の件はカード回収のためにやりました（笑）

ブラッキン様、ベルト様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていただけと幸いです。それでは

第10話 『決戦〜現れる炎の不死鳥〜』（前書き）

貴大の持っているカードは11枚。

第10話 『決戦！現れる炎の不死鳥』

8月4日・・・

俺と舞衣（名前で呼ぶことにした）は神崎黎人に呼び出された。目的はおそらくH i M E 同士の最後の戦いだろう。俺は黒幕が神崎だと知っているのでプロトドライバーを腰に装着して更にメダジャリバーを出し舞衣と共に裏山に向かった。そこには弥勒（いつも美袋が持っている刀）を持った美袋命と黒幕である神崎黎人がいた。

「ようこそ」

「あえて聞こう何の用だ？」

「なに、ここで最後のH i M Eを決めようと思ってね」

「なるほど……それで後ろに隠れてるやつがいるのか」

俺がそういうと神崎たちの後ろからクルアウ、仮面ライダーガイ、仮面ライダーシザース、仮面ライダーインペラーが姿を現した。

「こちらも君を評価しているんだ当然だろ？」

「なるほど……それで俺のプロトカードを悪用か……」

「カードを落とした貴様の上司を恨むんだな」

クルアウはそう言ってライダーと共に俺に向かってきた。

「舞衣……美袋は任せたぞ」

そう言いながら俺はメダジャリバーを放り投げ。

「変身！」

プロトドライバーに両手をスライドさせる。

『mode Proto』

銀色のオーロラを通過し俺は仮面ライダープロト プロトフォーム
に変身しクルアウやライダーたちに向かっていく。

「はぁ！」

俺はガイを殴り飛ばしながらシザースの攻撃を回避し回し蹴りを入れインペラーに裏拳を入れ飛び掛ってくるクルアウを上体を仰け反らせながらメダジャリバーで斬り裂く。時間をかける気はない舞衣を援護するために一氣に決める！そう思いながら俺はブレイカーカードをドライバーに挿入する。

『Proto Breaker』

「おらっ！」

インペラーにエネルギーを纏った拳で攻撃する プロトナックルを叩き込むと爆散しプロトカードに戻る。俺はそれをキャッチし即座にドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE IMPERER』

カードケースの中にインペラーのアドベントカードが出現、それを一枚取り出しドライバーに入れる。

『FINAL VENT』

何処からレイヨウ系のミラーモンスターが出現し攻撃を仕掛けるクルアウとシザースは避けたようだがガイは直撃次々に攻撃を受けた後最後に俺の飛び膝蹴り…… ドライブディバイダー を叩き込むとガイも爆散しプロトカードに戻った。

「いい忘れてたが礼を言っとくぜなんせ面倒なカード集めを手伝ってくれたんだからな！」

俺はそう言いながらカードを一枚取り出しドライバーに挿入する。

『ADVENT』

電子音が鳴りインペラーの契約モンスターのギガゼールとその派生モンスターが現れクルアウに襲い掛かる。

「そいつ等と遊んでな！」

俺はそう言いながらシザースに向かっていくとシザースがカードデツキからカードを一枚取り出しバイザーに挿入する。

『STRIKE VENT』

シザースはシザースピンチを装着し攻撃してくるが俺はそれを軽々回避し回し蹴りをいれながらインペラーの最後のカードを取り出しドライバーに挿入する。

『SPIN VENT』

何処からかガゼルスタップが飛来し右手に装着され左手に持ったメダジャリバーと両方使いシザースを追い詰めていく。

「おりゃ！」

俺はその時丁度ピンチになっている舞衣を助けるために美袋に向かってシザースを投げ衝突しその隙に俺は舞衣と合流する。

「舞衣大丈夫か？」

「ええ……なんとか」

こっちは俺と鴉羽とカグツチが向こうは美袋とクルアウとシザースがお互い構えるが。

”　”

俺の電話が鳴る。

「あつちよつとごめんね」

俺は電話を取り通話ボタンを押す。

「今忙しいんだが後にしてくれない？」

『えゝそんな事言っていないのかな？せつかくフェニックス君を送ったのにさゝ』

電話の相手はカミコだった。

「え、マジで！よしそれなら尊敬してやろう！」

『え、ホント！』

「ああ、ミジンコ……いやミドリムシぐらいは尊敬してやる」

電話しながら攻撃して来たシザースをかわし蹴りを入れ。

『ミドリムシってひどい、乙女心が傷ついた！』

「ミドリムシをバカにするなよこのやろう！それに乙女ってお前今
2……」

『わあああああああ！！いゝわゝないゝでゝ！』

「うつさいな！電話で騒ぐな！本当に暴露するぞバカヤロウ！」

そう言いながら仕掛けてきたクルアウをメダジャリバーで斬り。

『いゝ、ごめんなさい……』

「謝るならマシンプロトを送りやがれ！」

『わかりました……って今の何かおかしくない！！』

「んじゃきるぞ〜」

『え、ちょ、まっ……”ブツン、プープープー”』

俺は携帯をしまい。

「待たせたな！」

俺はそう言いながら再び構える。

「なかなかだな……それじゃあ僕も参戦するでしょう」

そう言った神崎はオーズドライバーにそっくりなドライバーと三枚のコアメダルを取り出す。

「さあ……行くぞ！変身」

神崎はドライバーを腰に装着し3枚のコアメダル……ユニコーン

フェニックス ケンタウロス のメダルをドライバーに入れ

スキャンする。

『ユニコーン・フェニックス・ケンタウロス』

音声が鳴り神崎はオーズに似た角の生えた頭、鳥のような羽を持った体、馬のような四本足の姿に変身した。

「なるほど……これがメダルの力……仮面ライダーの力か！」

「仮面ライダーだど？」

「ああそうさ！仮面ライダーユニフェロスって言った所か……」

「はっ……お前が仮面ライダー？ふざけるな！」

「なに？」

「仮面ライダーってのは人々の平和を守るためにボロボロになっても戦い続ける奴等の事を言うんだ！それを人の思いを踏みにじりなれんとも思わないテメエが名乗る資格はない！！」

「貴様！何者だ！」

「最古にして最強の仮面ライダー……とでも名乗っておくさ！」

「ふん！やれ！」

神崎がそういうとクルマウとシザースが襲い掛かってくるが何者かに阻止される。

「やっと来たか……」

「おー待たせしました！」

そこに現れたのは赤い不死鳥を模したプロトモンスター　プロトフェニックス　だった。

「行くぞフェニックス、一気に片をつける！」

「不思議なくらい超最高で行きますよー！！」

「「変身！！」」

プロトフェニックスが背中に装着され。

『mode phoenix』

電子音が鳴り俺は炎に包まれその炎が消えると両肩と胸に赤い不死鳥の翼を模した追加装甲を纏い背中のプロトフェニックスの羽が畳まれてそこからキバ エンペラーフォーム のような赤いマントが現れ仮面ライダープロト フェニックスフォーム に変身する。

「雑魚に時間をかける気はない一気に決める！」

俺はシザースに向かって下段、中段、上段の順に三連蹴りを入れその後サマーソルトを食らわし最後に飛び蹴りで叩き込むとシザースは爆散プロトカードに戻った。

「次はお前だ！」

そう言つて俺がクルアウに指を刺すと。

「うおおおおお！！！」

がむしゃらに攻撃してくる、それを回避し蹴りを入れよけた所にアクセルトライアルのマシンガンスパイクに勝るとも劣らない連続蹴りを叩き込んでいき最後に。

「はぁ！」

飛び回し蹴りを食らわすとクルアウの身体から無数のセルメダルと一枚のコアメダルが飛び出しそれを俺はキャッチする。

「ぐう……この借りは必ず返す！」

そう言つてクルマウは銀色のオーロラを出現させ去つていった。

「後はお前だけだぜ！」

「なに……貴様を倒せば問題ない！」

そう言つて向かつてくる神崎を軽く回避し連続蹴りを入れ最後に回し蹴りで距離を開けるそして。

「一気に決める！」

俺はブレイカーカードを取り出しプロトドライバーに入れる。

『Phoenix Breaker』

プロトフェニックスが翼を広げるとマントが消え虹色の光の翼……エナジーウイング が出現する。

「はああああああ！」

俺ははるか上空に飛び上がりそこから縦に円の描くように飛び。

「だああああああああー！！！」

一気に急降下し神崎に蹴りを叩き込む。

「……ここまで来て……我が積年の願が……潰えるとは……がああああああああああー！」

神崎は叫びながら爆散しその後にはコアメダルだけが残った。そしてそのコアメダルは乱入者によって回収された。

「なんだお前？」

俺が問いかけると。

「俺か？俺の名はスベル、ウルトラショックカーの大幹部だ」

またウルトラショックカーが。

「しかし……せつかく俺のコアメダルを貸し与えたと言うのに……人間と言うのは使えんやつだ」

「デメエ！」

俺はスベルの言葉に激怒し構えるが。

「ふん、今は貴様と戦う気はない」

そう言いながらスベルは銀色のオーロラを出し去っていった。

「……」

俺が変身解除すると舞衣がやってくる。

「終わったんだよね……」

「多分な……」

舞衣と俺が眩き合つと。

「しかし、まだ終わりじゃないんだよねえ」

そこに風が現れた。物語は終焉へと向かっていく。

第10話 『決戦〜現れる炎の不死鳥〜』（後書き）

どーも天です！これで終わる……って思っていた時期が私にもあり
ました……。

端折って無理やり……とか思いましたが最後までキッチリ決めな
いとなってことでもう1話追加します。

ベルト様、斬空様ご感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは

エピソード 『さよなら……』（前書き）

今回はキッチリやると言いつつ端折り更に強引に話を繋げてしまいましたことをお詫び申し上げます。

前回のあらすじ・・・神崎を撃破し最後のH i M Eになった舞衣、全て終わった……と思った矢先に凧が現れる。

貴大の持っているカードは14枚。

エピローグ 『さよなら……』

「……風」

「君が最後のH i M Eみたいだね」

風は舞衣に向かってそう言う。

「……あたしはどうすればいいの？」

風はクスクスと笑いながら。

「最後の舞を踊るにふさわしい場所がある。一番地の介入もなくなり、正当な方法で舞姫が残った。星詠の舞を本来の形に戻そうか」

そう言った風につれられて向かった先は中央に隠し階段が出現している図書館の更に隠し階段を下りた先にある洞窟のような場所だった。

「さて、ここが黒曜宮。媛星を返すための場所さ。舞衣ちゃんは、ここで舞姫としての役割を果たせば、それで終り。12の思いの力を使って、姫星の軌道を修正するんだ」

風は、頭上の媛星を指してそう言った。

「……」

無言の舞衣。

「さあ舞衣ちゃん」

「……」

凧が声をかけるも無言の舞衣。

「……どうしたの？」

「……どうして……」

「え？」

凧は問いかけた舞衣に問いかけ返され驚く。

「どうしてこんなことのために、12人ものHiMEの思いが必要なの？どうして大切な人の命が、奪われなければいけないの？」

舞衣は岩戸に向かって叫び全身を震わせ、間近に迫った媛星を睨みあげる。それを俺と凧は黙ってみていることしかできなかったが。

「……それが、あの星を回避できる唯一の手段だからです」

と言いながらそこに現れたのは風華学園理事長の風花真白だった。

「鴉羽さん。貴方のおっしゃることはわかります。ですが……貴方には見えるのでしょうか？あの、赤く、凶々しく輝く星が」

「……」

理事長の言葉に舞衣は黙る。

「あれは300年周期で地球に近づいては、衝突の危機をもたらしているのです。そして、その度に私達は儀式を執り行い、媛星の脅威を回避してきたのです。それは、邪馬台国時代、つまり卑弥呼の時代から行われてきたことなのです……。卑弥呼は神に使える巫女であり、軌道を用いてこの国を予言し、守り、厄災からの回避を行ってきたのです。媛星とて、それらの一つに過ぎません。卑弥呼は媛星の接近を察知し、それを回避する星詠の舞の儀式を生み出したのです」

理事長の説明に舞衣は。

「それが、12人のHiME同士が闘うって事だって訳？」

「『ムス蟲毒』と言う呪法をご存知ですか？」

「確か……。壺の中にあらゆる毒虫を入れ、お互いに食わせ、闘わせ、最後に生き残ったものを使って行う強力な呪法のことだな？」

「星詠の舞で取った方法はそれに似ています」

「……HiME同士を闘わせ、そして生き残ったものがHiME星を還す」

俺の言葉に理事長は媛星とはなんなのか、また何故星詠の舞ができたのかそして凧の正体もを俺達に説明した。そして理事長は舞衣に媛星を返すように言うと言った舞衣は他に方法がないのか300年周期の軌道を永遠に封じ込める方法はないのかと問いかける。するとカグツチの力を解放すればもしかしたらできるかもしれないと、あくまで可能性があると言ってきた。しかしその代価は舞衣の存在。俺達

は迷いながらもカグツチを開放するために必要な封印の草薙がある場所に向かった、そして。

「もう決めたのか？」

「うん……ねえ？」

「なんだ？」

「あたしの事、軽蔑してる？」

「どうしたいきなり？」

「だって変えられるかどうかかわからないのに未来の人たちのために貴大君の思いを犠牲にしてる……」

その言葉に対し俺は。

「いや……軽蔑されるのは俺のほうだ」

「えっ？ どういう……」

舞衣が言い終わる前に舞衣の顔を手で覆い。

「闇二眠レ」

俺は力を使い舞衣を眠らせる、するとプロトフェニックスが出てきて。

「マスター……本当にいいんですか？」

「ああ」

プロトフェニックスの問いに俺が短く答えると。

「これで彼女が幸せになれるとでも？」

「思ってるわけないだろ……これは俺のエゴだ、舞衣には生きていてもらいたい……俺がこの世界から消えることになってもな」

「ならいいです」

「じゃあ行くか！」

俺はプロトドライバーを腰に装着し。

「不思議なくらい超最高でいきますよ！」

プロトフェニックスは俺の背中に移動し。

「「変身！！」」

『mode phoenix』

俺は仮面ライダープロト フェニックスフォーム に変身しエネルギーリングを展開し上昇大気圏を突破しついに援星付近まで到達する。

「さて……決めますか！」

俺はブレイカーカードをドライバーに挿入し。

『Phoenix Breaker』

電子音が鳴り俺は虹色のオーラに包まれ。

「はあっ！」

媛星に激突し破壊する。そして俺は舞衣の元に戻り変身を解除し消滅する時を待つ。

「ん……あ、あれ？」

どうやら鴉羽が起きた様だ。

「ようー！」

「あれ？あたし……って貴大その体！」

舞衣は粒子化していく俺の身体を見て驚いている。

「あ、これ？なんかさあ媛星壊したら世界から有害だと判断されちゃってな。強制的にはじき出される一歩手前ってとこかな？」

「強制的にはじき出されるって！それに媛星を破壊したって……」

「お前に消えて欲しくなかったからな、やっちゃったぜ！」

「やつ……た……！じゃ……わよー！」

どうやらこれで限界らしい。伝わるかどうか知らないが最後に。

「これでさよならだ、お前は这个世界で生きろ、じゃあな！」

こうして俺はこの世界から消滅した。

舞衣SIDE・・・

「お前に消えて欲しくなかったからな、やっちゃったぜ！」

貴大は冗談めかして言う。既に体が透けていると言うのに。

「やっちゃったぜ！じゃないわよ！」

私がこう言い返すと。

「こ…で……らだ、お……の世……生き…、じゃあな！」

こういつて貴大は消えた。

「……バカ」

あたしは立ち止まるわけにはいかない。だって巧海も貴大もそういうあたしが好きだって言ってくれたから……でも今は。

「う……ああ……ああああああああああ！！！！」

それから私はわけも分からなくなる位泣き続けた。

???SIDE・・・

とあるビルの屋上赤い少女と赤い男が立っている。

「行くわよ」

「了解した」

エピローグ 『さよなら……』（後書き）

どーも作者の天です。

サブタイトルのエピローグは舞・HiMEの世界のエピローグと言う事でこの小説自体はまだまだ続きます！

ベルト様、斬空様、門矢光様、霞 空斗様、感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

嘘予告！ 『仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー NOVEL大戦[∞]

この予告は車の運転中に思いついたただけの本編を書く予定のない遊びです。あしからず。

交わる事のない三人のライダーの物語……

仮面ライダーカマード編

突如地球に現れた正体不明のロストロギア……それを調査するため地球に向かったのだが……。

「地球の海鳴の町にロストロギアだと……」

「俺はな！大切なもん守るためなら神でも悪魔でも越えてやるさ！」

「貴様は絶対俺が潰す！」

仮面ライダーブレイブ編

突如起こった麻帆良中等部3年A組の襲撃事件。その先にあるものとは……

「3・A襲撃事件の調査だと……？分かったその依頼引き受けよう」

「ヒーローってのはな！一度気取ったらそいつの前では貫き通さなきゃいけないんだよ！」

「お前の敗北は決定した……そしてお前の罪を数えろ！」

仮面ライダープロト編

新たに訪れた世界、そこには化け物と化した人間に怯える亜人の世界だった……。

「ここは何の世界だ？」

「亜人だろうが人間だろうが関係ねえ！」

「最古にして最強の仮面ライダーと名乗っておくさ！」

三人の貴大が交わる時、物語は ∞ （インフィニティ）へ……。

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー
VEL大戦 ∞ （インフィニティ） NO

∞ （インフィニティ）の先に待つものとは……。

2011年夏公開予定（笑）

どーも天です！

息抜きに作った嘘予告いかがでしょうか？

今の所全く書く気はありませんが要望が多かったり小説を書き続けて調子に乗ったら書くかも知れません。それでは！

貴大の設定・・・プロフィール風

小日向貴大

属性：闇

変身していない状態でのパラメーター

筋力：B（EX）

耐久：S（EX）

敏捷：A（EX）

魔力：A（EX）

幸福：C

（○）内は能力全開放時

スキル：ランク

守護者：EX

世界を滅びから救うものに与えられる称号。必要な条件を全て無視できる。（例外はあり）

熟練：EX

無限と言う時間を闘い続けた者が得るスキル。先読みと相手の行動分析能力が格段に上がる。

闇の力：？

守護者に与えられる能力の一つで、普通は火、水、風、土、無、光の六つ。貴大が異端と呼ばれる由縁の一つ。

世界の知識：EX

数々の世界を渡り歩き得たスキル。今までに得た膨大な知識を使い戦いを有利に運ぶことができる。

アイテム

プロトドライバー

貴大がプロトの変身や他の仮面ライダーやキャラクターに変身、召喚または能力を使用するときに使用する。

プロトカード

貴大が所有するプロトドライバーと対になるアイテム。正式なプロトカードの他に一度しか使えない使い捨てタイプもある。

警棒

貴大がクウガ タイタンフォーム 用に使う武器。闇の力で強化し闘うこともできる。

エアガン

貴大がクウガ ペガサスフォーム 用に使う武器。闇の力で強化すればダイヤモンドでも砕ける。

闇の力の技一覧

『闇二眠レ』

闇の力を使い眠らせる技

『闇二従工』

相手を操る技。

『我、全テ闇ニ歸ス』

闇を全体に張り巡らし敵を飲み込み消し去る技。

因みに属性はプロトフォームは無、フェニックスフォームは火です。

第1話 『新たな世界』（前書き）

新たな世界なので話数をリセットしました。あとキャラ崩壊があるかも……。

現在貴大の持っているカードの枚数は14枚。

第1話 『新たな世界』

この世界に来て俺が最初に眼にしたのは橋だ、その次に左右を向くと陸がある、そして下には河があった、どういうことか？ ……それは落ちるという事だ！。

「ぬおおおおおおおー……………！！」

俺は落ちながら思う。カミコ、絶対絞める！ そして俺は河に落ちて、そこから泳いで陸地に上がると懷に何故か濡れていないメモがありそれを読んでみると。

『これは世界を狂わせた罰です、甘んじて受けなさい！！』

成る程……それならこれ位で済んだことを感謝しないといけない……のか？ そしてメモには続きがあり。

『PS・カードケースにサブカードを追加しておきました有効に使ってください』

サブカードとはサブプロトカードの事で用途は一回きりの使い捨てで更に重要な場面のみに決められたカードのみ使用可能な使いどころが難しいカードなのだ。

なんて何処の誰だかわからない奴に心の中で説明しているとメイドの姿をした2人組みが現れその片方に俺は担がれ民衆の視線に晒されながら俺は町外れの森にある大きな城に辿り着いた。

その城の持ち主はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言

うらしく俺の今回の役割はその執事だ（服は初っ端から河に落ちたせいで使い物にならないため私服）。

そして夜になり俺は情報収集を兼ねた町の散策をするために何故かおいてあつた俺の愛用している白銀のバイク…… マシンプロトに跨り冬木市と言う町のある場所に辿り着く。

「ここは……」

そこはとある公園…… 思い出されるのはサーヴァントと呼ばれる古代の英雄が同士がぶつかり合う聖杯戦争。そして地獄の業火でもがく一人の少年…… ってこれは10年以上も前だしそれにこの世界の事とも限らない。なんて感傷に浸っていたら。

「きやあああああ——————！！！」

悲鳴が聞こえそこに向かうとファンガイアと言う吸血鬼を模して外観がステンドグラスのような怪人が8体ほど人を襲っていたので俺は『あ、この世界に来た事ある』とか思いながらマシンプロトでファンガイアを轢く。

「はぁ…… 本来は関わる義理は無いんだが見ちまったモンはしょうがないか……」

俺は呟きながらマシンプロトから降りそれと同時にプロトドライバーとアクセルとエンジンブレードのカードを取り出し。

「変身！」

カードをドライバーに挿入すると

『KAMEN RIDE ACCEL』

『WEAPON RIDE ENGINEBLADE』

腰にアクセルのベルトと俺の隣にエンジンブレードが現れ。

『Accel』

ガイアウイスパーが鳴り俺は仮面ライダーアクセルに変身する。

「さあ振り切るぜ……ってな！」

俺は一体目に回し蹴りでぶっ飛ばし。

「おりゃ！」

二体目は右手で裏拳を叩き込み。

「せいっ！」

三体目と四体目には両腕で同時にリアットを喰らわし。

「はぁ！」

五体目をボディーブローで沈め。

「これで……どうだ！」

残りの3体はエンジンブレードで斬り裂く。

「そろそろ決めるとするか！」

俺がエンジンブレードのトリガー引くと。

『Engine Maximum Drive』

俺はエースダイナミックでファンガイアを8体同時に斬り裂くとファンガイアはガラスが割れるように消滅した。

俺は変身を解除した後マシンプロトに跨り俺は走り出す、行き先は分からないが何か俺を導いている。そう感じながら俺はひたすらバイクを走らせる。記憶に新しい橋（落ちる寸前に見た橋）を通り住宅街を進んでいくとそこに居たのは冬を連想させる少女 イリヤスフィール とサーヴァントと思われる巨人、そしてそれに対峙する赤い少女と10年前に遭遇した金色の髪の騎士王の少女と同じく10年前に地獄の業火で出会った赤毛の少年だ。俺は赤い少女がイリヤスフィールに黒い魔力弾を放ったのを確認するとイリヤスフィールの前に飛び出し魔力弾をバイクの後方でで弾く。

「……ったく、夜中に散歩とかとんだ不良娘だなイリヤスフィール」

俺はバイクを降りヘルメットをはずしながら言う。

「……関係ないでしょ」

と生意気な事を言ったので。

「そんな事いう奴にはこうだ！」

俺はイリヤスフィールの帽子を取り頭に手を置いてぐりぐりと回す。

「ちょっと、淑女レディに向かってなにをするのよ!」

「淑女レディはこんな時間に出歩かん!」

俺とイリヤスフィールが会話をしていると突然。

「う……ああ……」

赤毛の少年がうめき声を上げたした。

士郎SIDE・・・

イリヤと名乗った少女の前にバイクに乗った男が現れる。

「……たく、夜中に出歩くとかとんだ不良娘だなイリヤスフィール」

そして男がヘルメットを外した瞬間俺の視界は真っ赤に染まる。脳裏によぎるのは10年前の大火災……生きようともがく俺を見下ろし去っていくあの男……。

「……」

「——!」

彼等が何か喋っているが全く聞こえない。

「――、――！」

「――！」

俺は……俺は……。

「う……ああ……」

おれは……オレハ！

「うああああああああああ！！キバット！」

俺が呼ぶとキバットがやってくる。

「お、落ち着け士郎！あいつは！」

「オレハ！」

「ちっ、しょうがねー！ガブッ！！」

魔術回路に魔皇力が流れ込みキバットの止まり木となる赤いベルトが出現する。

「ヘン……シン！」

俺はキバットを腰のベルトに装着すると蝙蝠を模した戦士 キバへと姿を変える。

「ウアアアアアアア！！！」

俺はあの男に向かって駆け出した。

貴大SIDE・・・

「ヘン……シン！」

少年がキバットを腰のベルトに装着すると少年は蝙蝠を模した仮面ライダーキバ……いや、仮面ライダーキバver・Fate（通称、Fキバ）に変身した。

「ウアアアアアアア！！！」

Fキバは俺に向かって殴りかかってくる。

「よつと！」

俺はそれをかわし回し蹴りを入れ吹き飛ばす。

「グウ……」

まるで獣のような唸り声を上げながらFキバは構える。

「ちっ……しゃあないな」

俺はプロトドライバーを腰に装着し

「変身！」

両手をドライバーにスライドさせ。

『mode proto』

俺は銀色のオーロラを通過し仮面ライダープロト プロトフォーム
に変身する。

「さあ行くぜ！」

こうして仮面ライダー同士の戦いが始まりを告げた。

第1話 『新たな世界』（後書き）

どーも天です！今回の世界はFate/stay nightと仮面ライダーキバの世界が融合した『Fate/KIWA』の世界です。ライダーの説明は次回します。

霞 空斗様、門矢光様、ベルト様、斬空様、感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは！

第2話 『プロトVSFキバ』（前書き）

第1話で本当は8体いたところを7体分しか攻撃していなかったため修正しました。

前回のあらすじ・・・新たな世界に降り立った貴大、しかしその初日いきなりファンガイアと遭遇し襲い掛かってくる。そしてこの世界の仮面ライダーであるはずのFキバまでもが……。

現在貴大の持っているカードは14枚。

第2話 『プロトVSFキバ』

俺は今Fキバと対峙している、その理由は……。

「グアアアウー!!」

まあ暴走して襲い掛かってくるからなんだが……。

「よつと!!」

俺はFキバの攻撃を回避しながらどうしたものかと考える。

「ガアアアアアア!!」

Fキバの攻撃を更にかわし続ける、……叩き潰すか。

「おらっ!!」

俺はFキバにボディブローを喰らわす。

「グッ……」

Fキバはよろける。

「そらっ!!」

俺はそれを見逃さず更にFキバの顔面に右ストレートを叩き込む。

「ガッ!!」

Fキバは攻撃をまともくらい仰け反る。

「これで！」

俺は仰け反ったFキバにドロップキックを叩き込み吹き飛ばす。

「……終わったか？」

俺がFキバを吹き飛ばしたほうを見ると魔皇力を纏った矢が飛んでくる。

「ちっ！」

俺は驚きながらも矢を弾き飛ばし矢が飛んできたほうを見るとそこには洋弓を構えたFキバが立っていた。

「……腐っても仮面ライダーって事か」

俺はそう呟きながら正確に飛んでくる矢を弾き飛ばしながらFキバに接近していき。

「おらっ！」

俺は顔面に右ストレートを叩き込むがそれはFキバの黒と白の夫婦剣…… 干将・莫耶 に止められる。

「お前！」

「咄嗟にやってみただけど案外うまく行くもんだな」

そう言つてFキバは俺の拳を弾きそのまま干将・莫耶を振り下ろす。

「ガッ！」

俺は斬られ装甲から火花が散る。

「礼を言つぜ、お前がボコボコにしてくれたおかげで頭が冷えたかな」

そういうFキバに俺は。

「……ようやく正氣に戻つたらしいな、衛宮士郎」

俺の言葉に衛宮士郎は。

「どうして俺の名前を？」

「簡単な推理さ、お前の相棒であるキバットはお前を士郎と呼んでいた、そしてFキバの鎧は元々衛宮切嗣の所有物だ、大方切嗣がお前を引き取つたつてところだろう？」

「アンタは一体？」

「俺か？俺は通りすがりの執事とでも名乗っておくさ、っとそろそろお互い放置していた奴らどうにかしないとな」

と俺はドライバーに手をかけ変身を解除しようとしたが止めた。

「どうしたんだ？」

衛宮の疑問に俺は。

「どうやらお客さんのようだ」

そう言つて俺が振り返るとそこには仮面ライダー電王 ソードフォーム と仮面ライダーカリスが立っていた。

「それじゃあお前は黒いほうを頼むわ!」

そう言つて俺は電王に向つて行く。

「あ、オイ!」

若干戸惑いながらも衛宮はカリスのほうに向かつていった。

「俺、さ……」

「言わせねーよ!」

決め台詞を言いかけた電王に向かって飛び蹴りを放つ。

「デメエ、最後まで言わせろ!」

「却下に決まつてんだろ!」

俺は電王を蹴り飛ばしメダジャリバーのカードをドライバーに挿入する。

『WEAPON RIDE MEDAZZARIBAR』

俺の右手にメダジャリバーが現れ。

「はぁ！」

それで電王を斬り裂く。

「ぐおっ！……やるじゃねーか！」

デングッシャー ソードモード とメダジャリバーがぶつかり合う。

「そういうお前は全然駄目だ……な！」

俺は電王を蹴り飛ばし仰け反らせたあと電王をメダジャリバーで連続で斬りつけ更に電王のデングッシャーを手から弾いた後腰の左側にあるブレイカーカードを取り出しドライバーに挿入する。

『Proto Breaker』

右手にエネルギーを纏わせメダジャリバーで3回斬りつけメダジャリバーを放り投げパンチを3回叩き込み更に落ちてきたメダジャリバーを掴み斬り裂く。

「ち、ちくしょう……ぐああああああ！！！」

電王は叫びながら爆散し仮面ライダー電王とモモタロスのカードに戻った。

「さて……衛宮の方はどうなったかな？」

俺はカードを回収してから衛宮が気になって様子を見に行くと苦戦していたので。

「はぁ！」

俺は衛宮を援護するためにカリスに殴りかかる。

「らっ！」

俺がカリスと交戦している間に衛宮はウェイクアップフェッスルを取り出しキバットに吹かせる。

「ウェイクアーーップ！」

衛宮が右足を上げるとキバットが右足のヘルズゲートを開放、そのまま飛び上がり。

「おっと！」

俺はカリスを殴ったあと転がりながら退避するとそのまま衛宮がそのまま急降下し、蹴りを叩き込む……　ダークネスムーンブレイクが直撃しカリスは爆散しプロトカードに戻った。俺と衛宮は変身を解除すると突然衛宮が倒れ。

「おっと、……　　まったく無理のしすぎだ」

俺は衛宮の身体を支えながら愚痴る。

「マスター！」

「衛宮君！」

衛宮と一緒にいた騎士王と赤い少女が駆け寄ってくる。

「安心しろ、気を失っているだけだ、それにしても久しぶりだなセイバー……であつてるか？」

「ええ、貴方にしてみれば10年ぶりですか、タカヒロ」

「そうだな、っとそれよりウチのじゃじゃ馬娘はどうした？」

俺の疑問にセイバーは。

「バーサーカーのマスターですか？ 彼女なら興が醒めたと言って帰っていききましたよ」

「うえっ……マジかよ、悪いセイバーこいつ頼むわ」

そう言つて俺は衛宮を引き渡す。

「え、ちよつと！」

驚くセイバーをスルーして。

「悪い！落ち着いてからまた来るわ！」

俺はそう言い残しイリヤスフィールを追った。

第2話 『プロトVSFキバ』（後書き）

どーも天です！今回は仮面ライダーキバver・Fateの説明を。

仮面ライダーキバver・Fate……この小説に登場するオリジナルライダー、衛宮士郎がFキバの鎧を纏う事で変身する。容姿とスペックは仮面ライダーキバと同様。

魔術師がファンガイアに対抗するために作った鎧で魔術回路がある人間なら誰でも変身できるため従来のキバの様にファンガイアである必要はない。

従来のキバとは違いガルル、バツシャー、ドツガと契約していないためフォームチェンジは不可能である。

必殺技は通常のキバと同様の ダークネスムーンブレイク。

なお形状は様々だがFキバの鎧はこの世界に複数存在する。

門矢光様、斬空様、ベルト様、ご感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは！

第3話 『説明と再開』 (前書き)

報告が遅くなりましたがベルト様の作品『仮面ライダーエターナル』風都を守る永遠の戦士』とコラボしましてその中で仮面ライダーエターナルとエターナルエッジのカードを頂きました。

現在貴大の持っているカードは19枚

第3話 『説明と再開』

次の日の昼過ぎ俺は衛宮邸を訪ねた。

「ようセイバー、衛宮はおきてるか？」

俺の問いにセイバーは。

「ええ、シロウなら今さっき眼を覚めました」

と答えたので。

「それじゃあ、入らせてもらっぜ」

「ええ、シロウは居間で待っていますので」

「ん、了解」

俺とセイバーは今に向かった。

・・・

居間につくと衛宮が座っていたので。

「よう衛宮、調子はどうだ？」

俺が訊くと。

「ああ、悪くはないな」

衛宮の答えを聞いて俺は座りながら。

「そうかい、なら良かった……んで訊きたい事があるなら今の内に訊いとけよ」

「なら遠慮無く訊くがアンタは何者だ？」

衛宮の疑問に。

「通りすがりの執事……と名乗りたい所だが守護者だ」

俺が答えると。

「守護者？」

と再び衛宮が訊いてきたので。

「守護者とは人の理ことわりから外れ全世界の調和を保つ奴等の事だ」

「じゃあアンタは……」

「人……つーか生物であるかどうかも怪しいな、守護者は魂を守護者が持つそれぞれの属性の力で肉体を形成し活動する、といっても形成した肉体は人と変わらないがな」

「属性の力？」

「属性の力とは魔力の上位に存在するモノだと思っていればいい、種類は火、水、土、風、無、光の六つ、あとはイレギュラーとして

幾つか存在するがまあそこまでは話さなくていいだろ？」

「魔力の上位……」

「つて、訊きたい事はそんなことじゃないだろ？」

「ああそうだな、それで何で10年前アンタはあそこに居たんだ？それと何で親父を知ってたんだ？」

「10年前、俺は『この世全ての悪』^{アンリミトゥ}つてのをとある組織が手に入るのを阻止するためにこの世界に来た、そして俺が何で衛宮切嗣を知ってたかって言うとなんか10年前に前回のセイバーのマスターである衛宮切嗣の助手がその時の役割だったからだ」

「ある組織？」

「ああ、その組織の名は『大ショッカー』、仮面ライダーと呼ばれる者たちと敵対する怪人を集めた組織だ」

「なあ、そもそも気になってたんだけど……仮面ライダーってなんなんだ？」

「仮面ライダーってのは装甲を見に纏い世界の平和を守る戦士の総称だ」

「……要するに正義の味方って事でいいのか？」

「ま、大体そんなもんだな」

「それじゃあ俺も仮面ライダーなのか？」

「ああ、その通りだ」

「仮面ライダーの定義は分かった、それでアンタはまた『大ショツカー』が『この世全ての悪』^{アンリマユ}を手に入れるのを阻止するために来たのか？」

衛宮の疑問に俺は。

「いや、今回の目的はこれだ」

そう言つて俺はプロトカードをテーブルの上に広げる。

「これは？」

「これはプロトカードって言つて俺の力の源なんだが馬鹿な上司がばら撒いちまつてなそれを回収するためにいろんな世界を回っているんだよ」

「た、大変なんだな……」

「そりゃあもう、世界から追い出されたり、怪人に間違われたり…

…」

俺が肩を落としながら言つと。

「それでは、今回は『この世全ての悪』^{アンリマユ}と言つのは関係無いのですか？」

とセイバーが訊いてきたので。

「そうとは言い切れんのが悲しい所だ……」

俺は額に右手を当て嘆くように言うと衛宮が。

「それはどういふ事だよ？」

衛宮の問いに俺は。

「馬鹿な上司が俺が行く世界には色々問題を抱えてるって言いやがったんだよ、だから奴らが『この世全ての悪』^{アンリマユ}を狙ってくるのは可能性は十分ある」

俺がそう言つと衛宮が。

「奴等つて『大シヨツカー』ってやつらの事か？」

衛宮の問いに俺は。

「いや、『大シヨツカー』は俺と全仮面ライダーが集結して倒したんだが、その後の大シヨツカーの残党……『スーパーシヨツカー』つてのがあつたんだがそれも俺とデイクイド、あと12人のライダーによつて壊滅追い込んだんだがその残党が今度はなりふり構わず様々な世界の悪の組織を取り込みはじめてな、今じゃ『ウルトラシヨツカー』なんて名乗つて全世界を支配しようと暗躍してるんだよ」

俺の説明に衛宮は考えるようになしぐさをした後。

「なあ、その『この世全ての悪』^{アンリマユ}つてのを守るのを俺たちにも手伝わせてくれないか？」

「シロウ?」

衛宮の言葉にセイバーは驚いているようだ。

「『この世全ての悪』^{アンリム}ってのは何だか良く分からないけど悪の組織
つてのが狙うぐらいいやばい物なんだろう?」

衛宮の問いに俺は。

「ああ、10年前の大火災……あれがいい例だな」

俺の言葉に衛宮は顔を少し歪めたが言葉を続ける。

「なら尚更だあんな事を絶対起こしちゃいけない」

「……」

衛宮の言葉に黙るセイバー。

「まああいつらも直ぐ動くわけじゃないからな二人で相談して決めるや」

俺はそう言いながら立ち上がり。

「もう帰るのか?」

「ああ、これ以上仕事をサボるわけにもいかないしな、連絡先は置いておくからなんかあったら連絡しろ」

そう言つて俺が立ち去る間際に衛宮が。

「色々ありがとな！」

と聞こえてきたが俺は振り返らずに衛宮邸を出た。

・・・

衛宮邸からの帰り道。俺は思いがけない人物を眼にする。

（舞衣だと？　つてこの世界にいるわけないか……）

と思い顔を上げると。

「ふべらっ！」

思いつきり顔面に鉄拳が飛んで来ました、つーからメートルぐらい飛んだぞ俺！

「やっと見つけた！」

「ま、舞衣！　お前なんでこんな所に！」

俺の疑問に舞衣は。

「そんなの……追いかけて来たからに決まってるじゃない」

「ど、どうやって？」

「貴大の上司さんが道を作ってくれたのよ」貴大君はバカだから誰

かが見張ってないと直ぐ無茶をするからよろしくね』ってね」

カミコがねえ……。

「まあ来ちまったものはしょうがない、これからよろしくな舞衣！」

「うん、こちらこそよろしくね！」

衛宮との出会い、そしてセイバーと舞衣との再開がこの世界の物語を加速させ始めた。

第3話 『説明と再開』 (後書き)

どーも天です！いい忘れていましたがマシンプロトの形状は白銀のマシンディケイダーです！

次回はあの人が登場します！

？「プロトドライバーは僕が頂く！」

斬空様、ベルト様、感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第4話 『通りすがりのカイトウ』（前書き）

今回からプロトの使用するカードを『プロトカード』、ディケイド及びディエンドの使用するカードを『ライダーカード』と書きます。

現在貴大の持っているカードは19枚。

第4話 『通りすがりのカイトウ』

俺は今イリヤ（本人の希望でそう呼んでいる）と商店街を歩いている。それまでの経緯は俺が部屋でゴロゴロしているとイリヤが入ってきて。

「町に出るから付いて来なさい」

と言ってきたので。

「えー面倒」

と言ったら。

「たまには働きなさい、ボンクラ執事」

と言いながら部屋を無理矢理引きずりだされ今に至るのだが……。

「それでなんでも当然のように俺の横を歩いてるんだ海東？」

そう今俺の隣には海東大樹が歩いている。

「僕の道は僕が決める！」

さも当然のように言い切る海東。

「……まあいい、それで今回はなにを狙ってるんだ？」

因みにコイツは自称トレジャーハンターと言う名の泥棒だ。

「今回のお宝はFキバの鎧さ」

「Fキバの鎧なんてこの世界には幾らでもあるだろうが」

「あんなお粗末なものに興味は無い、僕が狙うのは仮面ライダーと呼べるレベルのものさ」

ふむ確かに……それなら衛宮のFキバぐらいしか思いつかな。

「そついう事だからくれぐれも邪魔しないでくれたまえ」

海東の言葉に俺は。

「うん、無理」

即答する。

「どうしてかな？」

「悪いな、Fキバの所有者は俺の知り合いの息子でな放っておく事はできんわけだ」

「そつか……なら」

海東はディエンドライバーとディエンドのライダーカードを取り出す。

「まあ……こついう事になるのは分かってたけどな」

俺は左腕にプロトドライバーを出現させる。

「成る程……それで人気　ひとけ　の無い所へ歩いてたわけかい」

「ま、そういう事だ」

そう俺は海東と遭遇した瞬間から人気の無い所まで歩いていた。

「それじゃあ、ついでに君のプロトドライバーも頂くとしよう」

「やれるもんならやってみろ、っとイリヤ少し離れてろ」

「分かったわ」

そう言ったイリヤが離れるのを確認すると俺は左腕にあったプロトドライバーを腰に装着し海東がディエンドドライバーにディエンドのライダーカードを挿入銃身をスライドさせる。

『K A M E N R I D E』

「「変身」」

俺がプロトドライバーに両手をスライドさせ海東がディエンドドライバーの引き金を引くと。

『mode Proto』

『DI・END』

二つの電子音が鳴り俺は仮面ライダープロト　プロトフォームに

海東は仮面ライダーディエンドに変身した。

「ふっ！」

ディエンドがディエンドライバーから複数の銃弾を放つ。

「はぁ！せいっ！」

俺は銃弾を蹴りで弾きまたは避け更に拳で弾きながらディエンドに近づき蹴りを入れるが。

「甘いよー！」

ディエンドはひらりとかわしお返しと言わんばかりに蹴りを放ってくる。

「お前もな！」

そう言いながら俺はディエンドの蹴りを左腕で受け止めカウンター
のボディーブローを喰らわす。

「ぐっ……これならどうだい？」

ディエンドは一枚のライダーカードをディエンドライバーに挿入し銃身をスライドさせ引き金を引く。

『ATTACK RIDE BLAST』

「はぁ！」

ディエンドのディエンドライバーの銃身が分裂し無数の誘導弾を発射する ディエンドブラスト を放ってくる。

「ちっ、面倒な！」

俺は誘導弾を弾くが弾ききれず何発か直撃する。

「がっ！ ……くそ！」

俺は転がりながらディエンドを睨む。

「流石の君もプロトカードが無いと……うわっ！」

ディエンドが何か言おうとするが突進してきたマシンプロトに遮られる。

「プロトカードが無いと何だって？」

実は転がった瞬間に遠隔操作でマシンプロトを呼んでおいたのだ。

「バイクを使うとは……やってくれるじゃないか」

「お前こそ痛いところついてきやがって」

そう言いながらお互いに何枚かカードを取り出しそれぞれのドライバーに挿入する。

『KAMEN RIDE DELTA GARREN SASWORD』

『SUMMON RIDE KAIRA CARIS GATAC
K』

ディエンドの周りに仮面ライダーデルタ、仮面ライダーギレン、
仮面ライダーサソードが現れ、俺の周りに仮面ライダーカイザ、仮
面ライダーカリス、仮面ライダーガタックが現れる。

「さてと、それじゃあ……」

とディエンドがいい。

「第2ラウンド開始といきますか!」

と俺が続ける。その言葉を合図にライダーたちが一斉に動き出し、
デルタ対カイザ、ギレン対カリス、サソード対ガタック、そして
ディエンド対俺の構図が出来上がる。

「おらっ!」

俺はディエンドに飛び蹴りを放つがあっさり避けられる。

「そんな攻撃……当たっているのかい?」

そう言いながらディエンドはディエンドライバーで発砲してくる。

「思ってたねーよ!」

俺はかわしながら1枚のプロトカードを取り出しプロトドライバー
に挿入する。

『ABILITY RIDE DEN・O』

電子音が鳴り腰のブレイカーケースとカードケースが少しずれてそこにデンガッシャーが出現する。

「そらよ!」

俺はデンガッシャーを ガンモード に連結させディエンドに向けて銃弾を発射、するとそれに合わせてディエンドもディエンドライバーで撃つてき来て互いの弾丸を相殺する。

「そろそろ終わりにしようか」

そう言いながらディエンドは2枚のライダーカードを取り出す。

「奇遇だな、俺もそう思ってた所だ」

俺も腰の左側にあるブレイカーケースからオールアタックカードとフルチャージカード取り出しプロトドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE CROSS ATTACK』

『FINAL ATTACK RIDE DI・DI・DI・DI・
END』

『All Attack』

『Full Charge』

『Rider Slash』

『 Rider Kick 』

『 Exceed Charge 』

『 Burning Divide 』

『 Spinning Dance 』

ディエンドの デイメンションシュート が、俺の ワイルドショット が、サソードのライダースラッシュが、ガタツクのライダーキックが、デルタの ルシファーズハンマー が、カイザの ゴルドスマッシュ が、ギャレンの バーニングデバイド が、カリスの スピニングダンス がぶつかり合い大爆発を起こす。

「ぐわっ！」

「ぬおっ！」

そして残ったのは消して軽くないダメージを負った俺とディエンドだけだった。

「まさかここまでやるとは思ってなかったよ」

「それはお互い様だろうが」

俺とディエンドは軽口を叩き合っていたが突如乱入した5体のファンガイアと仮面ライダーギルスによって中断する。

「オイオイ、まさか……」

「やっぱり、狙いはあそこの聖杯ちゃんかな？」

ディエンドはイリヤの方を向いて言う。

「だろうな……」

「まあいいさ、貴大これを受け取りたまえ！」

そう言つてディエンドが投げてきたのはディケイドのプロトカードだった。

「……どつという風の吹き回しだ？」

「勘違いしないでくれたまえ、プロトドライバーは僕が頂くんだけ、それまでに他の奴に奪取、あるいは破壊されるのは許せないだけさ」

「コイツを渡した事後悔すんなよ？」

「後悔なんてしないさ、それじゃボクはこれで失礼するよ」

そう言つてディエンドはライダーカードディエンドドライバーにを挿入した。

『ATTACK RIDE INVISIBLE』

電子音が鳴りディエンドは姿を消した。

「……やっぱりこうなるのかよ」

そう言いながら俺はディケイドのプロトカードをプロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE DECADE』

電子音が鳴り俺の右手にライドブッカー ガンモード が出現する。

「手早く決めるぜ！」

俺はライドブッカーからライダーカードを取り出し挿入する。

『ATTACK RIDE BLAST』

ライドブッカーの銃身が分身して無数の銃弾を放つ ディケイドブラスト が発動する。

「どんどん行くぜ！」

俺はライドブッカーを ソードモード にし刀身を撫でながら近づきファンガイアをまとめて斬り裂き更にライダーカードをプロトドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE SLASH』

ライドブッカーで斬ったあとに刀身の残像が残る ディケイドスラッシュ を5体のファンガイアに向かって放つとファンガイアは爆散消滅する。

「残りはお前だけだぜ！」

俺はライドブッカードでギルスを斬って斬って斬りまくり。

「これで終わりだ！」

俺はライダーカードをプロトドライバーに挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
CADE』

電子音が鳴り俺とギルス間に無数のホログラムカードが現れ俺が飛び上がるとその動きに合わせてホログラムカードも動き。

「はぁ！」

俺はホログラムカードを通過し飛び蹴りを喰らわす デイメンションキック を放つとギルスに直撃し爆散プロトカードに戻った。俺はそれを変身を解除しながら回収しイリヤの所へ向かった。

第4話 『通りすがりのカイトウ』（後書き）

どーも天です！海東やイリヤの台詞がおかしかったかも……。

ディエンドって単独戦闘の資料が少ない気がする……。

そしてマシンプロトは脳波で遠隔操作できるという追加設定。

斬空様、ベルト様、闇色の月様、門矢光様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第5話 『断罪する白き永遠』（前書き）

タイトルはかなり適当です。

現在貴大の持っているカードは21枚

第5話 『断罪する白き永遠』

海東とファンガイアとの戦闘のあと舞衣から今通っている学校の様子がおかしいと連絡がありサイドバツシャー（マシンプロトにWEAPON RIDEを使用）でイリヤを送った後俺は舞衣の通っている穂群原学園に向かうと舞衣が校門前で待っていた。

「舞衣！」

俺が声をかけると。

「貴大」

舞衣がこっちに向かってくる。

「しかし、その制服、本当にここの生徒なんだな」

「どう、似合っ？」

「うんバツチリ似合ってる……ってんな事やってる場合じゃねー！」

校舎の二階、あれは境界か……恐らく防音か何かのだろう、すごく嫌な予感がしてきた……。

「舞衣、ちょっと様子見てくるからここで待っていてくれないか？」

と俺が言っつと。

「うん、わかった……気をつけてね」

「ああ！」

俺は校舎に全速力で向かった。

・
・
・

俺が校舎に入り（不法侵入は気にするな！）二階に上がると地面に這っている衛宮を見下ろすように一昨日の赤い少女（恐らく魔術師）が立っていた。俺は衛宮を助けるために。

「俺、参上！」

大声で飛び出す、すると予測通り赤い少女がこっちを向いたので闇の力で強化したエアーガンをギリギリかわせる様に撃ちながら全力で距離を詰め、これもかわせるように飛び蹴りを放ち衛宮と赤い少女の間に割り込む。

「よう、また会ったな！」

「アンタは一昨日の！」

俺と赤い少女はにらみ合ったまま言葉を交わすと。

「小日向、どうしてここに！」

衛宮が驚きながら問いかけてくる。

「ああ、それは俺の連れからこの学園の様子がおかしいって聞いてな調べに来たらこうなった」

俺と赤い少女は視線を外さずそのままにらみ合うが。

「きゃーーーーー！！！」

それは下の階から聞こえた悲鳴で中断された。

「くそ！」

俺はすぐさま視線を外し悲鳴が聞こえた場所へ駆け出すとこの学園の女子生徒と思われる少女が精気を抜かれた状態で倒れていた。

「次から次へと厄介な事ばかり起きやがって……」

俺は愚痴りながら女子生徒から視線を上げ、開いている扉を睨んでいると。

「小日向！」

俺の後を追って来た衛宮と赤い少女が。

「貴大！」

悲鳴を聞きつけた舞衣がこちらに向かっている。

「どうなってんのよこれ？」

赤い少女が俺に問いかけてくる。

「さあな、俺が来たときには既にこうなって……」

『こうなっていた』と言おうとした瞬間、殺気を感じ視線を上げると扉の向こうから鎖のついた杭のような短剣が舞衣目掛けて飛んできた。

「っ！」

俺は素早くポケットから警棒を取り出すとすぐさま闇の力で強化し短剣を弾く。

「……お前等その子を頼んだぞ」

俺は倒れている女子生徒を三人に託し短剣を投げた犯人の下に走り出した。

・・・

俺は殺気が放たれた方向に進んでいくと雑木林になっていてそこに紫の髪の両目に眼帯をし黒の短いワンピースみたいな（確かボディコンだったか）を着た2本の杭のような短剣を持った女のサーヴァントがいた。

「一人で来るとは……その勇氣に免じて優しく殺してあげましょう」

サーヴァントの言葉に俺は。

「悪いが死ぬ気は無いんでな、叩き潰させて貰う！」

俺は一気に接近し警棒で殴りかかるが。

「あたりませんよ」

サーヴァントはひらりとかわし姿を消した。

「っ！ どこだ！」

辺りを見回すが見当たらない、そこで俺は眼で探すのを諦め目を閉じ気配をたどる。

「……っ！」

俺は眼を開き警棒を振りぬくとサーヴァントの短剣が弾かれる。

「……まさかあれを防ぐとは驚きましたよ」

「はっ！ アンタごときに負けるほど俺は弱くないんでな！」

（とは言つものの昼間の海東とファンガイアの連戦でかなり疲労しているあまり長引かせるのは得策ではないな）

と思った矢先予想以上にダメージがあつたのか体がフラツと傾きサーヴァントがそれを見逃す筈も無く俺は鎖で拘束され振回された後

「がっはっ……」

木に身体を打ち付けられ拘束は解かれる。

「大口を叩いた割にはこの程度ですか？」

サーヴァントの言葉に俺は。

「冗談、本番はこれからだぜ！」

俺はプロトドライバーを出現させカードを2枚挿入する。

「変身！」

『K A M E N R I D E E T E R N A L 』

『W E A P O N R I D E E T E R N A L E D G E 』

俺の腰にエターナルのベルトが現れ。

『E t e r n a l 』

ベルトからガイアウィスパーが鳴り、俺は仮面ライダーエターナルに変身する。

「さあ、お前に罰を与えよう……ってな」

俺は別の世界で出会った正義のエターナルの台詞を右手に出現したエターナルエッジを回しながら呟くとサーヴァントに向かって走る。

「はあ！」

エターナルエッジで縦に一撃入れると今度は避けられなかったのかサーヴァントは2本の短剣で防ぐ。

「せいっ！」

俺は隙を与えず回し蹴りを喰らわす。

「ぐっ……」

サーヴァントが苦しみながら少し後退する。

「なかなかやりますね……」

「どうだ、まだやるか？」

俺は挑発するように言つと。

「……どうやら状況はこちらに不利のようですのでこれくらいしておきます」

そういったサーヴァントはものすごい速さで去っていく。

「……」

俺はサーヴァントの気配がしなくなったのを確認すると変身を解除したが連戦による疲労だろうか、俺はそのまま意識を失った。

第5話 『断罪する白き永遠』（後書き）

どーも天です！

最近貴大がチートだと言っておきながらかなり苦戦しているような気がする……。

ベルト様、感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第6話 『魔女と弓兵と新コンボ』（前書き）

現在貴大の持っているカードは21枚。

第6話 『魔女と弓兵と新コンボ』

目覚めて最初に眼に映ったのは見知らぬ天井……と怒っている様な心配しているような表情をした舞衣だった。

「舞衣……ここはどこだ？」

「衛宮先輩の家よ」

舞衣の話によると俺が倒れたあと直ぐに舞衣や衛宮が駆けつけてきて俺を衛宮邸まで運んでくれたらしい、そして時計を見ると11時30分……どうやら俺は半日以上眠ってたらしい。

「本当に……心配したんだから」

今にも泣きそうな舞衣。

「す、すまん」

それから舞衣に俺が倒れた後の事……衛宮と赤い魔術師……遠坂凜と言っらしい、とが協力関係を結び学園にいるマスターをどうにかすると言っ事を聞いた。

そして俺の体調の事もあり衛宮邸に一晩泊まる事になったのだが……。

突然、衛宮が家から居なくなっただので魔力をたどって追いついてたのは柳洞寺と言っ寺へと続く山道の階段、そしてそこには一人の長い刀を持った侍が立っていた。

「お前は……?」

俺の問いに。

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎……」

侍……いやアサシンが答える。

「悪いが俺はその奥に用があるんだ、退いて貰おうか」

「生憎と私はここの門番を任されていてな、通りたければ押し通る事だ」

「ああ、そうかよ!」

俺はプロトドライバーとオーズとメダジャリバーのプロトカードを取り出し挿入する。

「変身!」

『K A M E N R I D E O O O』

『W E A P O N R I D E M E D A Z Y A R I B A R』

『タカ・トラ・バツタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

歌が鳴り、俺は仮面ライダーオーズ タトバコンボ に変身しメダ

ジャリバーが出現する。

「……参る！」

「それじゃあ、行くぜ！」

俺はアサシンとの距離を詰めメダジャリバーを振るうがアサシンは手に持った長刀で受け流す。

それを一回、二回、三回繰り返していき更に十回、二十回、三十回と続けていると突如アサシンの構えが変わる。

「秘剣……」

俺は直感的にヤバイと思いバツレグの力を最大まで引き出し後退する。

「……燕返し！」

アサシンは高速で……いや、もはや同時と言っても過言ではない速さで二連撃を放つ。

「ぬおっ！」

何とか回避したもののバランスを崩し転がり落ちる。

「不完全とはいえ我が秘剣をかわすとは……」

（確か燕返しって獲物を囲うように3太刀同時攻撃だったか？それが2太刀だったって事は恐らく足場が悪かったせいだろう……不完

全で助かったな)

俺は思考をめぐらしながら。

「あつぶねー…… ったく今度はこっちの番だな」

と言いつつ体勢を建て直し、ベルトのコアメダルを抜きオオカミ・コヨーテ・ジャツカル順にベルトにメダルを入れオースキャナーでスキャンする。

『オオカミ・コヨーテ・ジャツカル』

『オーーーーー・コジャ・コジャ・オオコジャー』

歌が流れ俺はオオカミを模した灰色の頭に黄色い複眼の オオカミヘッド、コヨーテを模した灰色の身体に牙の様なトゲが二本ついたシールドを両腕につけた コヨーテアーム、ジャツカルを模した灰色のチーターレッグのような ジャツカルレッグの オオコジャコンボへと変わった。

「さあ……行くぜ」

俺は脚に力を入れた瞬間アサシンの後ろに立っていた。

「くっ……」

アサシンは振り返り迎撃しようとするが俺が感覚を研ぎ澄ますとアサシンの動きがスローペースローカメラのようになり俺はそのままアサシンをトゲつきシールドで殴る。

「ぬ、ぐっ……」

アサシンは後ろに吹っ飛び少し転がる。

「それじゃあ行かせてもらっぜ」

俺はアサシンに背を向け階段を駆け上がった。

・・・

俺が階段を上りきり最初に目にしたのは飛んでいるキャスターと思われる紫のローブを着たサーヴァントが魔力弾をばら撒きそれをアーチャーと思われる白髪で褐色の肌をしたサーヴァントが衛宮を抱えて避けている所だった。

「厄介な事になってるな……」

幸いキャスターは俺の存在に気付いてないようだ、俺はキャスターを落とすためにベルトのコアメダルをタカ・クジャク・コンドルに代えてオースキャナーでスキャンする。

『タカ・クジャク・コンドル』

『タージャードル』

俺は タジャードルコンボ にコンボチェンジしクジャクウイングを展開、魔力弾をかわしながら一気に上昇、そしてベルトのコアメダルをタジャスピナーにセットしオースキャナーでスキャンする。

『タカ・クジャク・コンドル・ギン・ギン・ギン』

『ギガスキャン』

電子音が鳴ると体が不死鳥をかたどった炎に包まれる。

「せいやっー!!」

俺はそのままキャスターに向かって突撃する　マグナムブレイズを放ち撃破する……はずだった。

「I am the bone of my sword・（我が骨子は捻じれ狂う）」

殺気を感じその方向を見ると弓を構えたアーチャーが居た。

カロードボルク
「偽・螺旋剣」

弓から放たれたものは捻じ曲がった剣、それが俺目掛けて飛んでくる。

「くそっ！」

俺はそれを無理矢理回避したがマグナムブレイズはキャスターに直撃せず掠る程度に終わった。

「どう言ってもりだ、アーチャー？」

何とか墜落を逃れ着地した俺はアーチャーに問う。

「なに、狙いが外れたただだ」

人を小ばかにしたような態度で言い放つアーチャー。

「直撃を狙つといてよく言う」

「ほう、その目は節穴ではないと言う事が」

「誰かさんみたいに後ろから撃つ奴が少なくなくてな」

「それは、ご愁傷様と言っておこう」

「そりゃどうも……ほら行くぞ衛宮」

キヤスターの姿も既になくこれ以上アーチャーと会話する気にもなれないので俺は早々に撤収する事にしたのだが。

「もう一度訊こう、どう言うつもりだアーチャー？」

俺は衛宮に向けて振るわれた白い陰剣…… 莫耶 をタジャスピナ
ーで受け止めながら問う。

「貴様には関係ない事だ守護者」

そう言い放つアーチャー。

「……そうか、よ！」

俺は真空刃のついた後ろ回し蹴りを繰り出す。

「ぬっ！」

タカ・トラ・コンドル

「はっ！」

「衛宮士郎を抱え込むといつか後悔する事になるぞ！」

「敵をわざと見逃すような奴を抱え込むよりマシだ」

「I am the bone of my sword. (体は剣で出来ている)」

フルンディング
「赤原獏犬！」

207

「ぐっ……」

フルンディング
赤原獠犬の威力は凄まじくジリジリと後退していく。押し切られる
と思ったその時。

ブロックン・ファンタズム
「壊れた幻想」

フルンディング
アーチャーの言葉と共に赤原獠犬が爆発し俺と衛宮は爆風で境内の
外、山道の階段へと吹き飛ばされ変身が解除される。

「がっ！」

階段を転がり落ちた俺たちが体勢を立て直すとアサシンと戦ってい
るセイバーがいた。

「シロウ、タカヒロ！」

セイバーが俺と衛宮の元に駆け寄ってくるが。

「……バカ、前を見る」

と俺はセイバーに前を見るように諭すが……。

「いや……今宵はこれで十分。立ち去るがいいセイバー」

「なっ……私たちを見逃すと言うのか、アサシン」

アサシンの言葉にかなり驚いているようだ。

「そうだ。この続き、いずれ果たすというのなら見逃そう。今の
お前では満足な戦いは望めまい。私とてそれは惜しい」

セイバーがそういうアサシンを睨む数秒。

「……わかりましたアサシン。貴方との決着は、必ず」

「良い返事だ。期待しているぞ騎士王よ」

アサシンの言葉を聞き俺たちはその場を後にしようとするが山門から、衛宮を逃がすまいと赤い騎士が階段を駆け下りてくる。

「ちっ！」

俺はディケイドのプロトカードを取り出そうとするがその前にアーチャーはアサシンに止められていた。

「っ！ 邪魔をするつもりか侍」

「それはこっちの台詞だ。貴様こそ、見逃すと言った私の邪魔をするつもりか？」

両者がにらみ合っているうちに俺たちはその場を後にする事にした。

第6話 『魔女と弓兵と新コンボ』（後書き）

どーも天です！

最近話はできているのになかなか打てないという日々が続いておりますが今回はオースのオリジナルコンボ オオコジャコンボ の説明を。

仮面ライダーオースオオコジャコンボ……犬系グリードのクルアウのコアメダル、オオカミ、ジャツカル、コヨーテのコアメダルを使いコンボチェンジした姿。

コヨーテアームのシールドは機動戦士ガンダム0083のゲルググMのシールドを想像してください。

ベルト様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第7話

『全てを振り切る青き挑戦!』

(前書き)

現在貴大の使えるカードは21枚。

第7話 『全てを振り切る青き挑戦!』

??????

「……ライダーのマスターは既に我等の手の内だ」

「……仮面ライダープロト、そこまで警戒するほどのものかしら?」

異形の怪人…… スベル の言葉に紫のローブをきたサーヴァント
…… キヤスター が尋ねる。

「殺されかけておいてよく言う」

「あら? 見ていたのなら助けてくれても良かったのではなくて?」

「……必要が無かったただけだ」

「それはどういう意味かしら?」

「それはいずれ分かる、それより手筈通りに頼むぞ」

「ええ、分かっていますよ」

「ならいい」

そう告げるとスベルは銀のオーロラの中へ消えた。

・・・

次の日、俺は舞衣と衛宮と遠坂凜（以後遠坂）と一緒に昼飯を食っ

ていた。

「いや、ちょっと待て」

「なんだ？」

「いや、まあ鴛羽はまだ分かる……でもなんでお前が居るんだよこは学校の屋上だぞ！」

そうここは穂群原学園の校舎の屋上である。

「理由は簡単、鴛羽に弁当を届けに着た↓ついでに大河さん（衛宮の姉的存在で教師）に校内見学の許可をもらった↓暇だから衛宮の家にあった大量のみかんを使ってオレンジパイを作ったのをおすそ分けに来た……OK？」

「ああ、OKだ……しかしお前、料理できたんだな……けっこう美味い」

衛宮は俺が作ったオレンジパイを食べている。

「当然！おれは蕎麦とトマトを食べる以外で出来ない事は無い！」

「……子供みたいな欠点だな」

そんな感じでガヤガヤと雑談しているといきなり空……じゃないな空間が赤く淀む。

「結界！」

遠坂はかなり驚いた様子だ。

「最高に最悪なタイミングだな……」

「愚痴ってる場合か！ 早くしないと！」

俺の愚痴に衛宮が反応する。

「分かってる、行くぞ！」

俺の言葉を合図に全員走り出した。

・・・

屋上から校舎に入った俺と衛宮は近くにある教室に入る。

「……！」

遠坂は教室に入るのを戸惑い舞衣なんかは口を手で押さえ顔色が悪くなっている……無理も無い教室にいる全員は倒れていてその中でも数人は肌が凝固し生気をかすめとられた皮膚は、蠟細工のように不気味な光を反射している……そんな状況でなれている俺はともかく遠坂や舞衣が堪えられるはずも無い。

「……息はある。まだ間に合わない訳じゃない」

衛宮は他の2人とは違い教室にいる人間の脈や呼吸を確認していた。

「ああ……だがどうするデカイ魔力は2つ……この階と下の一階当たりにもう一つ、恐らくサーヴァントと見るべきだが」

流石に離れたサーヴァント二体を相手にする余裕は俺には無い。

「セイバーを呼ぶ、遠坂……令呪の使い方を教えてくれ」

成る程……それなら対処できるな。

「え……ちよつ、ちよつと待って、セイバーを呼ぶなら、わたしも……」

「いや……アーチャーは呼ぶな……今呼ばれたら十中八九殺し合いになる」

俺は遠坂の言葉を遮り言い放つ。正直厄介ことはこれ以上は持ち込みたくないからな。

「それで令呪の使い方は!？」

「……左手に意識を固めて。目は瞑った方がいい。頭の中で自分の令呪の形をイメージして、するつと紐解くだけでいいわ。もちろん、解く時は命令しながらよ」

遠坂の言葉を聞いた衛宮は目を瞑り集中する……そして。

「……頼む。来い、セイバー!!」

衛宮の叫びと共に空間が歪みセイバーが出現する。

「召喚に応じ参上しました。マスター、状況は……?令呪を使うほどの事なのですね?」

セイバーが問い。

「……見ての通りだ。サーヴァントに結界を張られた。一秒でも早くこいつを消去したいが小日向の話ではサーヴァントは二体この階と一階にいるらしい」

衛宮は答える。

「確かに、このフロアと下フロアにもサーヴァントの気配を感じます。それでは」

「ああ、俺と衛宮で一階のサーヴァントを叩くからお前はこの階のサーヴァントを……あと遠坂と舞衣を頼む」

セイバーの言葉に俺が続ける。

「分かりました、それではそちらはシロウを任せます」

「よし任された、雑魚がうようよしてるから気をつけろよ衛宮」

「ああ」

「それじゃあ行くぜ!」

この言葉と共に俺と衛宮は教室から飛び出す。教室の外にはモールドマシンとマスカレードードーパントが大量に居た。

「行くぜ!」

俺は左腕にプロトドライバーを出現させ更にアクセルとエンジンブレードのプロトカードを取り出す。

「行くぞキバット！」

「キバって行くぜ！ ガブっ！」

衛宮がキバットに手の甲をかませると衛宮の頬にステンドグラスのような模様が浮かび上がり腰には赤いベルトが出現する。

「「変身！！」」

俺がプロトカードをドライバーに挿入し衛宮がキバットをベルトに装着すると。

『K A M E N R I D E A C C E L 』

『W E A P O N R I D E E N G I N E B L A D E 』

電子音が鳴りアクセルのベルトが出現する。

『A c c e l 』

ガイアウイスパーが鳴り俺は仮面ライダーアクセルに、衛宮が仮面ライダーキバver・Fateに変身する。

「さあ、振り切るぜ！……ってな」

「行くぞ！」

俺たちは雑魚を蹴散らしながら階段を駆け下り一階に辿り着くとそこには紫の髪をしたサーヴァント……ライダーとそのマスターであろう衛宮と同じ制服の青いワカメヘアの男がいた。

「慎二、お前！」

衛宮は怒りをあらわにするが。

「……キバとプロトが探す手間が省けたな」

なんだ慎二とか言う男、様子が変だぞ？ しかも身体から砂が出ている、まさか……。

「お前……イマジンか？」

俺の問いかけに慎二？は。

「ご名答！ さて正体もばれた事だしそろそろ始めようじゃないか！」

そういったイマジンは電王ベルトに似たベルト……ユウキベルトを腰に巻き。

「変身！」

そのままライダーパスをベルトにかざす。

『Skull Form』

電子音が鳴りイマジン（恐らくゴーストイマジン）に憑依された男

は仮面ライダー幽汽 スカルフォーム へ変身した。

「慎二！ どうすれば……」

「衛宮、お前はあいつを抑える。今回はあくまでこの結界の除去……ライダーを倒す事だ、それに俺がライダーを倒して更にセイバーが来ればなんともなるからな」

焦る衛宮に俺が助言する。

「ああ、分かった」

「話し合いは終わったかい？ それじゃ始めようか！」

幽汽がこちらに向かって走ってくる、そして衛宮のFキバはそれを抑えるように行動を開始する。

「さて……俺たちは一昨日の決着^{けり}をつけようぜ！」

俺はライダーが杭の様な鎖のついた短剣を投げてきたのでそれをエンジンブレードで弾きながら接近し一撃を放つがそれをライダーは俺を飛び越えるようにして回避し振り向きざまに蹴りを入れてくる。

「そんなスピードでは私を捉えられませんよ？」

「だな」

そうライダーに言葉に答えた俺の手の中に光が集まりその光りは一枚のプロトカードになる。

「さてこつからが本番だ！」

俺はプロトドライバーを出現させ出現したプロトカードを挿入する。

『WEAPON RIDE TRIAL MEMORY』

電子音が鳴ったあと俺の手には上にストップウォッチのついたガイアメモリ…… トライアルメモリ が出現する。

「全て……振り切るぜ！ ……つてな」

俺はエンジンブレードを投げ捨てアクセルメモリをドライバーから抜きトライアルメモリのスイッチを押す。

『Trial』

そしてトライアルメモリを変形させベルトに挿入しドライバーの右にあるパワースロットルを捻る。

『Trial』

ガイアウイスパーが鳴った後『パン』と音が鳴りトライアルメモリの赤いランプが点灯する。

次の『パン』と言う音で赤のランプが消え黄色のランプが点灯し身体も黄色に変わる。

次の『パン』と言う音で黄色のランプが消え青いランプが点灯しその後の『パァーン』と言う音になりそれと同時に必要最低限の装甲以外が消滅し俺は アクセルトライアル に変身完了する。

「さあ……行くぜ？」

俺はものすごい速さでライダーに接近してぶん殴り後退させる。

「これで決めるぜ！」

俺はトリアルメモリを引き抜き変形させストップウォッチのスイッチを押し放り投げる。

「っ！」

ライダーは危険と感じたのか短剣を投げってくるが俺はそれを回避しライダーに接近しそのまま数え切れないほどの数の蹴りを高速で放つマシンガンスパイクを叩き込む。

そして最後の一撃を喰らわし振り返ってトリアルメモリをキャッチしストップウォッチを止める。因みにストップウォッチのタイムは9・8秒だった。

『Trial Maximum Drive』

「9・8秒、それがお前の絶望までのタイムだ……ってな」

「うあぁああああああ……」

ライダーはうめき声を上げながら力なく倒れ消滅した。

「さて、あとはイメージか……」

俺はエンジンブレードを回収し衛宮の元へ向かうと苦戦していた。

「くそっ……」

「はっはっ！ どうしたどうした？」

衛宮は友達？ が取り込まれているた躊躇っているようでいつもより動きが鈍い。

「はっ！」

俺はそんな衛宮と幽汽を引き剥がすためにエンジンブレードを振るう。

「お前！」

「残念だがライダーは倒させてもらった」

「くそっ、あの役立たずが！ ちっ、覚えてろよ！」

幽汽はそう言いながら出現した銀色のオーロラに消えそれと同時に結界も消滅した。

「慎二……くそっ！」

悔しがる衛宮。

暫くしてセイバー達もやってきて遠坂に指示を仰ぎ聖杯戦争の管理者とやらに連絡し俺たちは学園をあとにした。

第7話 『全てを振り切る青き挑戦!』 (後書き)

どーも作者の天です!

今回の説明は無し……えっ? 慎二とそれに憑依したゴーストイマジン? あれは知ってる人はニヤリとするかもしれないネタです。

今回は一気にプロトの新フォームが2つ登場です!(多分……)

闇色の月様、ベルト様感想&ご指摘ありがとうございます!

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第8話 『解き放たれた漆黒と嵐を呼ぶ蝙蝠』 (前書き)

現在貴大の持っているカードは22枚

第8話 『解き放たれた漆黒と嵐を呼ぶ蝙蝠』

ライダーを倒した後、俺はイリヤの城に戻った。それから数日何事も無く（衛宮と遠坂はセイバーとアーチャーをキャスターにとられたようだ……）グータラと過ごしイリヤに『このボンクラ執事！』と罵られるのが快感になり始めていたのだが事態は一変する。

「なんだよこれっ！」

目の前に映るのは消滅したバーサーカー、絶望するイリヤ……そしてイリヤに近づく10年前の聖杯戦争で敵として戦った英雄王……ギルガメッシュだった。そしてギルガメッシュがイリヤに手をかけようとするのを見て一気に接近してそれを止める。

「いつから少女趣味になったんだ、英雄王？」

「雑種……いや守護者か……」

俺とギルガメッシュはお互いにらみ合って数秒……俺が回し蹴りを入れギルガメッシュとの距離を開けその間にプロトドライバーを腰に装着し。

「離れてろイリヤ。変身！」

俺はイリヤが離れたのを確認すると両手をドライバーにかざす様にスライドさせると。

『Mode Proto』

電子音が鳴り銀のオーロラが出現しそれが通過すると俺は仮面ライダープロト プロトフォーム に変身する。

「鎧を纏うか守護者よ、なら我も鎧を纏おうではないか！」

そう言ったギルガメッシュの服は黒い服から金色の鎧に変わる。

「厄介な……」

そうばやきながら俺はディケイドのプロトカードをプロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE DECADE』

俺の手にライドブッカーが出現し更に俺はライドブッカーから一枚のライダーカードを取り出しプロトドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE ILLUSION』

電子音が鳴り俺の左右に1体つつ分身が出現する。

「そんな小細工で我に勝てると思ったか？ 王の財宝」
ゲート・オブ・バビロン

そう言ったギルガメッシュの背後には無数の宝具の原型である武器が出現しこちらに降り注ぐ。

「……はあっ！」「」

俺たちはそれをライドブッカーで迎撃するが間に合わず分身はあっという間に消滅してしまう。

「くそっ……ならこれでどうだ！」

俺は更にライダーカードを一枚プロトドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE BLAST』

電子音が鳴りライドブッカーの銃身が分裂し複数の弾を撃つ デイ
ケイドブラスト を放つがそれでもさばききれず直撃し火花が散る。

「がっ！」

俺はダメージを受け耐え切れず地面に転がる。

（スラッシュのカードを使うか？ いやあればブラストの二の舞だ
……プロトフォームでは勝てない…… フェニックスは援星を破壊し
た事で謹慎中だし他は調整中…… あれを使うしかないのか）

俺は意を決しブレイカーケースから一枚のカードを取り出しプロト
ドライバーに挿入する。

『Limit Chain First Breaker』

電子音が鳴り俺の意識は闇へと沈んだ。

NOSIDE・・・

『Limit Chain First Breaker』

電子音が鳴った後プロトは突然意識を失ったように腕をだらんと下

「天地乖離す……」
エヌマ

エアが起動し風と魔力を巻き上げる。

「GUUU!!」

プロトは本能で感じ取ったのか防御体制に入る。

「開闢の星!!」
エリシユ

突き出されたエアから赤い魔力の渦が放たれプロトを飲み込んだ。

・・・

鴉羽舞衣、衛宮士郎、遠坂凜、イリヤスフィールが目にしたのは爪は一つ残らず折れ装甲は欠けたりひびが入りさらにはあちこちから火花が飛び散っているプロトだった。

「貴大、嘘っ!」

「なっ、小日向……」

「嘘でしょ……」

「そんな、貴大……」

4人の表情に浮かぶのは絶望、それもその筈今唯一の希望だったプロトが敗れた。

ギルガメツシュはイリヤスフィールに歩み寄るがそれを阻止する者がいる……それは満身創痍のプロトフォームに戻ったプロトだった。

「まだ邪魔をするか守護者」

「当たり前だ……俺はイリヤの執事だぜ」

ギルガメツシュとイリヤスフィールの間に立つプロト。

「良からう、ならば貴様から先に殺してくれる！」

そう言つてギルガメツシュはエアを起動させようとするが何者かがエアを弾き飛ばす。

「何！」

そこに現れたのは蝙蝠型のプロトモンスター…… プロトバットだった。

「遅せえぞ……」

「まあまあ細かい事は気にせず派手に過激に行つこつぜ！」

プロトの言葉をプロトバットはあっさり流し。

「「変身!!」」

プロトの右腕にプロトバットが装着されると。

『Mode Batt』

電子音が鳴りプロトは暴風に包まれた。

貴大SIDE・・・

「「変身!」」

俺とプロトバットの掛け声とともにプロトバットが俺の右腕に装着されると。

『Mode Bat』

暴風が俺を包み暴風が晴れると俺は両肩と胸に紫色の蝙蝠の羽を模した追加装甲を纏った バットフォーム へと変身完了した。

「さあ……本番はここからだぜ!」

「いい加減飽きた、失せろ下郎!」

ギルガメッシュは王の財宝を再び展開し武具を放ってくる。
ゲート・オブ・バビロン

「はあ!」

俺はそれをボウガンモードになったプロトバットから無数の暴風を纏ったエネルギー弾で全て弾きギルガメッシュに一気に接近し腹に蹴りを入れた後ギルガメッシュの顔面に右ストレートを叩き込み左手でブレイカーカードを取り出しプロトドライバーに挿入する。

『Bat Breaker』

電子音が鳴りプロトバットにエネルギーが溜まる。

「はあっ！」

そのエネルギーを解放、無数の強力なエネルギー弾を発射するバットマシンガン を放つ。

「がっ！」

バットマシンガンはギルガメッシュの鎧を砕き身体を貫通する。

「がっ……守護者よ、なかなか楽しめたぞ……褒美だ受け取れ！」

ギルガメッシュは一枚のカードを俺の投げってくる。

「っ！ おい、これは……」

そのカードはギルガメッシュの描かれたプロトカードだった。

「ある日突然^{おれ}私の前に現れたのだ、それよりも気をつけるよ守護者……あの獣ども良からぬ事を企んでおるぞ」

そう言いながらギルガメッシュは消滅した。そしてプロトドライバーが落ち変身が解除されると同時に俺は仰向けに大の字に倒れた。

「——！——！」

誰かが何か言っているようだが全く聞こえない。

「うるせえ……少し寝かせろ」

俺はそう呟くと意識を闇に落とした。

第8話 『解き放たれた漆黒と嵐を呼ぶ蝙蝠』（後書き）

どーも天です！

今回はダークネスフォームとバットフォームの説明を。

仮面ライダープロト ダークネスフォーム …… プロトのリミッターを外した姿。別名、解放態とも呼ばれている。因みにこのフォームには3段階ある。

仮面ライダープロト バットフォーム …… プロトの強化フォーム、速さを重視した形態。但し防御は上がっていない。属性は風。

門矢光、霞 空斗様、ベルト様、感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第9話 『反撃』（前書き）

現在貴大の使えるカードは22枚。

第9話 『反撃』

俺が目が覚めて（正確には舞衣に叩き起こされた）聞かされたのは青い髪に青い服を着た男……ランサーと共闘しキャスターを倒す事だった。

「……俺の意見は無視か？」

「……寝てる（お前・アンタ）が悪い！！」「……」

おおっ一刀両断ですか……ってあんた等あのチート金ぴかに圧勝しろと？ それは無茶振りし過ぎですよ……。

「なんだ坊主？ 俺との共闘は反対か？」

そう訊いてきたランサーに対し。

「いや全然」

だっってお前……キャスターがウルトラショッカーと組んでることを考えると、把握してるだけでも相手はキャスターとそのマスター、幽汽、クルアウ、スベル、アーチャー、セイバー……キャスターとそのマスター……後出てくるか分からないスベルとクルアウを抜いても……。

「と言うか二人でも厳しくね？」

「何言ってるんだ？ さっきのギルガメッシュを倒したあれを使えば……」

「あれ無理、っと言うかプロトにすら変身できねえよ」

俺は衛宮の意見を遮る。

『はっ?』

あっ、全員（ランサーを含む）の声が重なった。

「だってオメエらドライバー壊れてるもん、明日までにはカメンライドとウェポンライドは何かできるけど流石にプロトまでは無理だぜ?」

『ええーーーーー!!』

全員が驚きの声を上げた。

・・・

そして翌日俺たちはイリヤと舞衣を衛宮邸に残してキャスターが潜伏している教会に乗り込むと教会前にはアーチャーと幽汽がいた。

「衛宮と遠坂は先に行け、すぐに追いつく」

「ああ」

「分かったわ」

そういうと2人は隠し通路を使い中に入っていった。

「さてランサー、あんたがやられて2対1とか勘弁な」

「それはこっちの台詞だ」

俺とランサーはお互い軽口をたたきあった後俺はプロトドライバーを出現させディケイドのプロトカードを取り出す。

「変身！」

ドライバーにカードを挿入すると。

『KAMEN RIDE』

電子音が鳴りディケイドのベルト…… ディケイドドライバー が出現し。

『DECADE』

電子音がなり俺はすべての破壊者と呼ばれた戦士…… 仮面ライダーディケイド に変身する。

「さあ、行くぜ」

ランサーはアーチャーと対峙し俺はライドブッカー ソードモードの刀身をひと撫でした後幽汽に向かって行く。

「はあ！」

ライドブッカーと幽汽の剣がぶつかり合う、一回、二回、三回、そして四回目で鏝迫り合いになる。

「いい加減にしるよお前！」

「それはこっちの台詞だ！」

俺は幽汽の剣を弾き追撃をかけようとするが幽汽は変身を解除する。
俺はライドブッカーを止めて蹴りを入れる。

「がっ！」

転がった慎二にライドブッカー ガンモード で牽制し右手に持っていたライダーパスを蹴り上げて奪い取る。

「これで変身はできないよな」

「なんでだよ……なんで！」

慎二の疑問に。

「こっちはテメエごときに時間をかけていられないんだよ、それに
人一人殺した所で世界に何の影響も無いしな」

俺はライドブッカーを ソードモード に変えて刀身を撫でながら
慎二に近づく。

「くっそー……！！」

慎二の身体からゴーストイマジンが飛び出し剣で斬りかかって来る。

「そいつを待ってたぜ！」

俺は剣を避けライドブッカーですれ違いざまに一閃し振り返って左上から斜めにもう一太刀喰らわす。

「がっ……なんで……」

「はっ、人を殺すとか極力したくないに決まってるだろうが」

そう言いながら俺はディケイドライバーにカードを挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
CADE』

俺とゴーストイマジンの間に数枚のホログラムカードが並び俺はそれをくぐってライドブッカーで敵を斬る ディメンションスラッシュを放つ。

「があああああああああ！！」

ゴーストイマジンはディメンションスラッシュが直撃し爆散する。

俺はそのまま変身を解除せずにランサーの元へ向かうとアーチャーの姿は既になくその代わりにランサーの胸になにものかの腕が貫き消滅しているところだった。

「最速のサーヴァントも所詮この程度か……」

その腕の正体はウルトラシヨッカーのグリード…… スベル だった。

「デメエ！」

「プロト……今回は時間があるからな、少し遊んでやろう」

スベルがそういつと銀のオーロラが出現しそこからクルアウ、ガオウ、ネガ電王、幽汽 ハイジャックフォーム が現れる。

「3分間俺たちの攻撃を耐えて見せる！」

「上等だ！ 全部ぶっ壊してやるよ！」

俺はクルアウを蹴り飛ばしガオウと幽汽の攻撃を回避しネガ電王の攻撃をライドブッカードで止めるがスベルの攻撃を受けて転がる。

「ぐう……」

5体が近づいて来ようとしたがそれは草むらから放たれた無数の弾丸で阻止される。

「全く、情けないなあ」

草むらから出てきたのは海東だった。

「うるせえ、見てるんだったら手伝え」

「これは貸しつてことで良いのかい？」

「そんなモン見物料でチャラに決まってるだろ」

「やれやれ、そう言う事にしといてあげるよ」

海東はディエンドライバーを取り出し一枚のライダーカードを挿入する。

『K A M E N R I D E』

「変身！」

海東がディエンドライバーの引き金を引くと。

『D I ・ E N D』

電子音が鳴り海東は仮面ライダーディエンドに変身する。

「ディエンド一人が増えた所で変わるものか！」

「それはやってみないと分からないぜ」

スベルに言葉を返しながら俺が斬り込みディエンドが援護する。

「はぁ！」

俺はネガ電王を斬り付ける、ガオウが後ろから切りかかってくるがディエンドがそれを阻止する。これが俺達が組む時の基本戦術、俺が斬り込み死角を海東がフォローする。ただ海東のほうにも気を配らないと誤って撃たれる可能性があるのが玉に瑕だ。

「おっと！」

そう考えているうちにディエンドは一枚のライダーカードを取り出

す。それを見た俺は慌ててスベルたちから離れライドブッカーから一枚のライダーカードを取り出しほぼ同時に各ドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE BLAST』

スベルたちにライドブッカー ガンモード とディエンドライバーの銃身が分身し無数の弾を放つ プラスト による十字砲火を浴びせる。

「ぐっ……こいつ等！」

「やめろ……時間だ」

激情するクルアウを抑えるスベルそしてその横には遠坂を抱えたアーチャーが現れる。

「アーチャーお前……」

「……伝言だイリヤスフィールと鵜羽舞衣は預かっている。明日柳洞寺でまで来い」

そう言い残しアーチャーたちは銀色のオーロラに消えていった。

「全く彼女を置いて来るとは失策だったね」

「ああ、今痛感してるよ」

「まあ精々気をつけたまえ」

「それは火事場を狙うこそ泥にか？」

「それだけ言えれば十分かな」

海東はそう言つと草むらの向こうに姿を消した。

第9話 『反撃』（後書き）

どーも作者の天です！

突然ですが今回は皆さんに聞きたい事があります！

それは龍騎サバイブのファイナルベントであるドラゴンファイヤー
ストームについてです！

その内容は攻撃のモーションを原作通りでいいのかそれともクライ
マックスヒーローズのようにしたらいいのか悩んでおります皆様は
どう考えているのでしょうか？

斬空様、ベルト様感想ありがとうございます。

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは！

最終話 『理想を追うものと破壊の聖剣』（前書き）

現在貴大の使えるカードは23枚

そして現在プロト変身不可

最終話 『理想を追うものと破壊の聖剣』

貴大たちが教会での激闘を終えた翌日、貴大と士郎とセイバーは柳洞寺の山門前まで来ていたそこで待っていたのはアサシンだった。

「シロウ、タカヒロ……あなた達は先に行ってください」

「分かった、行くぞ衛宮」

「ああ」

貴大と士郎はアサシンの横を通り抜け柳洞寺の門をくぐるとそこにはアーチャーとスベル、ビートルファンガイアとモルイマジンやマスカレイドドーパントの大群が立っていた。

「来たかプロト、残念だがこの世全ての悪の回収は終わった」
アンリマユ

そっくり残しスベルはビートルファンガイアたちを残して去っていった。

「アーチャー、なんでお前は遠坂を裏切ってウルトラショッカーについた？」

「私は私の目的のためにやつらを利用しただけだがそれがどうした？」

「お前！ アンリマユ この世全ての悪がどんなものか知っているはずだ！」

「それがどうした？」

「お前！」

「そこまでしておけ衛宮、アーチャー一応訊いてやる、お前は何か目的だ」

貴大は士郎とアーチャーの言い合いに割ってはいる。

「私の……いや俺の目的は衛宮士郎を殺す事だ！」

そう言ったアーチャーの手にキバットが出現する。

「ガブッ！」

アーチャーの頬にステンドグラスのような模様と腰に赤いベルトが現れ。

「変身」

キバットを赤いベルトに装着するとアーチャーはFキバへ変身する。

「な、お前まさか……」

「そう、奴の正体は英雄エミヤ……つまり未来のお前だ」

「ほう……俺の正体を知っていたとは流石といった所か」

「そりゃどうも、しかし……これ以上人質^{あいつら}を待たせれば何をしだすか分からんからな、行くぞ衛宮」

「ああ……」

「キバツて行くぜ！ガブっ！」

貴大はプロトドライバーを出現させディケイドのプロトカードを取り出し士郎もキバツトを掴み手の甲を噛ますと頬にステンドグラスのような模様と腰に赤いベルトが出現する。

「「変身！」」

貴大がプロトドライバーにカードを挿入し士郎がキバツトを赤いベルトに装着する。

『K A M E N R I D E』

貴大の腰にディケイドドライバーが出現し。

『D E C A D E』

貴大は仮面ライダーディケイドに士郎はFキバに変身した。

「行くぞ衛宮」

「ああ！」

士郎はアーチャーにディケイドはビートルファンガイアを中心とした怪人軍団に向かった。

・・・

ディケイドは怪人軍団に突っ込みモールイマジンに向かってライドブッカー ソードモード で一閃しマスカレイドドーパントを蹴り倒す。

「ったく……イマジンにはこいつだな」

そう言いながらディケイドはライドブッカーから一枚のライダーカードを取り出しサイドバックルを開きカードを挿入した後サイドバックルを閉める。

「KAMEN RIDE DEN-O」

電子音が鳴りディケイドはベルトがディケイドライバーの電王……ディケイド電王（以降D電王） に変身する。

「更にこれだ！」

D電王は更にライダーカードをもう一枚取り出しディケイドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE ORE SANJOU!』

「俺、」

D電王は右手の親指を突き出し自分に向け。

「参上！」

今度は足を適当に広げ左手は前に突き出し右手は横に広げる。

「……って律儀に決めさせてくれるお前等けっこう好きだぜ」

そう言いながらD電王はライドブッカードでモールイマジンを斬る。

・・・

一方こちらはFキバ同士の格闘戦、その結果は言わずもがなアチャーが士郎を圧倒している。

「お前は未来の俺なんだろう、なら俺の理想……正義の味方になったんじゃないのかよ！」

「正義の味方？ 笑わせるな、あれは正義の味方ではない、人を守るために人を殺す……ただの掃除屋だよ」

「そんな！」

「だからこそ衛宮士郎は理想を……正義の味方を目指すべきではなかったんだ！」

「お前は後悔してるのか？」

「……ああそうだ」

「なら俺たちは違う存在だ、俺は絶対に後悔なんてしないぞ！」

「ならば理想を抱いて死ね！」

「こんな所で死ねるか！」

アーチャーと士郎の戦いは激しさを増していった。

・・・

一度戻ってD電王、こちらは確実に怪人軍団を蹴散らしていく。

「はあっ！」

D電王は怪人を切り裂き怪人は爆散する。そして最後に残ったのはビートルファンガイアだ。

「ファンガイアにはやっぱコイツだろ」

そう言いながらD電王は一枚のライダーカードを取り出しディケイドライバーに挿入する。

『K A M E N R I D E K I V A 』

電子音が鳴りD電王はベルトがディケイドライバーのキバ…… デイケイドキバ キバフォーム（以降DキバKF）に変身する。

「さて、キバって行くぜ！…… ってな」

DキバKFはビートルファンガイアに向かって走り出し勢いをそのままに飛び掛りそのまま一回転しビートルファンガイアを投げ飛ばす。

「グアアアアアア！！」

ビートルファンガイアは向かってくるDキバKFに攻撃するがあっ

さりかわされ逆に連続パンチを食らう。

「さて、今日は大盤振る舞いだ！」

そう言いつつDキバKFは一枚のライダーカードをディケイドライバーに挿入する。

『FORM RIDE KIVA BASSHAA』

電子音が鳴りDキバの手に緑色の銃……カテナ バッシャーマグナム が出現しその直後Dキバの右腕と胸部が鎖で包まれた後すぐに鎖がはじけDキバは緑色になり バッシャーフォーム（以降BF） となる。

「これでも喰らってろ」

DキバBFはアクアバレットをバッシャーマグナムから発射しビートルファンガイアに命中させる。

「お次はこれ……ってな」

『FORM RIDE KIVA DOGGA』

電子音が鳴り紫色の拳の様なハンマー…… ドッグハンマー が出現し更にDキバBFは瞬時に両腕と胸部が紫色に変わり ドッグフォーム（以降DF） となる。

「ふんっ！」

DキバDFはすぐさまビートルファンガイアに近づきドッグハンマ

―を何度も叩きつける。

「これで終わりだ！」

DキバDFは一枚のカードをデイケイドライバーに挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE KI・KI・KI・KI
VA』

DキバDFはドッガハンマーの拳を開き掌にある目…… 真実の眼
で敵を拘束し、再び握られたハンマーを天に掲げるとオーラの拳
が出現、それを振り回し敵を叩き潰す…… ドッガサンダースラップ
をビートルファンガイアに当てるとビートルファンガイアはステ
ンドグラスのようになり砕け散る。

「さて……残ってるのはあいつだけか」

DキバDFは2体のFキバの元へ向かい。

「割り込み失礼！」

DキバDFはアーチャーに向かってドッガハンマーを振るう。

「むっ！」

アーチャーはドッガハンマーをバックステップで回避し距離をとる、
DキバDFはその間にライダーカードを一枚デイケイドライバーに
挿入する。

『FORM RIDE KIVA GARULU』

DキバDFの前に青い狼の様な剣…… ガルルセイバー が出現し
それを手に取るとDキバDFは右手がキバフォームのものとなり胸
と左腕は青い ガルルフォーム（以降GF） となる。

「二対一か……ならば」

そういったアーチャーは次の瞬間ある呪文を唱えだす。

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

（体は剣で出来ている）

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s m
y b l o o d .

（血潮は鉄で 心は硝子）

I h a v e c r e a t e d o v e r a t h o u s a n d
b l a d e s .

（幾たびの戦場を越えて不敗）

U n k n o w n t o D e a t h .

（ただの一度も敗走はなく）

N o r k n o w n t o L i f e .

（ただの一度も理解されない）

H a v e w i t h s t o o d p a i n t o c r e a t e
m a n y w e a p o n s .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う）

Yet, those hands will never hold anything.

故に、生涯に意味はなく)

So as I pray, "unlimited blade works."

その体はきつと剣で出来ていた)

現れたのは理想を追った男が唯一持ちえたもの、理想を追った男の心を移した世界。

固有結界 無限の剣製
アンリミテッド・ブレイドワークス

だがその結界は一瞬現れてFキバの鎧と混ざり合う、そして黒き鎧に赤いマント、胸には白いヘルズブレストを付けたエンペラーフォームを思わせる ブレイドワークスフォーム(以降BW)へと変化する。

「まったく……ここからが本番ってか？ 行くぞ衛宮」

「ああ！」

DキバGFと士郎(以降Fキバ)はアーチャー(以降FキバBW)に立ち向かうが。

「その程度か？」

DキバGFはガルルセイバーを干将で止められ莫耶で胸部を斬られ

Fキバは干将と莫耶で応戦するがそもそのスペックが違うため簡単にあしらわれてしまう。

「これで終わりにさせてもらう」

FキバBWはフェッスルをキバットに吹かす。

「ウェーイクアーーップ!!」

キバットが叫びFキバBWの周りには無数の武具が出現する。そしてFキバBWは手を上げてそれを振り下ろすと無数の武具はDキバGFとFキバに向かって降り注ぐ 無限の剣舞 が発動する。

「なっ、があっ!」

「うわっ!」

DキバGFはガルルセイバーで、Fキバは干将と莫耶で武具を弾くが弾ききれず直撃し転がりDキバGFはディケイドに戻る。

「衛宮士郎、貴様の理想は所詮衛宮切嗣に憧れただけの借り物、そんなものに意味は無い!」

FキバBWの言葉にディケイドは。

「そいつは違う!」

「何?」

「確かにコイツの理想は借り物かもしれない、だがコイツの衛宮切

嗣への思い、理想を目指そうとする思いは本物だ！　そしてその思いはやがて理想を本物にする」

「だがその理想はかなうことは無い！」

「かなう事はないかもしれない、だがコイツはそれを知った！　それでもなお理想に向かって進もうとしている、例え守護者^{おれ}だろうが未来の自分^{おまえ}だろうがそれを止める権利は無い！」

「だが、もはや止まれん……止められんのだ！」

「なら俺が……いや俺達が止めてやるよ！　なあ貴大？」

「もちろんだ、士郎」

「貴様は何者だ！」

「最古にして最強の仮面ライダーと名乗っておきたいところだが、今は通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！　……ってな」

その時ディケイドの手元が光りFキバと衛宮士郎のプロトカードが出現、更にライドブッカーからFキバが書かれたライダーカード、Fキバと赤い剣が書かれたライダーカード、そしてFキバの紋章が書かれたライダーカードが飛び出てくる。

「こいつを使えってか」

ディケイドはサイドバックルを開きFキバと赤い剣の書かれたカードをドライバーの挿入する。

『FINAL FORM RIDE』

そしてサイドバツクルを閉じると。

『KI・KI・KI・KIVA VER・FATE』

電子音がなったあとディケイドは。

「ちょっとくすぐったいぞ……ってな」

「えっ？ あっ？ ちょっと！」

問答無用で手刀をFキバの背中につき刺す。

「お、おわー！！」

Fキバはの姿が変わっていきFキバの一部を残した剣…… キバカリバーン に変わった。

『な、なんでさー！！！』

「細かい事は気にするな、ほら行くぞ！」

ディケイドはキバカリバーンの言葉を軽く流しながらそれをFキバBWに振り下ろす。

「ぐっ……」

FキバBWは干将と莫耶で受けるが俺はそのまま干将と莫耶を叩き折り胴体を斬りつける。

「がつ……」

更に後退するFキバBWに刀身が赤く光ったキバカリバーンで下から斬り裂く。

「ぐあ……」

FキバBWが仰け反る。

「コイツで終わらせる！」

ディケイドはFキバの紋章が書かれたライダーカードをディケイドライバーに挿入する。

『FINAL ATTACK
RIDE K I・K I・K I・K I
V A V E R・F A T E』

電子音が鳴りキバカリバーンの刀身がさつきとは比べ物にならないほどの光に包まれる。

「『はあああああ！！
ディケイドカリバーン
勝利すべき破壊の剣』」

ディケイドは光りに包まれたキバカリバーンでの斬撃……
ディケイドカリバーン
勝利すべき破壊の剣を振りぬく。
ディケ
勝利す

「ぐあああああああ！！」

FキバBWはアーチャーに戻り転がっていった。

デイクイドはキバカリバーンを放り投げるとFキバに戻り二人は同時に変身を解除し座り込む。

「……終わつたな」

「……そうだな」

その後二人のもとにアサシンを倒したであろうセイバーが合流し凜と舞衣、そしてイリヤスフィールを救出した後、令呪の力を使い聖杯を壊しセイバーは消えていった。

それから数日後・・・

貴大は残りのプロトカード（穂群原学園にライダー、アインツベルン城にバーサーカー、教会にランサーとキャスター、柳洞寺にアサシンとセイバー）を回収しながらプロトドライバーを修復しこの世界を去ることになったのだが……。

「ところで士郎はどうした？」

今ここには次の世界へ旅立つ貴大と舞衣、そしてそれを見送りに来た凜とイリヤスフィールだけだった。薄情な奴だな……と貴大が呟いていると。

「おーい！」

それなりの荷物を持った士郎がやってきた。

「……お前その荷物はなんだ？」

「何ってついて行くからに決まってるだろ」

「オイオイ……学校はどうするんだよ？」

「藤ねえにはちゃんと全て話してある」

「全部？」

「もちろん魔術や仮面ライダーの事は言っていないが」

「ファンガイアはどうするつもりだ？」

「それについては問題ない、キバの鎧はたくさんあるしそれに何より」

「私がいるからな」

そう言って出て来たのはアーチャーだ。

「お前……聖杯が無いのになんで現界してるんだ？」

「凜とイリヤスフィールが力を貸してくれてな今は彼女等の使い魔として現界している状態だ、お前達に敗れたおかげでスッキリしてな……もう一度正義の味方……いや仮面ライダーとして戦おうと決意したんだ」

「そうか……」

貴大は士郎に向き直り。

「この旅はお前の理想を裏切る旅になるかも知れんぞ？ それに一度この世界を出たら二度と帰ってこられない、それでもついて来るか？」

「もちろんだ！」

「・・・好きにしろ」

貴大がパチンつと指を鳴らすと後ろに銀色のオーロラが現れる。

「それじゃあ行こうぜ」

貴大たちがアーチャーたちに背を向けようとすると。

「小日向貴大！ 餓別だ！」

アーチャーは貴大にアーチャーのプロトカードを投げ貴大はそれを受け取り振り向かずそのままオーロラをくぐった。

??????

それは貴大たちが向かう次の世界。

「はあ！」

赤い龍を従える赤い騎士。そしてそれを見つめる青き蝙蝠は主が現れるのをじつと待つ。

最終話 『理想を追うものと破壊の聖剣』（後書き）

どーも天です！

今回は貴大が変身するディケイドの所持するカードについて。

貴大ディケイドはコンプリートカードを除いたムービー大戦2010終了時に所持していたカード（通常、激情態問わず）&今回手に入れたFキバ系のカードです！

ベルト様、斬空様、闇色の月様、ネロアンジェロ様、感想ありがとうございます！

なおご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っただけだと幸いです。それでは！

第1話『戦わなければ無罪にできない』(前書き)

作品の傾向が偏ってるな俺。

タイトルは適當です…… スイマセン。

現在貴大の使えるカードは31枚。

因みにプロトは使用可能。

第1話『戦わなければ無罪にできない』

銀色のオーロラを抜けた貴大たち。

「それでこの世界は何の世界なんだ？」

士郎の疑問に貴大はキョロキョロしながら。

「あー、恐らくここは龍騎の世界、それもライダーを使って裁判をするって言う変り種だな」

そう言いながら貴大は拾い上げた雑誌を『ほらよ』と呟きながら士郎に渡す。

「それにしても今回は服は変わってないのね」

舞衣が言ったように貴大の服はどこかのマゼンタの大体分かった男のように世界を渡ることになるのだ。

「いや……そうでもないらしい」

そう言いながら貴大が取り出したの是一片の名刺だった。

「フリージャーナリスト、小日向貴大？」

「ああ、そんなもって俺達が調べる事件はこれだ！」

そう言いながら貴大は士郎の雑誌を取り上げペラペラと捲りある記事を見せる。

「「ジャーナリスト殺人事件？」」

その内容は自宅でジャーナリストの白鳥ユイが無残にも殺害され容疑者としてライバル関係にあった羽黒レンが逮捕判決をライダー裁判で決めると言う記事だ。

「事件の匂いがするだろ？」

貴大の言葉に。

「「というか事件起きてるじゃん！」」

と突っ込みを入れる二人。

「……ほら行くぞ！」

突っ込みを入れられ気まづくなった貴大はズカズカと歩き出すのだった。

接見室……

「アンタがジャーナリスト殺人事件の犯人の羽黒レンか」

「違う、俺はやってない！」

貴大の言葉をレンが否定する。

「ホントに？」

「本当だ、信じてくれ！」

貴大はレンの目を見て。

「まあアンタは人殺しの眼はしてないからな信じてやるよ、んであんた等誰？」

そこにはレンの他に2人の男がいた。

「僕は辰巳シンジ、レンさんとコンビを組んでました」

「俺は鮫島シュウイチ、羽黒レンの弁護士だけど……アンタこそ誰よ？」

「俺は小日向貴大、一応フリーのジャーナリストだ。この事件にはドス黒い何かがありそうな気がしてな調べることにしたんだが」

貴大は2人に正直に理由を述べると。

「アンタの勘案外あたってるかもよ？」

とシュウイチは貴大にある資料を手渡す。

「事件の詳細資料だろ？ 見ても良いのか？」

「もちろん」

貴大がざっと目を通して一言。

「警察官つてのは脳が腐ってるのか？」

「ヒュ〜、ド直球だねえ」

「どづいうことなんだ？」

シュウイチは口笛を吹き士郎が貴大にたずねる。

「被害者の死因だよ」

そう言いつつ貴大は軽く士郎の首を片手で掴む。

「ちよっおま！」

「被害者はこの状態で首を押し折られて死んでいる、おかしいと思わないか？」

貴大は手を放しながら士郎に問うと士郎、舞衣、シンジの3人は悩み始める。

「そうかそういうことか！」

どうやらレンは気付いたようだ。

「何か分かったのレンさん？」

シンジの疑問にレンは。

「ああ……普通首を押し折る前に窒息して死んでしまう……いやそもそも普通の人間が片手で首を押し折るなんてできない」

「つまり、犯人は人間じゃない、いや少なくとも普通の人間じゃないってことだろうねえ」

レンの言葉にシュウイチが付け加える。

「もしかしてミラーモンスターが？」

「いや、やつらは普通自分達が食うために人を襲う、わざわざ人を殺して食わないなんて事は例外を除いてはしないだろう」

シンジの言葉を貴大が否定する。

「例外って？」

「……ライダー契約しているモンスター」

舞衣の疑問にレンが呟くように答える。

「じゃあ犯人は仮面ライダーだって言うのかよ」

「恐らくな」

士郎の答えに貴大が頷く。

「でも、カードデッキは裁判所が管理しているはずじゃあ……」

「裁判所から盗んだか……この世界に居るはずの無いライダーがいるかな」

シンジの言葉に貴大が推測する。

「じゃあまたウルトラシヨッカーが？」

「いや、怪人やライダーを別の世界に持つてきちまう奴は案外多いからな……変態鳴門男とか、まあ鳴門にしろウルトラシヨッカーにしろ世界のバランスを少しでも狂わしたんだそれ相応の報いは受けてもらう」

士郎の予想に貴大が答える。

「さっきから色々分からない単語が飛び交ってるけど証拠はあるの？」

「証拠は無いが事実を証明する手段はあるぜ」

そう言つて貴大はポケットから蝙蝠のような紋章が入ったカードデツキを取り出す。

「成る程、確かにそれが一番手っ取り早いだろうし既にあちらさんも準備万端みたいだしねえ」

そう言いながらシュウイチも鯨のような紋章が入ったカードデツキを取り出し2人は自分達の映るガラスにカードデツキを向けると何も無い所からVバックルが2人の腰に出現する。

「悪いがアンタを完全には信用していない」

貴大の言葉に対し。

「安心してよ、それはお互い様だから」

とシュウイチが返す。

「そうかよ、んじゃ行くぜ」

貴大が言った後。

「「変身！」」

2人はそれぞれのカードデッキをVバックルに入れると貴大は仮面ライダーナイトにシュウイチは仮面ライダーアビスに変身しガラスの中に入っていた。

・・・

ナイトとアビスがスクーター型のマシン……ライドシューターを走らせていると戦いの舞台……ミラーワールドに到着しライドシューターから降りるとそこには仮面ライダーベルデ、仮面ライダーシザース、仮面ライダータイガが待ち受けていた。

「2対3か……厄介だねえ」

「オイオイ、相手は所詮かませ……ゲフンゲフン前座だろ？」

「あんまり変わってないよそれ……」

ナイトの言葉に呆れるアビス。

「誰がかませ犬だ！」

「デメエ等倒して証明してやる！」

「イー！」

「「いや、最後の一人おかしいだろ！」」

因みに台詞の順番はシザース、ベルデ、タイガ、ナイト&アビスである。

結局シザースとベルデをナイトがタイガをアビスが担当する事になった。

・・・

ナイトはシザースの攻撃を避ける避ける避ける。

「なんだなんだ、威勢がいいのは最初だけか！」

シザースの挑発に乗らずナイトは避ける避ける。

『CLEAR VENT』

バイザー音を聞いたシザースが距離をとりベルデが攻撃しようとするが……。

「そこか！」

ナイトは攻撃をしようとして姿を見せたベルデに剣型の召喚機……
ダークバイザー でベルデのカードデッキに向かって一撃入れる。

「がつ、なんで！」

「軽い先読みだよ、それでなくても隠れてコソコソやる奴の行動なんてお見通しだけど……っな！」

そう言いながらナイトはダークバイザーをベルデのカードデッキに突き刺すとカードデッキは割れてベルデは穴に吸い込まれ退場した。

・
・
・

一方こちらはアビスとタイガの戦い。その結果はまさに一方的だった。

「はっ、せいっ！」

アビスが2本のアビスセイバーでタイガを斬る斬る斬る斬るそしてタイガが攻撃に耐えられなくなり転がると。

「それじゃあ決めますか」

アビスはカードデッキから一枚アドベントカードを取り出しコバンザメ型の召喚機…… アビスバイザー にアドベントカードを入れる。

『FINAL VENT』

バイザー音がなり何処からかホオジロザメ型の合体モンスターであるアビソドンが出現する。そしてアビソドンはタイガに無数のエネルギー弾を浴びせる。

「ぐっ、ぐわあああああ!!」

タイガは耐え切れず爆散し退場した。

・
・
・

一度戻ってナイト対シザースのはずだが……。

「た、頼む！許してくれ」

まさかのシザースの命乞いに呆れたように近づくナイトだが……。

「へっへ！隙あり！」

シザースはさっきの態度が嘘のようにナイトに一撃喰らわす。

「ぐわっ！」

ナイトは一撃を喰らいそのまま仰向けに倒れる。

「卑怯もらっきょうも大好物だぜ！ さてそろそろ退場してもらおうか！」

そう言ってシザースがナイトに近づくと……。

「甘いよお前」

ナイトがダークバイザーでシザースを突き刺す。

「がつ！お、お前！」

「らっきょうは微妙だが卑怯はそれなりに好きだぜ」

ナイトは立ち上がりシザースを斬りつける。

「がつ！ちょ、ちょっと待ってくれよ！」

「悪いが卑怯だのらっきょうだのを繰り返す心算は無い！」

ナイトはダークバイザーでシザースのカードデッキを割る。

「う、うわーーーー！！！」

シザースは穴に飲み込まれ退場した。

「全くカードを使わずに2人も倒しちゃうなんて、アンタ本当にジャーナリストなの？」

アビスはナイトに言いながら合流する。

「そこら辺は想像に任せるさ」

チャラけながら言うナイトに対し呆れるアビスだが……。

「はああああ！」

突如襲い掛かってきた白い女性ライダー…… 仮面ライダーファム
よって事態は一変するのだった。

第1話『戦わなければ無罪にできない』（後書き）

どーも天です！

天「突然だが今回から後書きを対話形式にする！」

貴「唐突だなオイ、それにしてもなんで俺はナイトなんだ？」

天「俺の趣味」

貴「オイ！」

天「安心しろちゃんと別の意味もある（多分……）」

貴「今たぶんとか聞こえたが？」

天「ソナナコトナイヨー」

貴「怪しい……」

天「そんな事よりコラボしたいなーって思ってたりするが他の作者様の作品を壊してしまう事が怖かったり」

貴「そもそもこんな作品にコラボの許可なんか下りないと思うしどのみちこの世界が終わってからだろうが」

天「まあそうなんだけどね」

貴「あ、あと普通の人間が片手で首を折るのは無理とか言ってるの

は作者の考えだ」

天「異論は認める！」

ベルト様、闇色の月様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは

第2話 『赤き龍と黒き龍』（前書き）

所々おかしいかもしれない……。

現在貴大の使えるカードは31枚。

第2話 『赤き龍と黒き龍』

ファム攻撃をかわすナイト。

「ちつ、なんなんだお前は」

ナイトは舌打ちをしながらファムの攻撃を避ける避ける避ける。

「お姉ちゃんの仇！」

ファムは声を荒げがむしゃらに攻撃する。

「成る程、被害者の関係者が……」

ナイトは冷静かわし、受け止め、受け流してファムの攻撃を凌いでいく。

「なんで攻撃してこない！」

「お前の攻撃には迷いがある、そんな奴と戦う気にはなれないんだ」

ナイトはそう言うファムの攻撃をひらりとかわしファムに背を向ける。

「お、おい！ いいのかよ」

思わず声を上げるアビスだが。

「良いんだよ別に、それにな……」

ナイトは右手を上げるとその右手は粒子化し始めている。

「時間切れだ」

そう言い残しナイトは鏡からミラーワールドを出る。

「全く……良く分かんない奴」

アビスは愚痴をこぼしミラーワールドを出た。

・・・

ミラーワールドを脱出し変身を解除する貴大とシュウイチ、そこに駆けつける士郎と舞衣。

「俺は一度事務所に戻るけどアンタらどうする？」

シュウイチの質問に貴大は。

「街をぶらつくこうかと思ってる、もしかしたら手掛^{ライダー}かりがあるかもしれないからな」

「そう、それじゃあ精々頑張ってよ」

「ああ、まっアンタも他のライダーにやられない様に精々頑張ってくれや」

そう言い合いながらシュウイチと貴大達は立ち去った。

・・・

「こんなことしてて本当にライダーは来るのかよ？」

街をぶらつく貴大に士郎が訊ねると。

「さあ知らん」

士郎は予想外の答えを返してきた貴大に対し。

「知らんってお前なあ……」

「そもそも俺達の目的はプロトカードであってライダー裁判はオマケでしかないんだよ、それに……」

貴大はある方向を指差し。

「プロトカードあるところに厄介事ありだ」

その指差したほうをたどってみると赤いミラーモンスター……ゲルニユート　が人を襲っていた。

「おいおい、早く助けないと！」

そう言つて士郎はゲルニユートに向かって走り出す。

「あんまり焦るといい事無いぜ……って聞いちゃいないか」

そう言つて貴大は士郎に追いつき2人はゲルニユートに飛び蹴りを

喰らわす。

「ゲルル！」

蹴り飛ばされたゲルニユートは鏡を通りミラーワールドへ戻る。

「士郎ここは任せたぞ」

貴大はそう言いながらプロトドライバーを腰に出現させ左手をドライバーにスライドさせながら腰の右側辺りまで持っていていき右手を左肩辺りまでもって行く。

「変身！」

右手を斜めに下げつつドライバーにスライドさせ左手を腰の反対側に持っていく。

『mode Proto』

電子音が鳴り貴大の前に銀のオーロラが現れそれをくぐると貴大は仮面ライダープロト プロトフォーム に変身した。

「あー、やっぱりこれの方がしっくり来るわ」

プロトはそう言いながら2〜3回ほど両肩を回し。

「これを使っとくか」

プロトはプロトカードを1枚取り出しプロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE SCISSORS』

「それじゃあ行ってくるぜ」

プロトはそのまま鏡を通りミラーワールドへと入った。

・・・

一方ミラーワールドでは龍を宿した赤き戦士…… 仮面ライダー龍騎 がゲルニユート2体と戦っているとそこに。

「おらっ」

プロトが1体のゲルニユートと共に乱入してくる。

「君は確かスーパージョッカーの時にいた……プロト」

「あの時の龍騎か……お前、声からして辰巳か？」

「そっという君は小日向君だよね？」

お互い確認しあう龍騎とプロトだが……。

「ゲルルルル!!」

ゲルニユート達が2人に襲い掛かる。

「おっと、話は後だ」

プロトはゲルニユートの攻撃を回避し残りの2体と対峙する。

「ゲルルル!!」

「雑魚が調子に乗りやがって」

ゲルニユートの攻撃を上半身だけを動かして回避しそのまま蹴りを入れる。

「ゲルルル!!」

もう1体の攻撃を左腕で受け止め右手でゲルニユートを掴みそのまま左手で殴り飛ばす。

「雑魚に構ってる暇はないんでな」

プロトは腰の左側からブレイカーカードを取り出しプロトドライブに挿入する。

『Proto Breaker』

プロトの左手にエネルギーが集まる。

「ゲルル!!」

飛びかかってきたゲルニユートに対しプロトは。

「邪魔だ引っ込んでろ!!」

右手で引っ掴み龍騎と対峙していたゲルニユート目掛けてぶん投げ直撃する。

「「ゲルルル!!」」

龍騎はゲルニユートが激突したのを見てカードデッキから1枚のカードを取り出し龍の頭を模したバイザー……ドラグバイザーに挿入する。

『STRIKE VENT』

電子音が鳴り龍騎の左手には契約モンスターである赤い龍……ドラグレッダーの頭を模したドラグクローが装備され。

「はあああ……」

龍騎がドラグクローを構えるとドラグレッダーが龍騎の周りを一回転し。

「だああ!!」

龍騎がドラグクローを突き出すとそれに合わせてドラグレッダーが炎を吐き出すドラグクローファイヤーが2体のゲルニユートを包み爆散させる。

「おらっ!」

プロトは残る1体のゲルニユートにアッパーカットを食らわすとゲルニユートは爆散した。

「あー終わった終わった、ところでライダーバトル以外でカードデッキを使ってもいいのかよ?」

「それは大丈夫、龍騎は色々合って手に入れたんだけどその途端に龍騎は裁判で使えなくなっただけでその代わりに新しくアビスが正式に裁判用のライダーに選ばれたからね」

「なるほどな、この世界がお前を龍騎に選んだってわけか」

プロトと龍騎が話していると突然。

「うわっ！」

アビスが転がってくる、プロトと龍騎は駆け寄り。

「おいおい大丈夫かよ弁護士？」

「その声はさっきのジャーナリスト……って何よその格好？」

「説明できる状況じゃないと思うけどな……」

プロトが見上げるとそこには仮面ライダーガイと仮面ライダーインペラーが構えその奥にはファムと黒い龍騎…… 仮面ライダーリュウガ が戦っていた。

「全く……面倒ごとが次から次へと……辰巳と弁護士は手前の奴等を相手してろ、俺は奥の野郎に用がある」

プロトは龍騎とアビスにそう言うと言いつつガイとインペラーを飛び越えファムとリュウガの間に割ってはいる。

「悪いが割り込ませてもらうぜ！」

「貴様、何者だ！」

「通りすがりのジャーナリストとでも名乗っておくさ！」

プロトは決め台詞を言つと構えリュウガと対峙する。

「死ねえ！」

リュウガはドラグセイバーでプロトに斬りかかるがプロトはそれをかわす、かわす、かわす。

「剣持つてる奴相手に素手はきついな」

プロトはそう言つと強引に両腕で斬りかかって来たドラグセイバーを止めリュウガの腹部に蹴りを入れ距離を開けカードケースから一枚プロトカードを取り出しプロトドライバーに挿入する。

『WEAPON RIDE MEDAZYARIBAR』

電子音が鳴りプロトの手にメダジャリバーが出現する。

「さあ……行くぜ？」

プロトが構えたとリュウガは斬りかかるがプロトはそれをメダジャリバーで受け止めそのまま弾き仰け反つた所連続で斬りつける。

「ぐう……」

リュウガは一枚のアドベントカードを龍の顔を模した召喚機……

第2話 『赤き龍と黒き龍』（後書き）

天「突然だが今より『誰得？俺得！俺たちのライダー大戦！ライダーバトルトーナメント』の開催を宣言する！」

貴「なんだそれ？」

天「ルールは簡単この小説の読者様にライダーを貸していただき（お一人様最大三人まで）トーナメント形式で戦っていき最強のライダーを決めると言うものだ！因みに勝敗は俺の独断と偏見&コメントによって決まる！」

貴「独断と偏見じゃないだろ……」

天「応募の際には能力、フォーム、使うガイアメモリやカードなど書いてくれると助かります！」

貴「応募は感想でも受け付けるができるだけメッセージで頼む」

天「なお参加者が少ない場合はバトルロワイヤルになるか自然消滅になる」

貴「確かに下手したらプロトによるFキバのリンチショーになりかねんからな」

貴・天「皆様の応募待ってます！それでは」

ネロアンジェロ様、ベルト様、闇色の月様、斬空様、門矢光様感想ありがとうございます！

ご意見や感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは

第3話 『真実』（前書き）

今回は無理矢理感が否めない……。

現在貴大の使えるカードは31枚。

「逃がすかよ！」

プロトはリュウガを追おうとするがガイとインペラーに止められる。

「邪魔だ！」

プロトは2体に蹴りを入れたあとエナジーウィングを展開しガイとインペラーを掴み飛翔する。

「は、放せよ！」

「お望みどおり放してやるよ」

プロトはかなりの高度まで飛翔したあとガイとインペラーを放しブレイカーカードをプロトドライバーに挿入する。

『Phoenix Breaker』

電子音が鳴るとプロトは炎に包まれそのまま縦に1回転飛び敵に突撃する フェニックスバースト をガイとインペラーに食らわし2体は爆散退場する。

「……………逃がしたか」

プロトは忌々しげに呟く。

「全く龍騎は居るわからないライダーに変身するわ一体どうなるわけ？」

アビスは龍騎と共にプロトの近くに寄りながらたずねる。

「……とりあえずここから出るぞ」

プロトたちはとりあえずミラーワールドを出ることにした。

・・・

現在貴大たちは鮫島の事務所で自分達の事を話している。因みにプロトカードの事と貴大が守護者である事は隠したが。

「……ものすごく突拍子も無い話だねえ」

「信じる信じないは勝手だが事実な事実だ」

「まあアンタがジャーナリストだって言うよりよっぽど信憑性があるけどね」

「それはそれで複雑だけだな」

シュウイチの言葉に貴大は苦笑いをする。

「あんた等の事情も分かったしそろそろ本題に入ろうか」

シュウイチの言葉で全員が真剣な表情になる。

「んで何か分かったのか？」

貴大の言葉にシュウイチは頷きながら。

「とりあえずこれを見せてくれ」

そう言っ取り出したのは表紙に被害者の名前が書かれたノートだった。

「これは被害者のネタ帳か？」

貴大はノートを捲りながら問う。

「そうそう、で問題なのがこれ」

そう言っ貴大からノートを受け取ったシュウイチが指したのは書きかけの記事だった。

「何々……ライダー裁判、まさかの八百長疑惑！ とある事件を賄賂によって証拠や容疑者をでっち上げ更にライダー裁判の参加者を買収し罪の無い男性を有罪にしまった。その八百長の犯人は黒崎リュウジ……ってここで途切れてるな」

貴大は読み終わるとノートを閉じ言葉を続ける。

「全く……なんつー無茶苦茶なやつだよ」

ため息混じりにそう言っ貴大は事務所を出ようとする。

「ちょっと、何処に行く心算？」

シュウイチの言葉に貴大は。

「ちょっと黒崎っ奴の顔でも見に行こうかと思ってな」

「ふーん、まあ捕まらないように気をつけてよ」

「はいよ」

貴大は手を振りながらその場を後にし、士郎と舞衣はそれを追いかけるように出て行くのだった。

・・・

黒崎邸の前に到着した貴大たち、だがそこには思いがけない人物の姿があった。

「おい海東……お前何してやがんだ？」

「何ってお宝手に入れるタイミングを見計らってる最中さ」

そこに居たのは海東大樹だった。

「ねえ貴大、この人誰？」

舞衣の疑問に貴大は。

「コイツは海東大樹……ただのこそ泥だ」

「ひどいなあ……僕はこそ泥じゃなくてトレジャーハンターなのに」

「そんなもんでもいい……んで今回は何を狙ってるんだお前は？」

「よくぞ聞いてくれた、今回の狙いは……サバイブのアドベントカードさ！」

「サバイブってお前、さほど珍しくも無いだろうが……」

「何言ってるんだ！ 僕が狙ってるのはただのサバイブじゃない……その名も サバイブ漆黒 さ」

「サバイブ漆黒か……それは確かにお宝だな」

サバイブ漆黒は原典に存在しないこの世界独自のアドベントカードなのだ。貴大と大樹が話していると突然。

「貴様等！ 何をしている！」

貴大たちが後ろを振り向くとそこにはたくさんの警備員が立っていた。

「す、すいませんすぐ帰りますので！」

士郎は頭を下げるが。

「いや待て士郎、こいつ等人間じゃないぞ！」

「なんだって！」

貴大の言葉に驚く士郎、すると警備員の一人が。

「こつも簡単に正体を見破られるとは……まあいい正体を知られたからには生かしては返さん！」

『イーーーー』

警備員が次々とショッカーの戦闘員に代わりリーダー格の戦闘員からは砂が噴出しその砂はバットイマジンに変わる。

「全く……だがこれで黒崎がウルトラショッカーと関わってる事は確実だな、舞衣、少し下がってろ」

「うん……気をつけてね」

「ああ、分かってる」

貴大はそう言いながら左腕にプロトドライバーを出現させケースからオーズのプロトカードを取り出す。

「行くぞキバット！」

「よっしゃーキバツていくぜ！ガブッ！」

士郎がキバットに手の甲をかませると頬にステンドグラスのような模様が浮かび上がり赤いベルトが出現する。

「君達に僕の邪魔はさせない」

大樹はディエンドライバーを取り出し1枚のライダーカードをディエンドライバーに挿入し銃身を前にスライドする。

『KAMEN RIDER』

「『『変身!』』」

貴大がプロトドライバーにプロトカードを挿入し士郎がキバットを赤いベルトに装着し大樹がディエンドドライバーの引き金を引く。

『K A M E N R I D E O O O 』

『タカ・トラ・バッタ』

『タ・ト・バ・タトバ・タトバ』

『D I ・ E N D 』

貴大は仮面ライダーオーズ タトバコンボ に士郎は仮面ライダーキバver・Fateに大樹は仮面ライダーディエンドに変身した。

「さあ……行くぜ!」

オーズの言葉を合図に一斉に駆け出す。

「おらっ!」

オーズは戦闘員たちを殴り、蹴飛ばし、投げながらバットイマジンに辿り着く。

「ここが貴様等の墓場にしてやる!」

「やれるもんならやって見やがれ!」

オーズとバットイマジンは戦闘を開始する。

・・・

一方こちらはFキバとディエンド。

「はぁ！」

Fキバが干将と莫耶で敵を斬っていき。

「はっ！」

ディエンドはFキバが取りこぼし向かってきた敵を倒していく。

「イー！」

戦闘員がFキバの後ろから仕掛けるが。

「やらせないさ」

ディエンドはそれを撃ち抜く。

「すまない」

「勘違いしないでくれたまえ、Fキバの鎧は僕がぜひとも欲しいお宝だからね他の奴に傷をつけて欲しくないだけさ」

「ああそうかよ」

この時Fキバのディエンドに対する評価は変わった。

戻ってこちらはオーズ対バットイマジン。

オーズはバットイマジンをトラクロード斬り裂く。

バットイマジンはオーズの猛攻に防戦一方になっている。

オーズはバットイマジンを蹴り飛ばしオーズドライバーをオースキヤナーでスキャンする。

オーズの足がバツタに変化しその状態で跳び上がり、空中に発生した赤・黄・緑の3つのリングを潜り抜けて両足蹴りを叩き込む……

タトバキツクはバットイマジンに直撃し爆散……するがその直後上半身はコウモリと鳥の合成、下半身は蜂の腹部のような姿をしたギガンテスへブンへと姿を変える。

302

ギガンテスヘブンは腹部の針をオーズに向かって発射する。

「だあああ!」

オーズは転がりながら回避し針が当たらないように走る。

「こうなったらデンライナー……ってプロトカードが無いんだった
!」

頭を抱えながら走るオーズその向かう先にはマシンプロトがあった。

「これで何とかするしかないか」

オーズは左手にプロトドライバーを出現させ1枚のプロトカードを
挿入する。

『WEAPON RIDE SIDE BASSHER』

マシンプロトは銀のオーロラをくぐるとサイドバッシャー バトル
モード に変化し攻撃を開始するが。

「G A A A A A A A A A !」

サイドバッシャーはギガンテスヘブンの猛攻にあい呆気なく倒され
マシンプロトに戻る。

「くそつ他に何か無いのか!」

そう言ったオーズの手の中が光りシャチ、ウナギ、タコのコアメダ

ルが出現する。

「これで何とかしろってか？」

オーズはそう言いながらもオーズドライバーに入っているタカ、トラ、バッタのメダルとシャチ、ウナギ、タコのメダルを交換しオーズキャナーでスキャンする。

『シャチ・ウナギ・タコ』

『シャシャシャウタ・シャシャシャウタ』

歌が鳴りオーズはシャチを模した頭…… シャチヘッド、ウナギを模した腕…… ウナギアーム、タコを模した足…… タコレッグのコンボ…… シャウタコンボになる。

「さて、行くぜ！」

オーズはシャウタの特殊能力である液化化を使いギガンテスヘブンを射出する針の雨を掻い潜りギガンテスヘブンの後ろに回り実体化しウナギアームの特徴である電気ウナギウィップをギガンテスヘブンの首に巻きつけ電撃を流し込んでダメージを与える…… ボルタームウィップを使う。

「はいよ！……ってな」

「GIIIIII……」

ギガンテスヘブンは動きがだんだん鈍くなっていく。

「これで決める！」

オーズはオーズドライバーをオースキャナーでスキャンする。

『スキャニングチャージ』

オーズは一度液化化して高く跳躍し電気ウナギウィップで拘束し引き寄せながら、次にタコレッグの能力で足を8本に分離させ急降下しつつドリル状に変化させたタコレッグでドリルキックの要領で貫く…… オクトバニツシュ をギガンテスヘブンに直撃させる。

「GIIIIIIII!!」

オクトバニツシュが直撃したギガンテスヘブンは悲鳴をあげながら爆散し消滅した。

「はぁ……」

貴大は変身を解除しながらこれから起こる今日を凌ぐ激戦を思いため息をつくのだった。

第3話 『真実』（後書き）

どーも天です！

天「紅蓮の業火燃える街♪ 邪悪の声が招く闇♪ 黙示録の日は迫る♪」

貴「その歌を知っている人はいるのか？」

天「さあ？」

貴「おいおい……」

天「さて今回はこれ以上話す事が無いのだが……」

貴「ならやらなくてもいいだろ……」

天「まあとりあえず誰得？俺得！俺達のライダー大戦！ライダーバトルーナメント（+怪人達）のエントリー募集も残す所あと一週間ほどだ」

貴「待て待て、なんか増えてるぞ」

天「何人か怪人のエントリーがあつたんだよ」

貴「成る程な……」

天「現在エントリーしてくれている作者様は門矢光様、闇色の月様、カイ（海）・R・銃王様、ブラッキン様、ベルト様だ！」

貴「参加人数は12人（ウチのキャラも含む）だ」

天・貴「まだまだ皆様の参加を待ってます」

カイ（海）・R・銃王様、ブラッキン様、ベルト様、闇色の月様、
霞 空斗様、感想ありがとうございます！

ご意見や感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは

第4話 『想定外の来訪者』（前書き）

貴大の持っているカードは現在32枚

第4話 『想定外の来訪者』

貴大が目覚めるとそこは夜の公園、そこに白いマフラーのようなものを巻いた青年と黒衣服を着た青年が立っていた。

「紅渡に剣崎一真か……管理者が俺に何のようだ？」

貴大の疑問にマフラーをした青年…… 紅渡 が答える。

「プロト…… 大変な問題が発生しました」

「大変な問題…… ウルトラショックカーのことを言っているのか？」

「ええ、そうです。ウルトラショックカーは形振り構わず様々な世界から悪の組織を引き込んでかなり強大な勢力になっているのです」

「ああそれは知ってるがそれについては管理者と守護者は別々に動くって事になっていたはずだが？」

「ええ本来はそうなんですが……」

渡の言葉を黒い服を着た青年…… 剣崎一真 が続ける。

「そうも言っていられなくなった」

「どついう事だ？」

貴大の疑問に再び渡が。

「ウルトラショックの力はあまりにも大きく僕たちの仲間とは次々と倒れていったのです」

「残ったのは俺達二人だけだ」

一真の言葉に貴大は驚愕する。

「おいおい、冗談だろ……あいつ等が簡単にやられるとは思えないんだが」

「冗談で済めば良いのですが……」

「残念だが冗談を言っていていられる余裕は俺達には無い」

渡と一真がそれぞれ返す。

「戦えるのは俺達とお前等だけか？」

貴大の疑問に渡が。

「いえ、ディケイド達にも協力を要請し共に戦ってもらえる事になりました」

「そうか、それで用件はこれだけか？」

「いえ、用件はもう一つ……」

「プロト……お前が世界を守るかどうか……」

「「試させて」もらいます・もらつ（！）！」「」

「ガブっ！」

渡と一真がそういうと渡はキバツトバツト三世に手の甲を噛ませると類にステンドグラスのような模様と腰に赤いベルトが出現する、そして一真はブレイバツクルにラウズカードのスピードのA……チェンジビートルのカードを挿入し腰に装着する。

「そういうことかよ……」

貴大はプロトドライバーを腰に装着し左手をドライバーにスライドさせながら腰の右側辺りまで持つていき右手を左肩辺りまでもつて行く。

「『『変身！』』」

貴大は右手を斜めに下げつつドライバーにスライドさせ左手を腰の反対側に持つていき渡はキバツトを赤いベルトに装着、一真はブレイバツクルのレバーを引く。

『mode Proto』

『Turn Up』

電子音が鳴り貴大は仮面ライダープロト プロトフォーム に渡は仮面ライダーキバ キバフォーム に一真は仮面ライダーブレイドに変身した。

「さあ、行くぜ？」

貴大の言葉を合図に三者が一斉に走り出す。

「ウエエエエー！」

ブレイドが剣型のカードリーダー…… ブレイラウザー でプロトに斬りかかる。

「おっと！」

プロトはブレイドの攻撃をかわし裏拳を叩き込む。

「ハッ！」

ブレイドがよろけると今度はキバがプロトに飛び掛る。

「おらっ！」

プロトはキバにあわせて後ろに飛びそのままの体制で蹴りを入れる。

「ぐっ……」

キバは転がりながら体勢を立て直し今度はプロトに向かって蹴りを入れる。

「ぬおっ……」

プロトはキバの蹴りを腕で防ぎ弾いてお返しと言わんばかりに蹴りを入れる。

「がっ……」

キバは耐え切れずに転がる、そしてプロトは追撃をかけようとするが。

「俺を忘れるな！」

ブレイドが乱入しプロトは追撃できないままブレイドの攻撃をかわし続ける。

「まったく……剣対素手は面倒だな！」

そう言いながらプロトはブレイドの腹に蹴りを入れ距離を開けると1枚のプロトカードを取り出しプロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE DEN・O』

プロトの腰にデンガッシャーが出現、それを組み立てソードモードにするとブレイドの攻撃を受け止め鏖迫り合いになる。

「なかなかやりますね……ならこれで！」

一人離れていたキバは腰にある青い笛…… フェッスル をキバツトに吹かす。

「ヨッシャー行くぜ！ガルルセイバー！」

笛の音が鳴ると何処からかガルルセイバーが飛んできてそれをキバがキャッチすると左手と胸の装甲そして複眼が青くなり ガルルフオーム に変身する。

「グルル……」

キバはブレイドと鎧迫り合いをしているプロトに襲い掛かる。

「ちっ！」

プロトは舌打ちをしながらブレイドの腹を蹴りその勢いを利用して距離をとりキバの攻撃をかわす。

「こつちも剣持ちかよ面倒だな！」

そう言いながらプロトは再びプロトカードを一枚プロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE ZERONOS』

更にプロトの腰にはゼロガッシャーが出現、それを組み立てサーベルモードにする。

「さあ来いや！」

プロトはブレイドのブレイラウザーをゼロガッシャーで受け止めキバのガルルセイバーをデンガッシャーで弾く。それを何度か繰り返すとプロトは何か思いついたのだろう2体と距離を開ける。

「さてそろそろ終わりにしようか」

貴大は仮面の奥でいやらしい笑いを浮かべながら1枚のプロトカードをプロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE DECADE』

デングッシャーとゼロガッシャーが消え代わりにライドブッカーが右腰に出現する。

「はあっ!!」

キバとブレイドはプロトに向かって攻撃を繰り出そうとするがその前にプロトは1枚のライダーカードをプロトドライバーに挿入する。

『FINAL FORM RIDE B・B・B・BLADE』

「え、な、それは……ウソダンドコードン!？」

ブレイドは形が変わって行き巨大な剣……ブレイドブレードに変化しプロトの手に収まる。

「そらよ!」

プロトはブレイドブレードでキバを斬り裂き更に1枚のライダーカードをプロトドライバーに挿入する。

『FINAL ATTACK RIDE B・B・B・BLADE』

ブレイドブレードの刀身が光り巨大な刃を形成しその刃で敵を斬る……
ディケイドエッジをキバに放つ。

「うわああああ!!」

キバは装甲から火花を散らしながら転がり変身が解除され渡に戻る。

「ほらよー!」

プロトはブレイドブレードを用済みと言わんばかりの勢いで投げ捨てるとブレイドブレードはブレイドに戻る。

「くっそー!トラウマを掘り起こしやがって!」

「戦いつてのはそついうものだろ?」

「う、うるさい!ウエエエエ!」

ブレイドはブレイラウザーで切りかかろうとするがプロトはそれより早く1枚のライダーカードをプロトドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE INVISIBLE』

プロトはブレイラウザーが触れる瞬間、2体に分裂するように残像を残し消える。

「ど、どこだ!?!」

ブレイドはプロトを見失いキョロキョロと探していると。

『FINAL ATTACK RIDE DE・DE・DE・DE
CADE』

ブレイドの後ろに数枚のホログラムカードが出現、ブレイドはそれに気付き振り返るが。

「はあああああ！！」

プロトは最早ブレイドの眼前に居り回避が間に合わず ディメンションキック がブレイドに直撃する。

「ぐわあああああ！！」

ブレイドは転がり変身が解除され一真に戻る。

「まあざつとこんなもんか？」

プロトは変身を解除し貴大に戻る。

「ええ十分です、それではプロト……世界は頼みましたよ」

渡がそういうと渡ると一真は後ろにある銀のオーロラの向こうへと姿を消した。

「それじゃあ俺も戻るか」

そう言いながら貴大も後ろにある銀色のオーロラの向こうへと消えていった。

・・・

貴大が気がつくところにはベットの上で服装も寝間着だった。

（夢か？）

そう思う貴大であつたがその手にはキバとブレイドのプロトカードが握られていた。

第4話 『想定外の来訪者』（後書き）

どーも天です！

天「突然だが皆様に聞きたい事がある」

貴「いきなりどうした？」

天「いやあちよつと気になってな、つで質問の内容なんだがこの中でどれを知っているか知らないか教えて欲しい」

11eyes、D・C（ダカーポ）シリーズ、とあるシリーズ、リリカルなのはシリーズ、魔法少女まどかマジカ、灼眼のシャナ。

天「こんな所か」

貴「何故こんな事をする？」

天「今出した名前はこの小説で世界として書こうかと思ってる作品なんだ（D・Cシリーズは微妙）」

貴「なぜD・C？」

天「元々は舞衣じゃ無くてD・Cのここの予定だったんだがついてこさせる理由が無くて断念した」

貴「そういえば士郎も若干設定が違ってたよな」

天「ああ、最初はディケイドだったんだがFateとあまりにも関

係なさ過ぎたんで却下になった」

貴「んで次はクウガだったっけ？」

天「ああ、別のサイトで士郎がクウガつてのがあったんでそうしようかと思ったんだが小野寺と被るから却下になって、それで色々考えた所魔術つながりでキバになった」

貴「でもここまでキバの設定をいじるんだったらいつそオリジナルのほうが良かったんじゃないか？」

天「それを言うな！」

貴「まあいいけど……」

天「さて気を取り直して『誰得？俺得！』に参加してくれる読者様は門矢光様、闇色の月様、カイ（海）・R・銃王様、ブラッキン様、ベルト様、斬空様、桐生 乱桐様だ！」

貴「それで参加キャラクターは15人残りわずかだがまだまだエントリー募集中だぜ！」

門矢光様、闇色の月様、カイ（海）・R・銃王様、ベルト様、斬空様、桐生 乱桐様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

お知らせ

天「いきなりだが皆様にお知らせしたい事がある！」

貴「なんだいきなり？」

天「ついに『誰得？俺得！俺たちのライダー大戦！ライダーバトルトーナメント（+怪人達）』が開催されました！」

貴「ここで言う事なのか？」

天「だって一応活動報告でも言うけどお気に入りユーザー登録していない人はここで言わないとわからないじゃないか」

貴「……ならここで言えば活動報告はいらないんじゃないか」

天「細かい事は気にするな！」

それでは

第5話 『罇』（前書き）

現在貴大の持っているプロトカードは34枚。

第5話 『罖』

貴大たちは鮫島の事務所で今後の事を相談していた。

「さて……これからどうするよ?。」

最初に切り出したのはシュウイチ。

「確証は得た……が正直証拠がないんだよなあ……」

士郎が頭を抱えながら悩む。

「いつその事正面から問い詰めるとか!。」

「それだと多分はぐらかさた後に対策をとられて終わりだと思うよ」

ミホの意見をシンジがバツサリ切り捨てる。

「一体どうしたら……」

悩む舞衣と一同……だが貴大だけは違っていた。

「なら俺の作戦に乗ってくれ」

・・・

数日後の夜、貴大は一人で部屋に籠ってとある記事を書いていた。

「ふっふっこんこんなもんでいいかな?。」

その内容はもちろん白鳥ユイ殺人事件のものと白鳥ユイが残した事件のものをまとめていたのだが。

——キイン——

貴大は何かを感じ後ろを振り向くとそこにはリュウガが立っていた。

「！」

リュウガは貴大の首を掴み絞めはじめる。

「……答え、ろ……お前、は、くろ、さき……リュウ、ジか？」

苦しみながらの貴大の質問にリュウガは。

「ああ、そうだ」

「なら、しらと、り……ユイ、を……」

「ああ、俺が殺した……もういいか？　俺としてはさっさと死んで欲しいんだが？」

淡々とこたえるリュウガに貴大は。

「さい、ごに……もう、一つ……」

「全く……なんだよ？」

「悪いが……俺は……死ぬ気は、ない！」

貴大は腰にプロトドライバーを出現させ。

「変身!!」

プロトドライバーに両手をスライドさせると。

『Mode Proto』

リュウガの後ろに銀色のオーロラが出現しそれが貴大に向かって移動し貴大を過ぎると貴大はプロトに変身する。

「お返しだ!!」

プロトはリュウガの腹を蹴り飛ばしリュウガを引き剥がす。

「ぐっ……貴様!!」

リュウガは反転し先程自身が出てきた鏡に飛び込む。

「おっと、逃がすかよ!!」

プロトはプロトカードを取り出しプロトドライバーに挿入する。

『ABILITY RIDE DECADE』

「しゃあ!!」

プロトも先程リュウガが飛び込んだ鏡に飛び込んだ。

・・・

プロトから逃げるためにミラーワールドに逃げ込んだリュウガだったがそこには龍騎、ナイト、ファム、アビスが待ち構えていた。

「貴様等！　なんで！」

「そんなもん、お前がまんまと俺達の罠にはまったからに決まってるじゃねーか」

リュウガの問いに答えたのは後ろからリュウガを追って来たプロトだった。

・・・

数日前、貴大はその作戦の内容をシュウイチたちに話していた。

「まあ簡単に言えば俺を囷にして罠を張る、まず俺が記事を書く、そしてその情報を黒崎に密かに流す」

「成る程！　つまり黒崎が貴大を殺しに来る所を捕まえるって訳か！」

士郎の回答に貴大は「その通り♪」と嬉しそうに言う。

「でもそれに引っ掛からなかったらどうすんの？」

シュウイチの疑問に貴大は。

「そこで辰巳の出番だ！」

シンジを指差しながら言う。

「えっ僕？」

シンジは驚きながら貴大に聞き返す。

「イエース……と言っても正確にはお前の雑誌だけだな」

「成る程ねえ、メディアの力は強大だからねえ……そこまでしちゃったらマスコミが押し寄せて最悪警察も動かなきゃいけなくなるって事か」

貴大の言葉にシュウイチが補足する。

「理解が早くて助かる……んで士郎には予めこれを渡しておく」

そう言つて貴大が差し出したのはナイトのカードデッキだった。

「おいおいそんなことしたら裁判資格を失うぞ！」

シュウイチは慌てるが……。

「そこら辺は問題ない、黒崎リュウジさえ捕まれば裁判はやり直し……その時には俺たちは居ないしそもそもライダー裁判自体必要ないだろ」

「まあ確かに……」

貴大の言葉に納得するシュウイチ。

「と云うことで各自できることをするように！ 解散！」

・・・

そして現在。

「ま、そついうわけだから諦める」

プロトはリュウガに経緯を説明する。

「く、くそおおー！！」

リュウガは怒り狂いアドベントカードをブラックドラグバイザーに挿入。

『SWORD VENT』

リュウガの手にドラグセイバーが出現しプロトに切りかかるがライドブッカード ソードモード で受け流され強烈な一撃を叩き込まれる。

「がつ……く、クソがーーーー！！」

リュウガは1枚のアドベントカードを取り出すとブラックドラグバイザーが変化し龍の頭部を模した拳銃タイプの召喚機 ブラックドラグバイザー ツバイへと変化それにアドベントカード サバイブ漆黒 を挿入する。

『SURVIVE』

「ぐあああああーーーー！！！」

リュウガの身体を黒炎が包みそれが晴れるとリュウガは リュウガ
サバイブ に変化する。

「クソがーーーー！！！！！！人をバカにしやがってー
ーーーー！！！」

リュウガサバイブはブラックドラグバイザーツバイのドラグブレー
ドを展開しプロトに斬りかかる。

「ぬおっ！」

プロトはライドブッカーで受け止められるが押し切られ連続で斬り
つけられ転がる。

「このっ！」

「やあ！」

ナイトとファムがリュウガに斬りかかるがリュウガサバイブはファ
ムのプランバイザーを素手で受止めナイトのダークバイザーをブラ
ックドラグバイザーツバイで受け止める。

「鬱陶しいんだよ雑魚どもが！！！」

リュウガサバイブはプランバイザーとダークバイザーを弾きナイト
を斬り付けファムを蹴り飛ばす。

「がっ！」

「あぐつ！」

ナイトとファムは大ダメージを受け転がる。そして龍騎とアビスはそれぞれアドベントカードをバイザーに挿入する。

S
W
O
R
D

V
E
N
T

龍騎はドラグセイバーをアビスはアビスセイバーをそれぞれ構えリ
 ユウガサバイブに向かって行く。

「面倒な奴等が!!」

リュウガサバイブはブラックドラグバイザーツバイにアドベントカードを挿入する。

A
D
V
E
N
T

「G
A
A
A
A
A
A
A
A
! !」

リュウガサバイブの後ろからブラックドラグランザーが出現、ブラックドラグランザーは火炎弾を放ちアビスに直撃する。

「ぐわあ！！」

アビスは仰け反り吹っ飛ばされ転がる。龍騎はドラグセイバーでリュウガサバイブを攻撃するものの簡単に捌かれ蹴りを喰らった後ブラックドラグバイザーツバイで連続で切りつけられ転がる。

「クスはクスらしく地べたを這いずり回って居やがれ！！　ハッハッ！！」

両腕を広げながら上機嫌のリユウガサバイブ……だが。

「デメエちよつと黙つてろ……」

そう言いながら起き上がるのはプロト……いやプロトが起き上がるのを合図に全員が起き上がる。

「クスどもが！！　何で起き上がるんだよ！！」

リユウガの問いに。

「お前みたいな悪党を放って置けるわけないだろ！！」

ナイトが。

「お姉ちゃんの仇であるアンタを倒すまで絶対に倒れない！！」

ファムが。

「……たまには正義の味方ってのも悪くないって思ってたさ」

アビスが。

「レンさんの無罪を勝ち取るまで僕は諦めない！！」

龍騎が。

「人の人生を狂わしたテメエが許せないんだよ!!」
ものがたり

プロトがそれぞれ答えると龍騎、ナイト、ファム、アビスの胸辺りから光が現れプロトの手に集まると光はそれぞれのプロトカードへと変化する。

「……カードデッキと融合してやがったのか」

プロトは納得しプロトカードをケースへしまうとリュウガサバイブへと視線を向けるとリュウガサバイブは怒り狂っていた。

「ゴミドモガーーーーー!!!!!!」

リュウガサバイブは即座にブラックドラグバイザーツバイにアドベントカードを挿入する。

『SHOOT VENT』

リュウガサバイブはブラックドラグバイザーツバイからマーキングレーザーを放って敵をロックオンし、ドラグランザーの火球を浴びせる。メテオバレットをプロトに放つ。

「やばっ!」

メテオバレットはプロトの眼前へと迫るのだった。

第5話 『罨』（後書き）

天「どーも作者のです!」

貴「どーも主人公の貴大だ」

天「今回は説明は特に無い!」

貴「俺はこの後どうなる事やら……」

闇色の月様、ブラッキン様、ベルト様、カイ（海）・R・銃王様、
斬空様、桐生乱桐様、感想&ご指摘ありがとうございます!

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは

第6話 『鉄壁の亀』（前書き）

現在貴大の持っているプロトカードの数は42枚。

第6話 『鉄壁の亀』

リウガサバイブはブラックドラグバイザーツバイからマーキングレーザーを放って敵をロックオンし、ドラグランザーの火球を浴びせる。メテオバレットをプロトに放つ。

「やばっ！」

プロトは防御体制に入るがメテオバレットは間に入ってきた亀型のプロトモンスター……プロトトータスによって防がれる。

「お待たせしましたマスター」

「全くお前等は揃いも揃ってギリギリにきやがる……もしかして狙ってるのか？」

プロトトータスに対し文句を言うプロトだが。

「はあ……まあいい行くぞ！」

ため息をつきながら構える。

「了解ですマスター！」

「変身！ー！」

掛け声と共にプロトトータスが左手に装着される。

『Mode Tortoise』

プロトトータスはトータスシールドに変形しトータスシールドから水流が溢れ出てプロトを包みそれが消えるとプロトは両肩と胸部に亀の甲羅を模した装甲と右手には斧と槍が合体したような武器 トータスハルバート が追加された トータスフォーム へとフォームチェンジする。

「調子に乗るな！ このクズが！！」

リュウガサバイブはプロトをブラックドラグバイザーツバイで斬り付けるがプロトはそれを防ぐ事も避ける事もせず真正面から受ける。

「……その程度か？」

プロトはリュウガサバイブの右腕を掴み右手に持ったトータスハルバートで連続突きを喰らわした後リュウガサバイブから手を放し斬り付ける。

「がああああああ！！」

リュウガサバイブは盛大に吹っ飛び転がるが直ぐに起き上がり。

「クソが！！ 死ね！！」

リュウガサバイブはアドベントカードをブラックドラグバイザーに挿入する。

FINAL VENT

G Y A O O O O O O O O O O ! !

ブラックドラグランザーにリュウガサバイブが飛び乗りそのままブラックドラグランザーが変形、バイクモードとなって火炎弾を連続発射しながら車体で相手を踏み潰す。ドラゴンファイヤーストームを発動する。プロトはトータスシールドを展開してドラゴンファイヤーストームを受け止める。

「シネエエエエエエエエエエ！！」

「……ふんっ！！」

しばらくの競り合いの後プロトはドラゴンファイヤーストームを防ぎきりトータスハルバートで一閃、リュウガサバイブを弾き飛ばす。

「があああああああああ！！」

リュウガサバイブは苦しみながら転がりリュウガに戻る。

「お前の手札は全て潰した……あきらめろ！」

「まだだ！！ まだこれがある！！！」

リュウガが取り出したのは掌サイズのカプセル、その中身は黒くて醜いドロ……この世全ての悪^{アン}だった。

「！ 待てそれは！！！」

リュウガはプロトの制止を無視しカプセルを握りつぶすとこの世全ての悪は膨れ上がりリュウガとドラグブラッガーを飲み込み始める^{アン}。

「な、なんだこれは……ギ、ギャーーーーー!!!」

リュウガは悲鳴を上げながらこの世^{アンリマユ}全ての悪に飲み込まれジェノサイドのような形の青黒い炎のような異物へと姿が変わる。

「G A A A A A A A A A A A A A A A ! !」

異物は既に人の面影はなく暴れるだけだった。

「厄介な事になったな……」

プロトが異物を睨みながら思考していると後ろから突然。

「何だか面倒な事になってるね」

ディエンドがプロトに声をかける。

「何のようだ海東？」

「君達が黒崎リュウジをひきつけてくれたおかげでお宝が手に入ったからお礼をしておこうかと思ってね」

そう言つてディエンドが取り出したのは 疾風と烈火のサバイブだった。

「まあ僕が狙つてたお宝じゃなかったのは残念だけどね」

そう言いながらディエンドは立ち去ろうとするが。

「ちょっと待てよ海東!」

プロトが呼び止める。

「なんだい？」

ディエンドが振り返った瞬間。

「なあ、それくれよ」

プロトはそう言いながら1枚のプロトカードをプロトドライバーに挿入する。

『EXTRA RIDE STEAL』

突如ディエンドの持っていた2枚のサブイブのカードが消え代わりにプロトの手に出現する。因みにプロトが使ったのは以前紹介した使い捨てのサブプロトカードだ。

「っ！ 貴大、君は！」

憤りを隠せないディエンド。

「まあそう怒りなさんな、後でこれに引けをとらないお宝って奴をくれてやるからよ」

「くっ……今の言葉忘れないでくれよ！」

無理矢理納得したディエンドはライダーカードをディエンドドライバーに挿入する。

『ATTACK RIDE INVISIBLE』

ディエンドは残像を残し姿を消す。プロトはディエンドが消えるのと同時に龍騎とナイトに駆け寄り。

「お前等、これを使い！」

プロトは龍騎に サバイブ烈火 をナイトに サバイブ疾風 を渡す。

「いいのかなあ？」

「おいおい……流石にこれは……」

龍騎とナイトは戸惑うが。

「問題ねーよ、それに今は四の五の言ってられる状況じゃねーんだよ」

龍騎とナイトはプロトに押し切られるように受け取るとナイトのダークバイザーは盾形のバイザー…… ダークバイザー ツバイ に龍騎のドラグバイザーは拳銃タイプのバイザー…… ドラグバイザー ツバイ に変化した龍騎とナイトはそれぞれのバイザーにサバイブのカードを挿入する。

『『SURVIVE』』

龍騎は紅蓮の炎にナイトは風に包まれそれが晴れると龍騎は 龍騎 サバイブ にナイトは ナイトサバイブ に変化した。

「おお、これは！」

「すごい……力が沸いてくる！」

「さてそろそろ時間がやばいからな、一気に決めるぜ！」

龍騎サバイブとナイトサバイブはプロトの一言に2人は頷きファムとアビスが合流する。

「まずは私からね！」

ファムはブランバイザーにアドベントカードを挿入する。

『FINAL VENT』

異物の後ろにファムの契約モンスターであるブランウイングが出現し突風を巻き起こし異物を吹き飛ばす。

「やあ！」

吹き飛ばされた異物はファムの元に一直線に飛びファムの持っているウイングスラッシャーで切り裂かれる ミスティーラッシュユが直撃する。

「G A A A A A A A A A A A」

苦しみながら起き上がる異物に今度はアビスが。

「今度は俺の番かな」

アビスはアビスバイザーにアドベントカードを挿入。

『FINAL VENT』

アビスの前にアビスドンが出現、アビスドンが敵に攻撃する アビスダイブ が異形に直撃する。

「行きましょうシンジさん！」

「うん行こう士郎くん！」

龍騎サバイブとナイトサバイブがそれぞれのバイザーにアドベントカードを入れる。

『FINAL VENT』

ドラグレッダーがパワーアップした ドラグランザー とダークウイングがパワーアップした ダークレイダー がそれぞれ龍騎サバイブとナイトサバイブの背後に出現し龍騎サバイブとナイトサバイブは飛び上がりそれに合わせるように2体のモンスターは飛翔する。

「はあああああああ！！！」

ナイトサバイブはダークブレードを携え、背中のマントで自身の体をドリル状に包んでダークレイダーが放つダークトルネードと共に敵を貫く 疾風飛翔斬 を、龍騎サバイブはドラグランザーの火炎と共に敵飛び蹴りを放つ ファイヤードラゴンライダーキック を同時に異物に向けて放ち異物を貫く。

「GIIIIIIIIIIIIIIIIIIII!!」

もがき苦しむ異物。

「最後の一発、行くぜ!」

プロトはブレイカーカードをプロトドライバーに挿入する。

『Tortoise Breaker』

プロトはトータスハルバートを素早く回転させ勢いがついたところに一回転しそのままトータスハルバートを投げる トータスブーメラン で異物を斬り裂く。

「GIIIIIIIIIIIIIIIIIIII!!」

異物は真つ二つに裂け爆散し消滅し残ったのはリュウガのカードデツキだけだった。

・・・

数時間後、羽黒レンは釈放、決め手となったのは俺が自分の部屋に予め仕掛けておいた隠しカメラの映像だった。そして警察は黒崎リユウジを指名手配し本人は逃亡した物として今後も搜索が続くそうだ。

「それで貴大、2枚のサバイブ以上のお宝は何処にあるんだい?」

貴大に詰め寄る大樹。

「はっ？ 何のこ……」

貴大はとぼけようとするが……。

「とぼけようとしたってそうはいかないよ！」

大樹は貴大にディエンドライバーを突きつける。

「はっはっはっ！ 冗談決まってるじゃないか……ほらよ！」

冷や汗をかきながら貴大は小瓶を大樹に投げ渡す。

「これはなにかな？」

「それはかのアーサー王が愛した料理に使われていた幻のスパイスだ！」

貴大は自信満々に答える。

「ほ、本当にいいのか？」

「もちろんだ！」

「はっはっは♪ サバイブのカードがちっばけに思えてきたよ♪」

大樹はスキップしながら去り際に「イエスッ！」と小さくガッツポーズしながら去って行った。

「あーあー……いいのかなあこれ？」

貴大はそう言いながらサバイブ漆黒のカードを取り出す。

「お前あれって……うちにあったコショウだよな？」

「ん？ ああ、あれは衛宮さんの家から拝借させていただいた……でも間違ってはいないだろ？」

「まあ……そうなんだけどな……」

「……いいのかな？」

呆れる士郎と舞衣。

「そんな事より次に行こうぜ！」

「ああそうだな！」

「次はどんな世界なのかな？」

「さあな……ただ着いていきなりゾンビとドンパチとかは勘弁して欲しいぜ」

3人はそういい合いながら次の世界へ旅立つ。

????.

そこは貴大たちが次に行く世界。『魔導師』と呼ばれる白い少女と『騎士』と呼ばれる赤い少女がぶつかり合う。

この世界が貴大達……いや貴大の大きな転機になるとはまだ誰も知

らない。

第6話 『鉄壁の亀』（後書き）

天「どーも！ 天です！」

貴「どーも、貴大だ……今回はプロトの強さについて説明するぞ！」

天「プロトフォームは各ライダーの通常フォームより少し上ぐらい、他のフェニックス、バット、トータスは強化フォームと最強フォームの間、若干最強フォームよりです」

貴「ダークネスに関しては俺の感情にの度合いによって強さが変わるから通常フォームより弱い時もあれば最強フォームを凌駕する場合もある」

天「今回出てきた異物については分かる人はジェノサイダーが無限アンリミテッドレイズデットの残骸のようになったと思ひ浮かべてくれれば分かりやすいぞ」

闇色の月様、カイ（海）・R・銃王様、ベルト様、感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

第1話

『これは最早不幸じゃなくて呪いじゃないのか？』

b y 貴大

(前書

現在貴大の使えるカードは42枚。

第1話 『これは最早不幸じゃなくて呪いじゃないのか? b y 貴大』

銀のオーロラを潜り抜け新たな世界に辿り着いた御一行、だがある異変に士郎が気付いた。

「あれ、貴大は?」

士郎と舞衣が辺りを見回すが貴大が居ない……恐らくはぐれたのだろつ。

「士郎先輩、これからどうしよう?」

「どうしようって言われてもな……貴大が居ないんじゃないのか? 何の世界か分からないからな、とりあえず情報収集だな」

士郎は頭をかきながら舞衣の質問に答え動こうとした瞬間あたり一帯に結界が張られる。

「!」

「え、なにこれ?」

戸惑う舞衣、士郎はあたりを見回してから。

「近くに魔力を使ってる奴が居るからとりあえずそこへ行こう!」

士郎の言葉に舞衣は頷き2人は走り出した。

・・・

一方こちらは貴大サイドなのだが……彼は今木箱に入って腕と足と頭を出している状態、そして目線の先には3人の黒服の男と縄で縛られた金髪と紫の髪の少女が居た。

「「「「「……「「「「」

その場に起こる長い沈黙、それを破ったのは貴大だった。

「……ど、どうも」

「……始末しろ！」

貴大に向かって容赦なくマシンガンを撃つ黒服たち。

「どわああああああ！ やっぱいい！」

貴大は木箱ごと体を倒しそのまま転がりながらマシンガンを避ける。

「逃がすな殺れ！」

「やられてたまるかよ！」

貴大は転がりながら起き上がり反転してマシンガンの弾をかわしながら接近、黒服の一人の顔面を殴りつける。

「じぶあー！」

黒服の一人を倒した貴大はすぐさま二人目に回し蹴りを喰らわし最後の一人にはアップパーカットで顎を突き上げる。

「はあ、不幸だ……」

貴大はうな垂れながら少女達の縄を解き解放する。

「ほらとつと行け、そして戻ってくんな」

貴大は面倒そうに少女たちを追い払う、そして。

「隠れてないでとつと出て来い！」

心底嫌そうな顔をしながら言う貴大。

「あら、ばれちゃった」

影から出てきたのはクネクネしたがいのいいオカマ…… 泉京水
だった。

「……気持ち悪い視線向けやがって」

「いい男は嫌いじゃないわ！！ ほらアンタ達立ちなさい！！」

京水の一言で黒服の男達は立ち上がりガイアメモリを取り出し起動させる。

『Violence』

『Nasca』

『Iceagee』

「それじゃあたしも！」

京水もガイアメモリを取り出し起動させる。

『Luna』

京水と黒服のそれぞれが身体にガイアメモリを刺し京水はルナドーパント、黒服たちはそれぞれバイオレンスドーパント、ナスカドーパント、アイスエッジドーパントに変わる。

「はぁ……この世界に来て一時間足らずでこの状況……俺、呪われてるのかな……」

「おっしやる通り！！」

「肯定すんなゴラア！！」

ルナドーパントの言葉に貴大はキレながら左腕にプロトドライバーを出現させ右腰のカードケースからプロトカードを取り出す。

「今回はこれで行くか……変身！」

貴大はプロトドライバーにプロトカードを挿入する。

『KAMEN RIDER BLADE』

貴大の腰にブレイバックスルが出現し。

『Turn Up』

ブレイバツクルからカブトムシの書かれた青い光の壁…… オリハ
ルコンエメント が出現し貴大がそれをくぐると貴大は仮面ライ
ダーブレイドに変身する。

「さあ、行くぜ」

貴大のその言葉を合図に戦闘が始まった。

・・・

一度戻ってこちらは士郎&舞衣、こちらは魔力を辿り白の服を着た
少女…… 高町なのは が赤いゴスロリ服を着た少女…… ヴィー
タ に襲われている場面に遭遇していた。

「と、飛んでる?」

「無茶苦茶だな……」

舞衣は単純に驚き士郎は自分達の魔術と比べながら驚く。

「つて、考えてる場合じゃなかったな」

士郎は投影魔術で洋弓と矢を作り威嚇がてらにヴィータの帽子を射
抜く。

「なっ!」

第三者の突然の介入に驚くヴィータ、だがその表情はすぐに怒りに
変わる。

「デメエ！ グラーフアイゼン！ カートリッジロード！！」

『ロードカートリッジ』

ハンマー型のデバイス…… グラーフアイゼン がガシャンという音と共に薬莢のようなものを排出しその瞬間ヴィータの魔力が底上げされる。

「でりやあああああああああ！！」

グラーフアイゼンを振りかぶるヴィータ。

「まずい！ トレス・オン 投影開始」

士郎は身体を強化しながら干将と莫耶を投影しグラーフアイゼンを受ける。

「ぐっ……」

「吹っ飛べ！！」

競り合いはヴィータが押し切り士郎を吹き飛ばしビルに激突させる。

「……」

少し冷静さを取り戻したヴィータは内心焦っていた。それもその筈攻撃して来たとは言え彼は少し魔力を持った一般人、であり 魔導師 ではない、そんな彼を全力で叩きつけたのだ無事で居られるはずがない、彼女としては特に問題はないのだが 彼女の主 はそれ

を嫌う。そのためどう言い訳しようか悩んでいると突然魔力でできた矢が飛んでくる、ウィータはそれを防御魔法で防ぎながらそちらに視線を向けるとそこには仮面ライダーキバver・Fateが洋弓を構え立っていた。

・・・

「ぐあ！」

ダメージを受け転がるアイスエッジドーパント、ブレイドは圧倒的な強さでアイスエッジドーパント、ナスカドーパント、バイオレンスドーパントの3体を退けていく。

「これで決まりだ！」

ブレイドは2枚のラウズカードをブレイラウザーにラウズする。

『THUNDER』

『SLASH』

『Lightning Slash』

「はあああああああ！」

ブレイドはブレイラウザーに電気を纏わせ敵を斬る ライトニングスラッシュ で3体のドーパントをすれ違いざまに斬る。

「「「ぐわあああああ！」「」」

3体のドーパントは黒服とガイアメモリに戻り黒服は粒子となって消滅した。

「さあ次はお前だ!」

ブレイドが構えると。

「ホントに強いのね! 嫌いじゃないわ!」

「悪いが俺は好きではないな」

「つれないのね……でも嫌いじゃないわ!」

ルナドーパントは腕を伸ばしブレイドを捕縛しようとするがブレイドはその腕をブレイラウザーで切りながら進む。

「嫌いじゃないわ!」

「黙ってる!」

ブレイドはルナドーパントにをブレイラウザーで連続で斬り付け跳躍、ルナドーパントの後ろに着地するとルナドーパントを蹴り飛ばしラウズカードを2枚ブレイラウザーにラウズする。

『KICK』

『THUNDER』

『Lightning Blast』

「はああああああ……」

ブレイドは地面にブレイラウザーを突き立てながら構えると頭部が赤く発光、そのまま飛び上がり電気を纏った飛び蹴り…… ライトニングブラスト をルナドーパントに向け発動する。

「うええええええええいー!!」

ブレイドのライトニングブラストがルナドーパントにあたる直前、白い影がブレイドに一撃を与えブレイドは吹っ飛ぶ。

「がつ……!!」

ブレイドは転がりながら体勢を立て直し目を向けるとそこには白い体中に牙の様な物が生えたドーパント…… ファングドーパントが立っていた。

「何やってんだよ京水」

「あら闘牙ちゃん助かったわ」

ルナドーパントとファングドーパントはお互い言い合いながらブレイドのほうを向く。

「ちっ面倒な……」

ブレイドは呟きながらプロトカードを取り出しプロトドライバーに入れる。

『KAMEN RIDE KIVA』

ブレイバツクルが消えその代わりに赤いベルトとそれに止まってるキバツとが出現しかもキバツトは既に青いフェッスルを銜えている。

「ガルルセイバー！！」

笛の音が鳴りブレイドの左手にガルルセイバーが出現するとブレイドは仮面ライダーキバ ガルルフォーム に変身する。

「ワイルド系にはワイルド系ってな」

そういったキバはファングドーパントとにらみ合い次の瞬間お互いに駆け出した。

・・・

その頃Fキバはヴィータと激戦を繰り広げていた。

「はあああ！」

「そこだ！」

ヴィータはグラーファイゼンを振るうがFキバはそれを洋弓で受け流しヴィータに蹴りを入れて距離を開け矢を放ち追撃する。

「くっコイツ……強い！」

ヴィータは矢を防ぎながら呟く。

「そりゃ伊達に貴大にボコボコにされちゃいないさ！」

そう士郎は暇さえあれば貴大に鍛錬（と言う名のリンチ）を受けている。まあ本人曰く「リンチ？ はっ士郎が弱いただけだろうが」と言うことらしいのだが……。とにかくそのおかげで士郎はそれなりに戦えるようになっていいる。

「でりあああああああああ！！！」

ヴィータは再びFキバに突撃しグラーフアイゼンを振るうがFキバはそれをスレスレで回避しそのまま蹴り飛ばし洋弓を構えるが何かを感じすぐさま真上に矢を放ち洋弓を破棄し干将と莫耶を作り出し相手の剣を受け止める。

「はあああああああ！！！」

「うおおおおおお！！！」

Fキバは剣を弾き相手を見るとピンク色の髪に騎士を思わせる服装をした女性……。シグナム が立っていた。

「まさかあれを受けきるとはな……！」

シグナムは剣型のデバイス……。レヴァンティン を構えなおす。

「烈火の将シグナムと我が剣レヴァンティン……参る！」

「衛宮士郎……通りすがりの魔術師だ！」

シグナムとFキバはお互い駆け出しぶつかり合う……。はずだったのだが突如落下してきたボロボロのなのによってそれは中断された。

「おい、大丈夫か！」

なのはに駆け寄りFキバが何かを感じFキバはなのはを抱え後方へ飛ぶとFキバたちが先程まで居た場所に黒に所々紫の入った異形…… ジョーカードーパント が飛来してくる。

「あれを避けるとは…… まぐれか実力か何れにせよ戦えば分かるか……」

ジョーカードーパントはFキバを見据えると構える。

「……鴉羽、この子を頼む」

「無茶しないでね……」

Fキバは近くに居た舞衣になのはを託しジョーカードーパントを見据え構える。

「精々楽しませてくれよ？」

「五月蠅い、行くぞ！」

ジョーカードーパントとFキバは駆け出しお互いの拳と剣がぶつかり合う。

「せいっ！」

「あたるか！」

ジョーカードーパントは回し蹴りを放つがFキバはそれをしゃがんで回避し曲がった足をバネのように使い下から斬り上げジョーカードーパントはそれをバックステップで回避する。

「いいねえ！ いいねえ！ 楽しいねえ！！」

ジョーカードーパントはスナップをきかせながらFキバに攻撃を仕掛ける。

「何処が楽しいんだよ……このバカ！」

Fキバは愚痴を言いつつ応戦しジョーカードーパントの攻撃をさばいていきお互い決定打が無いまま距離を開ける。

「はっはっは！ 克己の奴がプロト以外は雑魚だって言ってたが充分強いじゃねーか！」

ジョーカードーパントは嬉しそうに声を上げFキバに向かっていくが魔力の輪…… バインド が身体を縛りジョーカードーパントとFキバは動きを止められる。

「時空管理局です、武装を解除し投降して下さい！」

現れたのは金髪で黒いレオタードにピンクのスカートのようなものが付き更に黒いマントを羽織った少女…… フェイト・テストロツサ だった。

「もう一度言います！ 武装を解除し投降して下さい！」

「……すんなよ……」

「え？」

何かを呟くジョーカードーパントに対し聞き返すフェイトだが……。

「邪魔すんじゃないよー！ このゴミがー！」

ジョーカードーパントはバインドを破壊し跳躍しフェイトに殴りかかる。

『プロテクション』

ジョーカードーパントの攻撃をフェイトが持っていた斧の様な杖の様な鎌の様なデバイス…… バルディッシュ が防御魔法で防ぐが……。

「無駄だ！」

ジョーカードーパントは防御魔法を叩き割りそのままの勢いでバルディッシュを叩き折りフェイトを地面に叩きつける。

「……がはっ」

「死ね！」

苦しそうに顔を歪めるフェイトに対し追撃をかけようとするジョーカードーパントだが。

「鶴翼^{しんぎ}、欠落^{むけつ}ヲ不^{はん}ラズ^{じゃく}」

ジョーカードーパントに向かって干将と莫耶が飛んでくる。

「こんなもん！」

ジョーカードーパントは蹴りで干将と莫耶を弾き飛ばす。

「心技、泰山ニ至リ」
ちから やまをぬき

Fキバは干将と莫耶を再び投影し投げ付ける。

「バカが！」

ジョーカードーパントはその一対も叩き落そうとするが。

「心技、黄河ヲ渡ル」
こころぎ みずをわかつ

「がつ！」

後ろから飛来してきた干将と莫耶に切り裂かれ

「唯名、別天ニ納メ」
せいめい りきゅうにととき

仰け反っている間に前の一対を喰らい、更にFキバはもう一対投影しジョーカードーパントをすれ違いざまに切り裂き。

「両雄、共ニ命ヲ別ツ」
われら ともにてんをいだかず

振り返りその一対も投げると三対の干将と莫耶が集まり 壊れた幻想
タスク によって干将と莫耶は爆発する。 ブローケンファン

「お前の相手は俺だ！」

Fキバは再び干将と莫耶を投影すると爆煙の方へ油断なく構える。

「はっはっ！ そうだよなあ！ そうだよなあ！ ゴミに構う必要はねえよなー！」

爆煙の中からジョーカードーパントが現れ再び構えるが。

「そこまでにしておけ……」

ジョーカードーパントの後ろに銀のオーロラが出現しそこから赤いバイクを模した怪人…… アクセルドーパント が現れる。

「どういつ事だよ！」

ジョーカードーパントはアクセルドーパントに詰め寄るが。

「克己の命令だ、それに向こうはマリアが回収に向かっている」

アクセルドーパントの言葉にジョーカードーパントは詰まらなさそうに。

「ちっ、しゃーねーな……おいFキバ！ この勝負預けたぜー！」

アクセルドーパントとジョーカードーパントは銀のオーロラの中に消えて行った。

・・・

こちらはキバ対ファングドーパント&ルナドーパント。

「はぁ！」

「あたらねーよ！」

キバはファングドーパントの攻撃を回避しガルルセイバーで一閃、腕を伸ばしてくるルナドーパントの腕を斬る。

「こんちくしょー！！」

ファングドーパントの攻撃をキバはスライディングしながら回避しそれと同時にガルルセイバーで斬りつける。再び対峙するキバと2体のドーパント……お互い駆け出そうとするがそこに緑色の竜巻を発生させながら サイクロンドーパント が現れる。

「何のようだマリア！」

吠えるファングドーパントに。

「撤退……克己の……命令」

「克己ちゃんの命令なら仕方ないわね」

「ちっ、覚えてろ！」

ファングドーパントとルナドーパントはサイクロンドーパントの発生させた竜巻に消えた。

「……本当に呪われてるな俺」

一人残された貴大はガツクリとうな垂れながら呟くのだった。

第1話

『これは最早不幸じゃなくて呪いじゃないのか？ b y 貴大』（後書

どーも天です！

天「今回から世界の原作の説明をするぞ！」

貴「今回の世界は魔法少女リリカルなのはA' Sだ！」

魔法少女リリカルなのはシリーズ……2004年から2007年にかけて放送されたシリーズで全3シリーズが放送された。

第一期、第二期は13話、第三期は26話で構成されている。

原作はPCゲームのとらいあんぐるハートシリーズ。通称『魔砲少女アニメ』とも呼ばれている。

天「詳しくはウィキペディア参照で！」

貴「いいのかそれで？」

天「あらすじまで書き出すと後書きの長さじゃなくなるぜ」

貴「それもそうか」

天「さて話は変わりますが以前『コラボしたいなあ……』って言っていたのを覚えているでしょうか？」

貴「その結果何件か依頼が来たんだよな」

天「ああ……そこでコラボを正式に募集させていただきます！」

貴「但し、作者が全く知らない作品などの理由でできない場合がございますのでそこら辺はご了承ください」

カイ・R・銃王様、闇色の月様、ベルト様、O O O T G L S T S T
P B 様感想ありがとうございます！

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言
っていただけると幸いです。それでは

アンケート&裏話

天「すいませんでしたー！ー！」↑土下座

貴大「いきなり何をやってるんだ貴様は……」

天「だってこの数ヶ月更新してないのにやっと更新したかと思えば本編じゃないんだぜ？ 謝るしかないだろ！」

貴「謝るくらいならとつと本編更新しろや！」

貴大「そこは問題ない！ 八割ほどできているから後は俺のやる気が『ウェーイクアップ！』すればできる」

貴大「で？ 何時するんだ？」

天「……」

貴大「黙るなよ……」

天「……テヘ♪」

プロト「……失せろ」

『Proto Breaker』

天「え、ちょ……ぎゃあああああああああああ！ー！」

ここからが本題です。

貴大「アンケートと題名に書いてあったが何をするつもりだ？」

天「今回は好きなライダーを読者の皆様に聞いてみたいと思う」

貴大「好きなライダーってこの小説ではプロトとFキバ、他のを合わせてもカマードとブレイブの4人だけだぜ？」

天「何を言っている……今回のアンケートは仮面ライダーシリーズ全部を対象だ！」

貴大「なんだってー！」

天「ついでに好きな作品&好きな怪人もやろうと思う」

貴大「このアンケートの趣旨は？」

天「ライダーは結果によってお前が変身するライダーの頻度が変わる（かもしれない……）」

貴大「かもしれないってお前なあ……」

天「実際問題、真、Z.O、J、響鬼系は見てないから良く分からない」

貴大「おいおい……」

天「とりあえずアンケートの内容をまとめる」

・アンケート内容はライダー、作品、怪人の三つ

・対象は昭和ライダーシリーズ、平成ライダーシリーズ、天ブランドのオリジナルライダー&怪人

・投票はライダー、怪人は3体、作品は1つ

貴大「特に順位はつけなくても良いぞ」

天「ユーザーの方もそうでない方もどんどん投票してくれるとありがたいです！」

・・・

天「さあ次はプロトの裏話だ！」

貴大「どんな爆弾発言が出るか……」

……衛宮士郎は初期設定ではディケイドだった。

士郎「なんだってー！」

天「はいお疲れー」

士郎「え、俺の出番これだけ？」

天「うん、だから気をつけて帰ってねー」

士郎「……orz」

貴大「扱いがひどいな……」

天「まあ、それは放って置いて裏話だ」

貴大「なんで士郎がディケイドだったんだ？」

天「これを考えてる途中に思いついたのが士郎」ディケイドだったんだよ」

貴大「何故ボツに？」

天「Fateの世界観に会わなかった……キバも合ってたねーよと言う突っ込みは無しの方角でよろしくお願いします」

貴大「次案がクウガだったけか？」

天「うん、他のサイトで士郎がクウガになる小説を見てね……でもクウキ（小野寺クウガ）と被るから辞めてそういやキバも魔術使ってた様な気がしたからキバにしたんだが士郎をファンガイアにできないので設定を変えて今の 仮面ライダーキバver・Fate になった」

……当初のヒロインは鴉羽舞衣ではなくD・Cの白河ことりだった。

天「没になった理由は正直貴大について行く理由が無かったから」

貴大「D・C自体はオーズと組み合わせられるとか考えてたからなあ」

天「願いをかなえる桜の樹つてのがあからそれを使ってグリードが……ってな感じでな」

貴大「作者の考えでは『願い』欲望』だからな」

……プロトは元々カマードの派生フォームだった。

貴大「なん……だとっ！」

説明しよう！ カマードとは天ブランドの作品である『魔法少女リリカルなのは』よみがえりし大地の神』に登場するカブト系オリジナルライダーなのだ！

天「フェニックスたちも元はプロトモンスターではなくゼクターだったのだ」

貴大「資料によるとカマードのライダーフォームも今とかなり違ったらしいな」

天「因みにその当時の必殺技はフィーバーゼクターを使ってたんだ」

貴大「完全にその当時放送してたキバの影響だな」

……プロトの名前の由来は試作品を意味するプロトタイプと守護を意味するプロテクトから来ている。

貴大「……プロトタイプってのは分かるがプロテクトってのは無理がないか？」

天「だってプロテクトじゃあ語呂が悪いし」

・・・

天「最後に以前、活動報告で公開したプロトの画像を公開する!」

あくまでもイメージです……あくまでもイメージです、大切な事なので2回言いました。

プロトフォーム

<http://2569.mitemin.net/i31793/>

フェニックスフォーム

<http://2569.mitemin.net/i31791/>

トータスフォーム

<http://2569.mitemin.net/i31794/>

天「次回からは恐らく本編に戻ります!」

天・貴「それでは」

第2話（前書き）

今回はサブタイトルは無しにしてみました（思いつかなかったただけだが）

現在貴大の使えるカードは42枚

第2話

貴大は現在海鳴大学病院で医師として働いている。

「次の方どうぞ」

次の患者のカルテを見ながら次の患者を呼ぶ。因みに彼の格好はス
ーツに白衣を着て眼鏡をしている。

「失礼します」

入ってきたのは茶髪で車椅子の少女…… 八神はやて とその付き
添いの金髪の女性…… シャマル だった。

「八神さんか…… 検査の結果は可も無く不可も無くって所かな……」

貴大は二人に検査結果を見ながら告げる。

「そうですか、ありがとうございます」

はやてとシャマルは貴大にお礼を言い診察室を出て行った。

「さて…… フェニックス、あの2人の監視を頼むな」

貴大ははやて達が診察室を出たのを確認するとプロトフェニックス
に監視するように告げる。

「わかりました!!」

プロトフェニックスが窓から出て行つたのを確認すると貴大は再びカルテに目を向けた。

・・・

一方こちらは士郎と舞衣、彼等は今時空管理局と呼ばれる組織の次元航行艦 アースラ に居た。……そもそも時空管理局とは次元世界を管理、維持するための機関であり簡単に言えば『警察と裁判所が一緒になったところ』なのだそうだ。……次に次元世界についてだが正直な話、平行世界とは違うと言う事しか分かっていないので明確な違いを問いただされると作者は「俺に質問するな！」と泣きながら走り去って行くことだろう、ただ言える事は並行世界と次元世界が同じ場合は世界に介入し開拓しようとする管理局と世界の安定を望み外部からの介入（例外はあり）を阻止する守護者の間で戦争が起ることだろう。最後に次元航行艦についてはガ。ダムのアイ。マを思い浮かべてくれれば良いであろう。そしてここはアースラの艦長室、そこは純和風で畳が敷いてあったり盆栽が並んでいたりしている部屋で緑の髪の女性 リンディ・ハラウン と黒髪の少年 クロノ・ハラウン 、士郎と舞衣は向かい合って座っていた。

「なのはさんとフェイトさんを助けていただきありがとうございます」

頭を下げるリンディ。

「いやいや、俺達は当然のことをしてただけですよ」

慌てながら言う士郎と頷く舞衣。

「しかし、あの黒い怪物はなんだったんだ？」

「俺達の敵としか言えない」

クロノの質問に士郎は言葉が詰まる。

「せめて貴大が居たら……」

「その貴大さんと言うのは？」

残念そうな舞衣にリンディは貴大について尋ねる。

「俺達のリーダー的存在でいろいろな事を知ってる奴なんですけどはぐれちゃいまして……」

「そう、それは残念ね……」

貴大について説明する士郎と居ない事に残念がるリンディ、こうして彼等の話し合いは続くのだった。

・・・

こちらは貴大サイド、貴大は業務を終えはやて達と接触しようとして行動していたのだが。目的の二人は警官と思わしき服装の3人組に囲まれていた。

「はいはい、ちょっと失礼」

貴大は即座に警官との間に割り込む。

「なんだ貴様は！」

「通りすがりの主治医だよ、彼女達は俺が送っていく、それに……」

警官の質問に答えながら回し蹴りを放ってかわさせ距離を開ける。

「闇の書とその主をお前等ウルトラショックカーに渡す気は無い」

貴大は警官を睨むと警官は自らの服を剥ぎ取りショックカー戦闘員へと変わる。

「イーーーー！！」

戦闘員達はナイフを右手に持ち貴大に迫るが……。

「はぁ！」

貴大は一人目の攻撃を避けてそのままの勢いで右ストレートを顔面に叩き込み二人目には回し蹴りを三人目には踏み込んで頭突きを喰らわす。

「イーーーー！！」

戦闘員達は転がり起き上がれなくなる。

「……終わったか？」

貴大はフーッと息を吐き戦闘員達を油断なく見ていると戦闘員達の後ろに銀色のオーロラが出現しそこから白いボディに青い炎のペイントが入った戦士…… 仮面ライダーエターナル が現れる。

「さあ、地獄を楽しみな！」

親指を下につきたてながら言うエターナルに対し。

「地獄なんて楽しみ飽きたっつの……変身！」

貴大はプロトドライバーを左腕に出現させ1枚のプロトカードをプロトドライバーに挿入する。

『KAMEN RIDER RYUKI』

貴大の腰に竜のような紋章の入ったカードデッキが装填された状態で出現しその後複数の影が重なり無双龍の力を纏った赤き戦士……

仮面ライダー龍騎　へと変身する。

「しゃっ！」

龍騎は気合を入れエターナルに向かって走り出すとエターナルもそれに合わせて走り出す。

「らっ！」

龍騎はエターナルに殴りかかるがエターナルはそれを軽々と避け回し蹴りを放つ。

「おっと！」

龍騎はしゃがんで回避し立ち上がる勢いを利用してアッパーを放つがエターナルはバックステップで回避し距離をとる。

「厄介だな！」

龍騎はカードデッキから一枚カードを取り出し左手に持っている龍の顔を模した箆手型の召喚機である　ドラグバイザー　に入れる。

『SWORD VENT』

音声が鳴ると近くにある鏡から柄の赤い剣……　ドラグセイバー
が龍騎の右手に飛んでくる、それと同時にエターナルもマキシマム
スロットの付いたコンバットナイフ……　エターナルエッジ　を取
り出しお互いにらみ合う。

「……」

沈黙する事一瞬、両者は走り出し武器を振るう。両者の武器は火花
を散らせながらぶつかりそのまま競り合いになるがしばらく競り合
ったあと龍騎はエターナルの顔面に向かってヘッドバットを喰らわ
す。

「グッ……」

エターナルが仰け反ると龍騎はその隙を逃さず押し切りドラグセイ
バーでエターナルを斬り付け、突き刺し、再び斬り付ける。

「ガハッ……」

エターナルは装甲から火花を散らしながら後退、その後龍騎はエタ
ーナルを思いつき蹴り飛ばす。

「グッ……貴様！」

エターナルはよろめきながら黒い泥…… アンリマユ この世全ての悪 の入ったカプセルを握りつぶしエターナルのベルトであるロストドライバーに垂らす。

「あゝ ああああああああああ！！！」

アンリマユ この世全ての悪が消えるとロストドライバーはスロットの片方が黒いダブルドライバーに変化し更に黒いスロットにはDの頭文字が書かれたガイアメモリが刺さっていた。

『Devil Eternal』

「はああああああああ……」

エターナルの全身が黒く染まり複眼は赤に変わり身体はファンゲジヨーカーのように刺々しく変化しEを倒したような角はいびつに歪み体のあちこちに白い炎のペイントが現れエターナルは デビルエターナルへと姿を変えた。

「……新たな地獄を楽しみな」

デビルエターナルはマキシマムスロットの着いた大剣…… エターナルブレイド を振り上げながら龍騎に接近しエターナルブレイドを振り下ろす。

「ぐっ……」

龍騎はドラグセイバーで受けるがドラグセイバーを叩き折られてそ

「……つたく、こんなもん残しやがって……」

龍騎は立ち上がりながらカードデッキから サバイブ烈火 のカードを取り出す。

「備えあれば憂いなし……前の世界でコピーしといて正解だったぜ」
龍騎が持っていたドラグバイザーは龍の頭を模した拳銃型の召喚機である ドラグバイザー ツヴァイ へと変化し龍騎はドラグバイザー ツバイの口の部分を開きサバイブ烈火のカードを装填し口を閉じる。

『SURVIVE』

炎に包まれそれが消えると龍騎は 龍騎サバイブ へと変化した。

「さあ、手っ取り早く決めるぜ」

龍騎サバイブはカードデッキから一枚取り出しドラグバイザー ツバイに装填する。

「SWORD VENT」

ドラグバイザー ツバイの刃の部分である ドラグブレード を展開し構える。

「はああああああ……」

ドラグブレードは炎に包まれる。

「GIIIIIIIIII！」

アンリミテッド・レイズ・デッド
無限の残骸の一体が龍騎サバイブに襲い掛かるが龍騎サバイブはそれを回避しすれ違いざまに横に一閃、更に振り返り上から縦に斬り裂くと無限の残骸は爆散し消滅する。
アンリミテッド・レイズ・デッド

「よし次！」

龍騎サバイブは休むことなくカードをドラグバイザーツバイに装填する。

『SHOOT VENT』

龍騎サバイブの後ろに赤い龍……ドラグランザーアンリミテッド・レイズ・デッドが出現する。
龍騎サバイブはドラグバイザーツバイを無限の残骸に向けドラグバイザーツバイからマーキング弾を発射するとドラグランザーはそれにあわせるように火炎弾を吐き出し無限の残骸に直撃させ爆散させる。
アンリミテッド・レイズ・デッド

「これで最後！」

龍騎サバイブは再びカードをドラグバイザーツバイに装填する。

『FINAL VENT』

「はあ！」

龍騎サバイブは飛び上がりドラグランザーの上に乗るとドラグランザーは変形しバイクモードになる。

「はああああああ……」

龍騎サバイブの乗ったドラグランザーはウイリーしながら無限の残骸^{デッド}に突撃、ドラグランザーは火炎弾を吐き退路を断つ。
アンリミテッド・レイズ・

「だあああああー!!」

龍騎サバイブはドラグランザーの車体で敵を押しつぶす ドラゴン
ファイヤーストーム を放ち無限の残骸に直撃し爆散した。
アンリミテッド・レイズ・デッド

「……はあ」

ドラグランザーから降り変身を解除した貴大は空を見上げながらこれからの事を思いつつため息をつくのだった。

・・・次回予告

敵対する勢力に協力する事になった士郎と貴大。

そしてその夜二人は遭遇し対立する。

二人が出会った最初の夜を思い出しながら二人は激突する……。

第2話（後書き）

どーも！天です！

天「久しぶりだぜこの野郎！」

貴「今まで何してやがった？」

天「ゲームとかゲームとかゲームとか……」

貴「アホが！」↑アツパ-

天「ゲルブウー」↑直撃

貴「さてこのバカは放っておいて今回は次回予告を取り入れてみたんだがどうだっただろうか？」

天「意見がいただけたら嬉しいです！」↑復活

貴「そして前回のアンケートだが今月の15日を締め切りにしようと思う」

天「ユーザーの方もそうでない方も意見がいただけたら幸いです！」

ご意見やご感想、または誤字や脱字、表現がおかしいなどあれば言っていたけると幸いです。それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0900r/>

仮面ライダープロト～闇を使う守護者～

2011年11月9日00時13分発行